
楽しい事件の巻き込まれ方

トータル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽しい事件の巻き込まれ方

【Nコード】

N6117B

【作者名】

トータル

【あらすじ】

火山エンという名前の高校生は、ここらへんでは俺ぐらいしかない。そして、変な母親が拾った変な奴、山野谷海奈のせいで、安心できない生活をするしかなかった人間も、ここらへんでは俺ぐらいだ。そんな俺の目標は、普通に生活することです。

プロローグ

日常、とはなんだろう？

辞書で引いてみると……、”つねひごろ、ふだん、平生”……などといった意味がある。俺の日常は”この家”と”学校生活”にある。勉強とかその他もろもろで忙しいけれど、それでもこれは広い世界の中言えば”平和”と部類されるものなんだろう。

そして、この平和が俺の日常だ。

窓の外。ああ、なんていい天気。今日もすがすがしい朝だ。2階の6畳ほどの部屋には、窓から光が注いでいる。今は朝の7時20分。いつも俺が起きる時間だ。

ベットから起き上がって着替えていると、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「エン。朝ご飯」

聞き覚えのある声だ。俺を産んで、5歳ぐらいまで一生懸命育てた母親の声だ。

「わかってるー」

俺はその声を退けるように言葉を返し、文句を言われないうちに階段を降りてリビングに向かうことにした。

テーブルの上にはいつも通り、しっかりとバランスのとれた朝食がある——わけではなく、今日はトーストが一枚あるだけだった。

俺は椅子に座り思ったことを正直に言う。

「今日の朝ごはん、これだけ？」

「これだけ」

返事はすぐに返ってきた。

これだけか、なら仕方ない。母親はこういう人なんだ。大雑把、面倒くさがり。ついでによくわからんが、クールな一面も持ってた——なんて言い方は都合の良い言い方であって、まあつまり、「

あんま喋らないから家族とのコミュニケーション不足だバカ野郎」
ってわけだ。

生まれた時から大雑把で面倒くさがりだったとかそういうのは、
当時いなかった俺はもちろん知らないでなんとも言えないが、今
の母親が形成された理由が他にあるとしたら、母親の職業だろう。
と言っても、具体的に何をしているかは知らない。自分の母親だろ
とか言われても俺は何もいえない。言えないし言わない。

母親は何かの仕事をしているらしく、『仕事をする』と言いつ
て急にフラフラと外へ出て行ったかと思えば、1週間後に隣の家の
澤山さん家のネコのごとくフラフラと帰ってきたりする。いやいや、
1週間なんて軽い。長い時は1ヶ月いないこともある。ついでに澤
山さんについてだが、今は紹介するほど重要な人物ではないのでカ
ットとする。こんなんが5歳のときから繰り返されているんだから
驚きだ。ついでにこんな生活に慣れてしまった自分にもね。

こんな毎日が繰り返されているんだから、当然何をしているか、
という疑問は沸く。しかし、それを聞いても「あんたは知らなくて
もいい」、と一言で跳ね除けられるだけだった。

ちなみに、この際だから言っておくが、父親とはここ数年あつて
いない。最近顔すら薄れてきた。なぜかって知らないが、そりゃた
ぶん仕事なんだろうよ。

連絡、といえば時々手紙で「元気か？俺は元気だ」と一言、押
し付けがましく書いてあるだけだ。会話すら成り立っていない。意
味がわかんないだろ。押し付けにもほどがあるだろ。もちろん手紙
の送り先はわからない。

しかも、だ。

この二人が家にいない時の掃除、洗濯、料理などの家事全般は全
て俺がやる。もちろんてめえのことだから当たり前っちゃ当たり前
だけど。それでも高校生がこんなんでいいのか？

まあだから、根底を覆すような発言をするのを許してほしいが、
実を言うところな光景いつも通りではないのだ。かなしいことに、

いつもならもうちょっとだけ早く起きて、適当な朝飯の準備をしている。トースト一枚なんてもんじゃない。もつと栄養のあるもんだ。トーストをかじり始める頃には、母親は出かける準備をしていた。どこいくんだか知らんが、ボーイスカウトが着ていそうなベージュの半そで、短パン、ハットを身につけている。ついでにハットには赤い羽もついていたりした。

歳（言ったら無言で逆吊りされるのでモノローグでも言えない）の割にはスタイルがよく、顔立ちもよい。肩まで伸びた髪はサラサラで、本当に。。。（ピー）歳かと思えないほどの肌のツヤ、きわめつけはクールビューティという言葉が似合うキリツとした目。

たぶん、風呂に入ったのだらう。というのも、母親は時々傷だらけでいわゆる”ボロボロ”になって帰ってくることもある。そんなときは決まって家にある”不思議な風呂”へ直行して、出てくるとピンピンしていて髪サラ肌ツヤ傷なしってわけだ。ちなみに俺が入るときはいつも普通の風呂だったたりするので、実際のあの風呂の効能を体験したことはない。本当にあの風呂にはどんな成分が含まれているか不思議に思う。今度その類の人に調べてもらうか。

暗殺とかしてんじゃねーの？ なーんて、ここまでくるとこんな考えも浮かんでくるわけで……。でも常識的に考えてみれば、そんなことがあるはずがない。

というか、あんな格好して本当にどこにいくんだらう。まさか本当にジャングル探検隊をしてくるわけではないよな…。

「じゃあいつてくるわ」

一言言つて、玄関の方へ向かっていった。

俺はついその後を追おうと思ったが、ちょっと前に後をつけたとき、速過ぎる足と、巧みすぎる地形利用によってうまく巻かれたことを思い出してやめた。

なんだかんだで食事もすぐに終わってしまった。片付けをして、家をでる準備もできた。現在時刻８時。そろそろ出ないとな。

Yシャツとズボンは着ていたが、その上に着るブレザーは羽織っていない。それにかばんも自分の部屋にあるので、とりあえず階段を上がって部屋にいくことにした。

ドアを開けて中に入ると、閉めていたはずの窓が開いている。

「おかしいな……」

母親が開けたのか……？ 2階に上がった様子はなかったけど、まあ俺が気づかなかっただけか。

窓を閉めて、ブレザーを着て、かばんを持つ。階段を下りて玄関まで行き、革靴^{ローファー}を履いてつま先でトントンと地面を叩く。ドアを開けて外にでて鍵をかける。

いつもの一連の行動だ。この時の俺は、この一連の行動さえ落ち着いてできなくなるほどこの平和なつねひごろ、ふだん、平生——つまり日常が崩れるとは、思ってもみなかつたんだろう。

俺はこの平凡な……いや、平和な日常を誇りに思う。同時にすごく名残惜しい。

あいつのせいだ。あいつが俺の日常を奪ったんだー！

プロローグ（後書き）

新しい小説です。

ドタバタした日常を描いた変な作品になると思います。そこは承知の上ということでもよろしくお願いします。

第1話

平和崩しの幕開け（前書き）

平和な日常。楽しかったあの日々…。まさかたった1話でなくなってしまうなんて…。

第1話

平和崩しの幕開け

登校、それは俺が学生として最初に行う行動だ。

俺の通う南坂高校は家から15分も歩けば着くほど近くにある。

学校生活も長くなれば——というほど通ってはいないが、とにかく慣れれば色々なコツをつかめてくるわけで、朝起きて学校に着くまでの時間はだいたいわかるようになっていた。

そして歩いてもギリギリ遅刻にならずに着席できる時間ぐらいなら感覚でわかる。そしてそれが今の時間だ。

学校に近づけば、俺の同じ制服を着ている人も増えてくる。すると、後ろから、

「おはよう。エン君」

と、声もかけられたりする。増えてくる人の中に俺の友達がいてもおかしくはないのだ。

「おはよう。静風さん」

しずかぜあき
静風亜紀さんは俺のクラスメイトで、まあ、普通に会話ぐらいはする仲だ。

肩の少し下まである黒髪は風が吹けば見とれてしまうほどにさらさらだ。そして彼女の大きな目は澄んでいて、そこらへんの芸能人よりも魅力的である。スタイルも抜群。いわゆるボン、キュツ、ボンの法則がしっかりできている。

ってこんなこと考えてたら静風さんに失礼だな。

入学当初、静風さんはメガネをかけていたが、目を拭くためにたまたまメガネをはずしたとき、俺の心はときめいた。ときめいてしまった。

それはもう、さっきも言ったとおりすごくかわいかったからだ。確かにメガネをかけているときも少し気になっていたが、何かこ

う、はずした瞬間それが爆発した気がしたのだ。

ちなみに席は隣なので、「メガネをはずした方がかわいいよ」なんて青春真つ盛りな男子生徒が心の中で深呼吸してからじゃないと言えない台詞も、言う機会は何度もあったわけで、今はこうしてメガネをはずして登校してくれているようだ。

そのおかげで他の男子の注目を少しだけ多く浴びるようになったが、俺と仲良く話してくれるだけで満足だ。

話す。と言っても彼女の性格は結構静かな方なので、テレビの話題一つするのでも、バラエティ番組の話なんかはあまり切り出してこない。

見ていたら意外、というかそれもそれで共通の話題が増えていいのだが、もしその話を振ってみて、

「ごめんね…バラエティあんまりみてなくて…」

なんてすごく残念そうな顔をされたら困る。いや結構見てみたい気もするけど。だから話す内容は結局だいたい勉強とかそういう類のものだ。

静風さんと話しているうちに学校のなかに入っていて、おかげですぐに教室についた。ちなみに俺の席は真ん中の一番後ろの席だ。

座ると、俺の前に立ちはだかる壁が一つ。

「お、おはよう。エン君」

そいつは俺にあいさつをしているようだ。だが、俺は気にせずかばんの中から筆箱をだす。

「む、むむむ無視しないでよー」

壁は俺の頭を叩き始めた。これ以上悪乗りすると、泣き出しそうなので相手をしてやる。

「わかったよ。やめろ、青野」

青野は叩くのをやめて涙をふいた。つてもう泣いてたんかい。

「い、いいいいつも無視しないでよね」

俺にビシッと指差せて言うが、目は涙ぐんでいるので迫力はない。

「はいはい。わかったからその泣きっ面をどうにかしろ」

「うっうっうるさーい」

と泣きながらどこかへ行ってしまった。

ちなみに、あいつの名前は青野ナキ。女々しい性格をしていて、いじめるとすぐに泣き出すくせに、いつも俺にくつついてきやがる。顔までも女みたいときた。もちろんここまで言うんだから性別は男だ。

さらに、よく女に間違われるらしいが、肩まであって先が少しはねている女みたいな髪型、清楚系に近いいつもうるうるさせている女みたいな目、産毛一つなくほっそりとした女みたいに整った顔、合唱では即行でソプラト行きの女みたいな高い声、最後に、最初言ったとおり頭を軽くはたいただけで泣いてしまう女々しい性格、という完全に間違われやすい特徴がありまくりだからだ。

一部の男子からは人気があるらしいが、俺はその一部に入るわけもない。

他にも色々変な奴がいる噂は聞くが、こういうのも平和なんだなーって思うとほっとするとしてしまう俺は大層平和ボケしているのだろう。

その後、何事もなく授業が終わり、夕方4時半には家の前にいたカギを開けて、中に入る。

いつも通り2階に上がった。ネクタイを緩めながらドアを開ける。ふうー、となんとなくなため息をついてかばんを床に置いた。ブレーザーをハンガーにかける。

とりあえずベットに横たわろうとそちらを向くと、少女がすやすやと気持ちよさそうに寝ていた。

あー、起こしちゃまずいかー。下で大人しくしよう。

ってちよつとまで。

いやいやいやいや、整理しよう。

俺は道を間違えずにちゃんと帰って来たよな。うん、そうだ。ここは俺の家だ。鍵を使って玄関が開いたんだからそのはずだ。んで、ここは俺の部屋だ。そこらへんに転がっている少年マンガ雑誌も見覚えがある。家具も俺の部屋まんまだ。

結論がでた。こいつは誰だ。

ここは俺の家だ。じゃあこいつは……？

すやすやと眠っているその顔は美少女コンテストに出たら優勝しそうな顔をしている。前髪は一直線に切っていて、それがなんとなく幼さを彷彿させていた。

そのとき、少女は寝返ってこちらを向いた。そして、一言。

「アンバラカッターウン……」

「何語だよ！！　どんな寝言だよ！」

ついつい口に出していつてしまった。でもコイツが悪い。うん、そうだ。

「う、うーん……。うん？」

とりあえず俺の声のせいなのか、うん、たぶんそうだろう。とにかく、起きやがった。

体を上げて目をこすっている。着ているのはぶかぶかなスウェット——って俺の部屋着じゃねーか。何勝手にきてんだよ。

「おはよう」

目をこすりながらそんなことを言ってきた。

「お、おはよう」

「おまえがうるさいから目が覚めてしまったではないか」

言わせてくれ、お前のせいで大声を上げてしまったではないかと。

「いや、それじゃないだろ。なんだよお前！」

「おまえにおまえ呼ばわりされる覚えはない」

お前にお前呼ばわりされる覚えがないお前が俺のことをお前呼ばわりしているじゃないか！　ってなんかもうわけわかんねえ！

「いいから誰だ!」

「母様から何も聞いていないのか?」

「は? 母様って、俺の母親?」

「そうだ」

少女は掛け布団を無造作に放ってベットから降りた。立ち上げると頭が俺の胸あたりまできた。結構小柄だ。

「じゃあ……えーっと……なんだっけ……めーんま……違う。えーっと……めー……」

「メール」

「そう、めーる!」

すごいなおい。どこのジャワ原人だよ、こいつ。”めーんま”でわかった俺もなかなかすごいけどな。

「見ろと?」

「そうだ」

ポケットから取り出して、携帯の小窓を見た。メール受信中となっている。どうやら今来たようだ。

ヴヴヴヴヴ、とマナーモードのバイブが炸裂する。

「見た」

「なんと?」

「中身は見えない」

「見る、ポケ!」

おいおい、会って数分しか経っていない相手をもうポケ呼ばわりですか。

どちらにせよ見ないと話が進みそうにないので見てみた。

予想通りというか、どっちかといえばこの予想は当たってほしくないのだが、送信者は母親だった。

中身はこうだ。

From 母親

今日から我が家に新しい仲間が増えます。

仕事で外国のジャングルに行ったんだけど、そこ倒れているところを拾って、手当てやら食事やら世話してあげた。とりあえず元気になったけど、色々あって帰る寝床もないようだし、このままじゃ心配だからそっちに送るわ。しばらく世話してあげるように。

そういえばその子、現地の子なのに顔は日本人だし、なぜか多少なから日本語が喋れるわ。

・ ・ ・ E N D ・ ・ ・

今、かよ。こいつ……、

「母様から何も聞いてないのか？」

って今きたんだよ…… よおおー！

あー、色々あってとかなんだよ、とか、送るとか自分で世話しろよ、とか、どこかしらないジャングルの奴がなんで日本語喋れんだよ、とか、仕事先のジャングルってどういうことだよ、とか色々思うことはあったが、考えても仕方がなさそうなので、ということなんだかどうでもよくなってきた。

俺はふと少女のほうを見た。

少女は腰まである髪を後ろで結んでいる。さっきは眠っていたのでわからなかったが、意外と大きな目をしている。だが、それはどこかキリッとしていて、静風さんのそれとは待ったく別物といったもよい。

なんというか、見た目と声だけは女の子らしいというか……。むしろ逆か、言葉遣いがひどすぎるんだな。あんまり日本語に慣れていないからか？

「名前は？」

「シーサインだ」

し、シーサイン……。どこの国の方だよ……。

「だけど、こっちでは海奈^{ウミナ}って名乗れって母様に言われた」

「ウミナ、か。えーっと苗字は？」

「ドンバット・ゲラッテ・ゴチユーノ・デラ——」

「こっちで名乗るほうでいい」

長すぎて明日の朝になりそうなので中断させる。

「山野谷……」
ヤマノタニ

「それをつけたのは、もしかしてうちの……」

「そうだ。母様だ」

や、山野谷……。野山でも山谷でも谷野でもよかっただろうが……

……。どこかに絞れよ。全部くつつけることないだろ。まあいいんだけどさ……。

「そうか、山野谷海奈か……」

最初の4文字でほとんどの地形を制覇しているな。じゃあ奈はなんだよ。とか言いたくなる。

「火山エン」
カヤマ

「ん？　って俺の名前知ってんのかよ」

そういえば、苗字は初公開だからふりがな付きだね。

「ああ、エンのことは母様から聞いている」

ほほう。ウチの母親が俺のことを話すとはな……。

「なんて言ってた？」

母親が俺のことを他人に話すなんてめったにないことだから、こいつ——ウミナになんて言ったか気になってしまっ。おかげでいきなり下の名前を呼び捨てにされたことなどもはやスルーだ。

「えーっとなんでもできる——」

お、意外にいい風に思ってたのか。

「——便利な家政婦」

後半、聞かないほうがよかったな……。

「エン」

「なんだよ？」

「腹が減った」

なんでもできる便利な家政婦ってのは伏線かよ。

と言っても、なんだかんでもう5時半を過ぎている。ビツクリして疲れたせいかな俺も小腹がすいてきたので、結構早めだが夕飯にすることにした。

これからウミナとしばらく変な生活が始まるみたいだ。

でも、俺としたことが不覚だった。このときまあいいか、なんて軽い気持ちで受け入れてしまったんだが、これが悲劇の”平和崩し”の幕開けだったのだ。

いや、たぶんもうこの時は遅かったのだ。母親がウミナを見つけた時点で、俺の”由々しき日常”はどこかへ吹っ飛んでいったんだ。

第1話

平和崩しの幕開け（後書き）

第1話でした。

こんな感じでもっとドタバタしていく予定ですので、よろしくお願いします。

次回予告は気が向いたら…、じゃなくて1話で完結しない場合にや
つていこうと思いますので、そのところもよろしくお願いします。

では、また次回。

第2話

超人海奈に飽きれ果ててもうダメ(前書き)

神は残酷だ。ついでに母親も。

オレはついにウミナと出会ってしまった…。

そして、飯をせがまれてしまった…。

第2話

超人海奈に飽きれ果ててもうダメ

すげえー食う。

これはキッチンで細かく刻んだ野菜を炒めているオレの感想だ。
なんの感想かって？

もちろん、ついさっき遭遇した母親によって送り込まれてきた”
謎のジャングル（美？）少女ウミナ”に関してということは確かだ。
ちなみに本名はドンバット・ゲラツテ——（省略）——だ。とり
あえず、ここは日本という島国の東京という大都会なので、日本名
で名乗っている。

それが、えーっとなんだっけ……あ、そうだ、ヤマノタニ ウミナ山野谷海奈。
ちなみにこれ、さっき母親に由来を聞いてみたところ。

「強そう」

だそうだ。意味がわからん。強そうって…女の子につける名前を
強さを基準にして決めんじゃねえ。

といっても、謎のジャングル少女は見た目はそりゃーもうかわい
いウミナだが、中身はそこらの悪がきと変わらないウミナだ。

だが、強そうってなんだよ！？ 名前に代表的な地形を四文字入
れただけで世界制服気取りですか！？

つと、本題からずれたな。すまない、取り乱してしまった。

なぜあんな感想なのか？

そりゃ、一言で言えばガツ食いつてヤツだよな。

山に一週間遭難して、今すぐ栄養分を取らないと死んでしまう登
山者が、つてぐらいヒドイ食べっぷりだ。

さっきの言葉遣いに加えて、この食べっぷりを見てしまったらも
う女としては見れない。もしかしたら一生彼氏なんていうもので
きることはないかもしれないが、彼氏の前でその食べ方はやめとけ
よ。

なぜこんな悲惨な状況なのか、それは前回は振り返ってもらえばわかる。こんな会話が繰り返られていたんです――。

「エン」

「なんだよ？」

「腹が減った」

――ひどいでしょう？ とてもじゃないけど、会って数分しか経っていない人の会話とは思えないでしょう？

でも、寛大な心を持つ火山エンは、わざわざ得意料理のチャーハン^{カヤマ}を振舞ったんだよ。

ちなみに、その感覚をわかりやすく言うなら…、まあなつかない犬に餌を与えてなつかせようとする飼い主みたいな気持ちだ。

あとわざわざ自分のフルネームを出したのは、こつやつて出せる時に積極的に出しておかないと、マイフルネームの出番がない、とオレの第6感が告げていたからだ。

そもそもチャーハンが得意料理な理由には、オレが結構好きっていうのもあるが、何よりも短時間でできるという手軽さだ。

ご飯のパサパサ感のコツをつかむにはちよつとだけ苦労したが、慣れてしまえばこつちのもんっていうやつである。

今では時間がない時に、冷蔵庫には常時チャーハンセット（にんじんとかネギとかベーコンとか卵とかだ）が用意されている。

まあとにかく、リビングの四角いテーブルに座ってもらって、すぐ隣のカウンター式キッチンでチャーハンを作った次第だ。

まったくこんなすばらしい設備が整っているのに、なんで今日の朝飯はトーストしかできなかったんだか疑問に思うね。

チャーハンの量は、ウミナがどれぐらい食べるかわからないので、ここで考えるよりも本人に聞いたほうが時間の無駄にならない。…

と踏んだオレはウミナに直接聞いてみた。

「おい、チャーハンの目安は？ 茶碗何杯分だ？」

「えー？ まあ結構」

おまえの結構はどれぐらいだ。グラム単位で表せ。もちろんこんなじゃわからないから、追加質問。

「OK。もつと頭にやさしい質問をしなかったオレが悪かった。どれぐらい腹が減っている？」

よほど腹が減っているのか、オレの皮肉たっぷりな言葉に何もいってこなかった。

「死ぬほど」

死ぬほどか。そんな風な腹の減り具合を言ったのは、オレが聞く限りお前が初めてだ。

「わかった。じゃあ一応2人前作ってやるか」

つまりオレのとあわせて、3人前作るわけだな。冷蔵庫に入っている冷凍されたご飯を、レンジでチンした。

と、まあオレの料理風景を見ても、読者の方々には一つも面白いところなんてないと思うので、カット。本当は華麗な包丁さばきだとかフライパンさばきだとかを見せたかったがな。

皿が二つ。

大きい山と小さい山だ。

ちなみに、いやというか、もちろん大きいのがウミナ用で、小さいのはオレ用だ。

テーブルに並べると、椅子に座っているウミナが今にも走り出しそうな勢いで目を開いて興奮する。

おいおい、野獣じゃあるまいし、そんな目でチャーハンさんを見つめるなよな。チャーハンさんがかわいそうじゃないか。

皿を置いた後、キッチンに戻って中華料理用のスプーン、つまりレンゲを持つてくる。

「まだ食うなよ」

念のため制した。

ウミナはその行動をしているオレを、スターターが撃つ空砲を待つ短距離走選手のごとく持ち、獲物を狩る前のライオンのごとく見ている。

忠実にオレの言うことを守ってはいるんだが、なんか怖いわ。

机にレンゲを置いた瞬間、空砲が高々と響いてレースが始まったのか、それとも獲物を狩るその瞬間が訪れたのか、レンゲをクルクルとテクニカルに回してからもち、大盛りのチャーハンにがつつき始めたのだ。

おやつさん…こ、こいつは止められねえ！ オレの中の何かもコイツの手によってはじけ飛ばされてしまったようだ。いわゆるキラ崩壊。

すさまじいと言えない…。もう、速過ぎて手が見えない。
と、見入ってる場合じゃない。オレも食わねば…！

—— オレが3分の1食ったぐらいだろうか。こいつの皿の上にはほとんどご飯が残されていなかった。

ちよつと、おかしくね？ どんだけ腹減ってんだよ。

と、思っている間に、

「もかわうい！」

チャーハンを口いっぱいに含み、口の周りに大量の米粒をつけて、意味のわからない民族語を喋ったコイツは、オレに向かってご飯粒がほんのちよつとだけ残っている皿を突き出している。

そうか。

「わかったぞ。おかわりって言っているんだな。そうかそうか。
でも一つだけ言わせてくれ。…口の中が丸見えなんだよ！ それ全

部飲み込んでからにしろ、このボケー！」

お口を高速でモグモグして、ゴックンと飲み込んで、口の周りには大量の米粒をつけたままもう一度、

「おかわりい！」

と言った。

迷いのないその目に、オレは……勝つことができなかった。何に迷うんだか、そんなことは聞かないでくれ……。

——そんなわけで、オレはキッチンで”チャーハン”を炒めている。

やっとお話の冒頭部分に戻れたわけだ。

どれだけ食うんだかしらんが、また2人前作ってみたりする。これはオレからの挑戦状だ。さあ食ってみろ。ヘッヘッヘッへ。

ウミナのほうをチラリと見ると、レンゲを握り締めてキラキラした目でこちらを見ている。ついでに上下にウキウキリズムを取りながらね。

そんなにおいしかったのか…？

フツツのチャーハンなのにな。まあジャングル生活での生活じゃあ、チャーハンなんてありつけることはあまり……いや、めったに……いやいや、まったくないだろうが。

作り終わったチャーハンを皿の上に乘せて、テーブルの上に置くと、またさつきと同じようにがつつきはじめる。

オレはそれをつれいような、かなしいような、なんだか微妙な表情で見ながら、自分の飯を食べはじめた。

さすがのウミナでも4人前食べれば十分なようで、右手で膨れた腹をポンポンと叩いて、左手を椅子においてよっかかっている。

彼女はとことんはしたなかった。

オレもなんとかウミナが2回目の2人前を食べ終わるころには、1人前を食べ終わっていて、まあウミナは4倍速つてことだ。

落ち着いたところで一気になっていたことを質問した。

「そつえば、どうやってウチに不法侵入したんだ？」

ご存知のとおり、玄関には鍵をかけていったし、ジャングル出のコイツにピッキングのスキルがあると思えん。

「ジャンプした」

ジャ、ジャンプ？

今までコイツの数々の難語を解き明かしてきたオレだが、これはわからん。あれ、でもまてよ。よく考えろ…。もしかして…。

「オマエ、イツウチニキタ？」

「2時30分ぐらい」

オイオイ、ソレッテオレガ学校デ授業シテイル時ジャネエカヨ。

ツテコンナ文ノママジャ読ミニクイナ。

戻そう。すまない。それほど驚いたんだ。

2時半、つまり誰もいない頃。2時半と言ったら、この町にも少しだけ静けさが訪れる時間帯だ。みんな仕事やら勉強やら昼寝やらで忙しくて、住宅街には外に出る人はあまりいないからな。

ついでにたぶん母親が開けたんだろうが、今日はなぜか窓が開いていた…。

「もしかしてオマエ…、オレの部屋の窓から…？」

「ああ」

「Oh、ウンジャンプ？」

発音よく言ってみる。ちなみにオレ流の訳は「一回のジャンプで？」だ。

「当たり前だろう」

あつたりまえじゃねー！

なぜだ。母親！　なぜ窓を開けておいた！　　というかいつ開けたんだ！

いやいや、それより今日に限って開けていくなんて、まるでコイツと出会うことを予想していたかのようじゃないか。

いやその前に、どんな脚力してんだ、こいつ！

やばい、取り乱すなー。取り乱すな。冷静に考えろー。……ポクポクポクポク……チーン。

……ん？

冷静に考えたらもう一つ疑問が浮かんできた。

ウミナが家に着たのは、2時半。母親が出たのは、早朝。

メールの話が本当なら、少なくとも母親がジャングルについて、さらにウミナと遭遇し、元気にさせてからウミナをこちらへ送りこんだはずだ。

つまり、どんな手段を使ってもここに到着するのは不可能、だ。どんなジャングルかはしらんが、外国つてことは確かだ。この島国から外国へ行くには、もちろん飛行機や船を使う。その日に飛行機の予約をとるなんてムリなはずなんだ。船も同じ理由だ。

オレはまさか、と思った。でもそのまさかは……非現実的な考えだから、この考えが当たらないことを祈って質問をする。

「え、待て。もう一つ聞かせてくれ。向こうのジャングルをいつ出て、どうやってきた？」

「確か……、うん。向こうを出る時に母様が『日本の時間で今は12時だから、がんばれば日没までにつける』って言われ……」

うん、もう何もいうまい。ちなみにコイツのいう母様とはオレの母親のことだ。

「がんばってこちらまで走った」
えーっと、うん。

つまり訳すと、

「私の特技は走ることです。どこにあるかもわからないジャングルから火山家まで、2時間半でつきました」

ってことだな。もちろん、言葉遣いはかなり修正している。

「海の上は？」

「走つたに決まってるんだろ」

ア。レちゃんかよ。あれか、片足が水に沈む前にもう片足を前に出すってか？ その原理で行くとな、空も走れるんだよボケ！ そんなことな、こちらの世界の常識的には決まっていけないわ！

「オマエ…、本当に何者なんだ…」

「今は山野谷海奈だ。当たり前だろ」

いや、そういう意味じゃないんだ…。すまん、また頭を使う質問をしてしまったな…。

「じゃあとりあえず、いつまでここに居る気だ？」

「気分次第」

だーよねー。

もう、意味のない質問しちまったよ。

つまり、このわがままな超人は、気分次第でいつ帰るとはわからないとはいえ、しばらくウチに住み着くわけだ。しかも、両親がほとんど家にいないから、世話係はオレ。

母親め…。助けたはいいが、オレに押し付けやがって…。善人だか悪人だかわからん。

「でも——」

コイツの答えはまだ続いてたようだ。

「——こんなにうまい飯が食えるならしばらくここに居てやってもいい」

なんか上から目線なのが気になるが、コイツ…ウミナはオレの料理…つってもチャーハンしか食べてないが、えらく気に入ってくれたらしい。

ワガママで嫌な奴だが、少しだけうれしかった。

でも、当の本人はというと…、顔を赤らめて、絶対に興味がないであろう奴から見て右の壁にかかっているアートな絵を、ただ見ていた。気を紛らわすように。

さあ。今日、オレの辞書に一つ追加された。超人は両親以外にもいる…とな。

あと、超人との生活も案外楽しい生活になるかもしれない、とももちろん、うまい飯付きでな。

第2話

超人海奈に飽きれ果ててもうダメ（後書き）

さあ、だんだんと（もう前回から？）ウミナの暴ん坊っぷりが明かされてきましたね！

次回はできれば2、3日後をめどにいきたいです。お楽しみに！

あ、そうそう、プロローグから言おうと思っていたんですが、意見・感想など気軽に書いていってください。

ここはダメだ！ とかでも勉強になりますので、待ってます。
それでは、また次回！

第3話

寝床は力ずくで獲得しろ！―激闘？編―（前書き）

飯を振舞い、少しぐらいコイツにもかわいいところがあることがわかった。

なーんて思ったオレは大馬鹿者で、苦労はまだまだ先にあっただのだった…。

第3話

寢床は力ずくで獲得しろ！――激闘？編――

その後、どうなったか。

前回はうまい具合に話がまとまって、なんかもう最終回なんじゃねえか？　とか思ったけど、もちろんそんなことはない。

いつまでもウミナが、桃色乙女な表情を浮かべているわけはなく、オレが自分の分とウミナが食い散らかした分の食器やらを片付け終わる頃には、その目線は液晶テレビのある部屋にいていた。

ちなみに、リビングの構造はカウンター式キッチンの隣に食事用の四脚テーブルがあり、その奥にソファ―やその目の前の小机、さらにその目の前のテレビといった”くつろぎスペース”があるようになっている。

その”くつろぎスペース”にウミナの目はいったわけだ。

「な、なななんだこれは！？」

ウミナは銀色の液晶テレビを指差して、新しいおもちゃを見つけた子供のようにキラキラした目でこちらを見ている。

「テレビだ」

簡潔に言い過ぎてはいるが、間違ったことは言っていない。

どうやら、ジャングル生活のウミナには、テレビといった近代的家庭用電気製品をみる機会がないようだ。

「てれび？　何をするものだ？　狩りか？」

どこをどう見たらそう思うんだか知らんが、いくらジャングル生活が長くてもそりゃねーぜ。

だが、そんなオレの気持ちとは正反対にコイツの目は輝きを増している。ここまでキラキラした目で見つめられちゃな…、仕方ない答えてやるか。

「暇な主婦の暇つぶしや、アニオタの深夜の喜びのために使われている」

「アニオタ？　なんだ？　それは？　食えるのか？」

食えるって…、なんか違う意味に聞こえるからやめなさい！

まあ、「冗談なんだがな（冗談ではないけど）。

「まあ気にするな」

テレビの両端をしっかり手でホールドして、黒い画面をただ見つめている。

あ、こら。叩くな。超人のオマエが叩いたら、ア。レちゃんが地球を真つ二つにするがごとく液晶画面が割れる。

「ど、どうやって使うんだ!？」

使うというか、見るものなんですけどね。

「ボタンを押すんだ」

「ボタン!？」

言ってもわからないだろうから、ソファアの前の小机の上にあるリモコンを取って、赤いボタン”電源”を押す。

プツン、という音と同時に、黒い画面はだんだんと光りだし、いつも聞くニュースキャスターの声がフェードインしてきた。

「お、おおおおおおお!!!」

ピョン、とテレビの前からジャンプして小机に着地。なんの小技を使ったか知らないが、着地したときの衝撃は全然ないように見えた。

「こら、小机の前に正座するな」

オレの注意も、目を輝かせて夢中になっているコイツの耳には届いていないようだ。

だいたい、これはニュースだぞ。そんなに興奮するものじゃないぞ、おーい。

ウミナの両脇を持って、ソファアの上に持っていった。ちなみに、ウミナは足が宙に浮いている時も、正座の体勢を崩さなかった。

つーか、こいつ、結構軽いな。何キロだ？

その直後。お天気情報が始まったようで、いつものお天気お姉さんがでてきた。ん？ お姉さん？ なんだか、偉くあわてた様子だ

が…。

『明日はたいへん強い風が吹きます！ それはもう、やばいです。しかも空気が乾燥しているのです——』

どれだけヤバイんだか…。

というか、こんな予報の仕方でもいいのか？ 苦情が来て困るのは、テレビ局とお姉さんじゃないのか？ 頼む。お姉さん、生き残ってくださいよ…。

……あ、そうだ！ 忘れてた！ 今はお天気情報なんて見ている場合じゃない！ もう7時。ホントなら今頃飯を食い始めるんだが、まあ丁度いい機会だ。

見たいバラエティー番組があった。

【抹茶イケ！】

オレが大好きな番組だ。ちなみに正式名称は『抹茶抹茶イケちゃつてる！』だ。月曜7時にやっている。時々見逃しちゃうんだけど、今日は見れるぞ！

リモコンを持って8chにまわす。

お、丁度今始まったようだ。

中ではエイティエイトや極しごく敵バツタやわるゐこななどの人気芸人たちが飛びまわっている。

「な、なんだこれは！？ 騒がしいな！」

ウミナが不思議そうに聞いてみる。

「バラエティー番組だ」

「バラエ・ティヴァングミ！？」

ティヴァングミっておい…。どこの地方のグミだよそれ。

「番組だ。ば・ん・ぐ・み」

「ほ、ほう。面白いのか！？」

まーた目をキラキラさせやがって…。なんだか面倒くさい展開になりそうなのでできれば答えたくなかったが、この目に負けたオレ

は素直に答えてやった。

「面白いぞー。かなりの暇つぶしになるなー」

「ほ、ほう！ そうなのか！」

またピョンピョン飛び跳ねはじめたぞ。しかも正座の姿勢は保ったままだ。やるな。

どうやら相当バラエティ番組テレビが気に入ったのか、終始目が輝いていた。ただ、コイツは「抹茶イケ！」が終わった後もずっとテレビを見続けていて、何を言っても返答がなさそうなので、とりあえずオレは一足先に風呂に入ることにした。

2階からパンツやらを持ってきて、1階の廊下の一番奥にある風呂場に行った。

脱衣所で服をぬいで、洗濯機に入れる。あー、なんだか懐かしい”平和な日常”の香りが……。中に入って、体を流して湯船の中に入る。

あー、生き返るー。なんか平和だー。

「おい。エンー」

……。あー、温まるなあー。

「おい！ エン！ いるんだろ！ わかるぞ。気配がするからな！」

あー、やーめてくれえー。何かが壊されるー。つか気配とかなんだよー。

脱衣所から悪魔の声が聞こえる。オレはここにいませんー。

「おお、ここはもしか、風呂ってやつか！ 母様から聞いているぞ！ なんでも、ここの湯船はすごい効能があるそうだな！」

母親ー。なんでそういう超人が食いつきそうな事を吹き込むんだよー。

「私も入る！」

ちよ、まで、それはダメだ！ と、モザイクガラスのドアを押さ

えようとしたが、遅かった。

風呂のふちに手をついた時には、既に奴はドアを開けていたのだ。
クソ！

反射的にお湯の中に入って、大事なところを見えないように隠す。

「おおー！」

何が「おおー！」なんだか知らんがああ……――

「――はいつてくるんじゃない！」

「なぜだ？」

い、いやなぜだ……って……。常識じゃないのか？ オレが間違っているのか？ うん、違う。考えるまでもなく、そんなはずはない。
断じて。

「まあ入るぞ」

踏み入れやがったー！ やばいこのままじゃ本当に一緒に風呂に入ることになる……。あ、そうだ。あの手があつたか！

「おい」

「なんだ？」

「風呂はな。服を脱いでからじゃないと入っちゃいけないんだ。ついでに飯を食った後のきたない口ではなく、歯磨きをして清潔にしたきれいな口じゃないと、入ってはいけないんだぞ！」

「そ、そうなのか！？」

ウミナは右手を口にあてて後ずさる。

フッフッフ、信じたぜ。まあ前半はオレの善意で教えてやったが、後半は”ある作戦実行”のためだ。

「ほら、行つて来い」

よし、ウミナが歯磨きアースド服を脱ぎに行った。ち、違う。服を脱がせたかったんじゃないぞ。断じて。

バツ、と勢いよく湯船から飛び出て、着地。シャンプーを2、3発だす。

秘儀・高速髪洗い！！

「うおー！ー！！！」

よし、そろそろ、お湯で流して！。ボディークリームをタオルに2、3発出す。そして立ち上がる！

秘儀・高速からだ洗い！！

「うおー！！！」

よし、そろそろ、お湯で流して！。後は出るだけ！

ガチャ。

「へ？」

「言われたとおりやったから入るぞ」

目の前には、全裸のウミナが立ちはだかっている。オレは色々な驚きでスタンディングスタートの姿勢から動けない。

控えめだと思った胸も思ったよりは膨らんでいて、スタイルも予想通りよかった。そうか、コイツ着やせするタイプなのか！……………

…。

……………じゃなーい！！ いや、つか、あんな、男らしい親父じやあるまいし、少しは前隠せよ！！

それをオレは、

↓抱きしめる

見ないように立ち去る

いや後者に決まってるだろ！！

ビュンツ、という音になるほどの勢いで、目をつぶりつつ男の大事なところを体を洗ったタオルで隠しながら、脱衣所へ行きドアを閉める。

「ハァーハァー！」

あぶねえ、いや、つかもうアウトか…。

…み、見られてしまったわー。も、もうお婿にいけない！ と、痛い演技をしている場合じゃない。

ダメだ。完全にアイツのペースに飲み込まれてる…。なんでこのオレが全裸で……。

全裸でハアハア言わなきゃいけないんだぁー！！ これじゃあまるで、裸の上にコートを羽織って町を徘徊している変態みたいじゃないか！

落ち着け、落ち着け。フー。精神を集中させろー。

腰にタオルを巻いて、手の平を前に出して中腰になるという、太極拳のような構えで深呼吸をする。

ガチャ。

「ヒイツ！」

思わず体をすくめる。

なんで片足を前に上げて、手を胸の前に集めるようなポーズしてんだオレ！ なっさけねえー。でも元の正常な姿勢に戻れねえー。

「おい。セツケンはどこだ？」

ウミナはドアを開けて、もちろん前も隠さずに聞いてくる。それをオレは見ないようにするだけで精一杯だった。

「そ、そのボトルが並んでいるところの上だ……よ？」

「おう」

ボタン。

精神、崩壊！ 最後になんて「よ」ってつけたんだ！ 必要性が感じられない！

あーだめだ。精神統一さえも邪魔される。乱れる。ここじゃムリだ！

所かわって…。

「こういうときは、早めに寝るに限るよねー！」

オレはさつさと服を着て、自分のベットの上にいた。もう、何も考えないで寝てしまおう！ あー、今9時かー。寝れるかなー。むーりだろうなー。

オレは相当混乱していた。そして同時に精神もいかれているから、口調もおかしい。

布団を被り、目をつぶる。

結論。寝れない。

バサツ、と起き上がる。

「ダメだ……。眠れねえ……。ムリだよ。高校生に9時に寝ろって……」

ガチャ。

「ようー、いい風呂だったぞー」

あるうことか、首にタオルを巻いたウミナが「よう」という台詞が似合うように手を上げて現れた。

「か・え・れ！」

それをオレはベット出て目の前までいき、肩を持って外に出るように押し出す。もうオレは寝るんだ！ 許してくれ！

「わ・た・し・も・こ・こ・で・ね・る・うー！！」

そ、それだけはお勘弁をおおー！！

なーんてな。ここまで散々弱気で情けなかったオレだが、これだけは許すわけにはいかない！ なぜかって？ ハハ、それはなあ。

2階に空き部屋がたくさんあるからだよ！

2階はなぜだか4部屋ある。

もちろん、1つはオレの部屋。階段から上がってすぐだ。だが、あとのオレの部屋より奥に並んでいる3つの部屋には何もなし。

でも、なぜだか全部屋冷暖房の設備だけは完備しているんだよね。つまりいつでも住居可能ってわけだ。ちなみに、いるんだかいな

んだかわからない両親の部屋は1階にある。

ただ、中は入ったことはないの、どんな部屋かは知らない。

なぜかって？

前：たぶんまだオレが小5ぐらいだった頃、家に誰もいないときにいたずら心で入ろうとしたら、よくわからんトラップが発動して、床が反転して、その場に粘着テープ固定されて、母親が帰ってくるまで1週間放置されたからだ！

思いだすだけで身震いする…。もちろんそれ以来、あの部屋に入ろうなんて気はおきるはずもない。

本当に、あの部屋の中には何があるんだ…。

あ、そうそう。ちなみに母親が帰ってきてゲッソリしたオレを見たとき、かすれた声で助けを求めるオレをよそに、しゃがみこんでオレの頬を小一時間ツンツンしていたことも忘れない。しかも、無言でだ。

これ以上話しても傷をえぐるだけなので、これぐらいでやめておこう。

まあそんなわけで、オレはコイツを外に押し出す！

コイツもオレに負けじと体を前傾姿勢にして対抗してくるが、ハッハッハ、あんなに軽い奴がオレを押せるわけねえだろ。これでも力はあるほうだぜ。

ってあれえ？ 景色が後退してる…。。

「とお！」

「グハア！」

その掛け声とともに、前方から強い衝撃を感じ、そのすぐ後オレは背中を強打した。痛い。すんげーいたい。

目を開けて状況を理解した。こいつ思い切りオレを押し飛ばしやがった…。しかも肩だけで。だから今オレに移る景色はドアから遠く離れている。

痛みで動けずに座り込んでいるオレの前に来て、ウミナは一言言いやがった。

「フンツ、オマエは私との勝負に負けたな。よって今日からこのふかふかベットは私が占拠する。これから自由に使わせてもらおう」
「な……なんだ……と？　つーか、おまえ……」 占拠”なんて難しい日本語使え——ゴフツ！」

チーン！！

チーンっていうのはまあ、あまりグロテスクな音を隠すためだけに……、きゅ、急所を蹴られた。ググ……。

マイ急所を中心に、切り裂くような傷みが体全体に走っていく。
このまま……オレ、死んでしまっんじゃないか？

「そういうことだ。おやすみ」

「お、おやすみ……」

そしてグッバイ、マイライフ……。
がくつ。

……じゃねえー！

勝負？　あれが勝負か？　オレはそんなつもりなかったぞ？

完全に飲まれた……。まてまて、このままじゃだめだ。このままじゃあ立場が逆転する……。コイツの犬になるのは嫌だあー！

コイツに立場つてものを見極めさせねばならん。オレのふかふかベットを守ることは、その第一歩につながる気がする。というかここであきらめたら、大切な何かがコイツによって粉々に碎かれる気がする！

じゃあ、どうやってオレのふかふかベットを守ればいいんだ……。

”相手が普通なら”少々プライドが痛むが、卑怯な手を使っていくだけでも守ることはできる。だが、あんなだけのバカ力を持っている奴には絶対無意味だ。力押しでやられる。

じゃあどうすればいい？

そうだ。アイツ自身が、ふかふかベットがオレの物で、勝手に使ってはいけないことを認めればいい。アイツの発言をよく探れ。

そういえば、アイツは勝負がどうか言ってたな。つまり、勝負に勝てばいいのか？ あの人超に？ ワンジャンプで2階までこれるんだぞ？

いや、だが勝負としか言っていない。その勝負がオレの得意なものだったなら勝てる可能性はある…。あー、でもアイツのことだ…。

『私の認める勝負じゃなければだめだ！』

とか理不尽なこといいそうだな…。

いーや、この際、そんなこと言ってらんねー！

オレはふらつきながらも立ち上がった！

と、このフリーズだけ見ればカッコイイが、実際は痛む股間に負担をかけないために、プルプル震えながら内股になり、さらに股間を両手で押さえている。

「ほう、立ち上がるとは…」

ウミナが振り返った。しかも、オレのふかふかベットのの上に立っていやがる…。まるで、力の差を見せ付けるかのようだぜ。

「しょ、勝負だ！」

オレは小者みたいに右手さえもプルプル震えながら、ウミナを指さす。

「きたか。リベンジ、だな？」

ウミナがフツ、とファイティングポーズを取る。

「ま、まて今じゃない！」

ブンブンブン、と右手を振る。

今勝負とかおかしいだろ！ オレの情けない体勢をみて思わないのか！

「勝負は明日の放課後！ 場所は南坂高校裏口だ！」

南坂高校裏口、すなわちオレの高校の裏門だ。

その周りにはめったに人は通らず。さらに、いくつか花壇のスペースがある。が、それを抜かしてもかなり結構広い。いくつか木も生えているから傷害物としては十分。

コイツには力で勝てないことはもう十分すぎるほどわかった。で

もコイツの納得するような分野で、オレが勝たなければ認められない。

こういうときに使わずして、いつ頭を使う！ 力はオレの器用さで補ってやる！

「いいだろう。ならそれまでこのふかふかベットは私のものだな」

あ、そうなりますか…。えーっとそれは予想外かなーなんて…。

「じゃあ、おやすみ」

そういうと、バツとオレ愛用のふかふか掛け布団を被る。

「くっそー」

…といいつつ1階にある物置部屋（お客用の布団やらが入っている）から布団を持ってきて”オレの”ベットの隣に敷いた。かなしいが、これが弱者の立場ってやつなのか…。

チラツ、とベットの方を見ると、ウミナが気持ちよさそうに眠っている。もう眠りやがった。

スヤスヤと寝ているソイツの寝顔からは、さっきのバカ力を想像できなかった。明日、コイツと勝負か…。オレもなんでそんなこと言っちゃまったんだろう…。

だが、勝算のない勝負は挑まない性格なんですね。あの短時間でに勝つ秘策は思いついたのさ…。

明日が楽しみだぜ。

第3話

寝床は力づくで獲得しろ！―激闘？編―（後書き）

【次回予告】

（エンの？）『ふかふかベット』をめぐる大決戦が今、幕を開ける！

エンは小者なままで終わってしまうのか。

それとも、ウミナの超人的な力の前にひれ伏してしまうのか！

え？ どっちにしるエンが負けているって？

……。

実際どうなのかは、次回のお楽しみということです。

意見・感想など募集です。お気軽にどうぞ！

第4話

寝床は力づくで獲得しろ！——奪還？編——（前書き）

ついにウミナと勝負することになってしまった！
だが…、作戦はもう考えてあったりね……。

第4話

寢床は力づくで獲得しろ！――奪還？編――

さあ、ついにこの日が来た。と言っても、事の発端は昨日のことだから、ついに……ってのもおかしいな。

昨日はいつものふかふかベットではなく、フツの敷布団に寝た。枕を変えると寝られない人がいるように、オレも布団が変わるとあまりよくは眠れないようだ……。

なんつーか、なくして初めて有難みがわかるっていうか……。とにかく昨日よりは、勝負に勝つというちよつと熱血じみた単語への気持ちも強い。

あ、いやでも……、どんなに過酷でも、結局賭けているものはベツトなわけで……。そう考えるとやっぱりアホらくなってくる。

今の時刻は朝の6時半。イン・ザ・キッチン。

そうそう。ちなみに、なぜ今オレが冷蔵庫をあさって、色々な食材を取り出しているかというと、強盗ゴツコとかそんな凶悪な遊びをしているわけではなく……。これも勝つための作戦にすぎないのだ。まあ、勝負のときにわかるだろう。

まあ、なにせよ冷蔵庫の中身を出す作業は、ウミナに見られると厄介なことになるので、こうして早起したわけだ。

だが……、オレとアイツは同じ部屋に寝ていた。そんなわけで、普通に大きな音を立てたら、アイツもおきる可能性があるわけだ。それは困る。だから奴を起こさないために、マナーモードの状態の携帯のアラーム……つまりバイブ音でおきなければならなかった。

鳥のさえずりで起きるよりは簡単なものさ……。というのも昔こんなことがあったからだ――

……………。

たぶんあれは…、オレがまだ8歳のころ。

両親が長期休暇を取ったらしく、珍しく2ヶ月くらい家にいた時があった。当時のオレはもちろん小学校に通ってたわけで、普段母親に起こしてもらうなんて習慣はないから、目覚まし時計で起きていた。

ちなみにその目覚まし時計は、隣の澤山さん家のかわいいお姉さん（現在24歳で一人暮らし中）から8歳の誕生日プレゼントとしてもらった大切なものであり、当時のオレは両親からさえもプレゼントなんて物はもらったことがなかったので、そりゃもう宝物だった。あ、何度も言うが、沢村さん家について今は紹介するほど重要な人物ではないので、カットとする。

……事件の朝。いつも通り目覚ましが鳴ったわけだが、オレはなぜかなかなか起きなかった…みたいだ。

まあ、たぶんその理由は、前日に父親と母親が親戚やらなんやら呼んで、どんちゃん騒ぎしたおかげで寝れなかったからだと思うが。

目が覚めたとき、オレは異変に気づいた。

「て、天地が逆転してる！？ 世界の危機！？」

天地が逆転している…。そんなことは違う、とすぐに気づいた。頭に血がのぼって痛かったからな。

まあ…、つまり何をされていたかという、具体的に言うなら宙吊りだ。母親の得意技。

天井には、フックのようなものが打ち付けてあり、そこに縄を結んで、さらにオレの両足をその縄でしばり、吊り上げやがったのだ。

目の前には、逆さに立っている母親がいた。手には、ジリジリジリとけたたましい音を立てている目覚まし時計を持っていた。

いや、止めるよ…。上にスイッチあんだろ…。

当時のオレはそう思った。だが、目覚めたオレに母親は一言。

「止め方、わからない」

いや、わかれよ！ わかってくれよ！ 機械オンチにもほどが…、
っ！か目覚まし止めるのもダメなんてそれ以前だろ！

だが、当時のオレには余裕なんてものはひとかけらもなかったの
で、なんでそんなななかな人をわざわざ宙吊りにして起こすんだよとか
いう疑問はわかず、すぐさま答えた。

「上…。その2つの銀色の丸いやつの間にある…でっばってるやつ
を押しして！」

もう…、必死だ。頭が痛くて切れそうだったからな。

母親は右手で持っていた目覚ましを、左手の掌にのせた。チヨコ
ンと乗った目覚ましはまったく止まる気配はなく、何を思ったのか、
母親はそれを見てゴゴゴゴと地響きを鳴らし、怒りの表情を浮か
べている。

「え、なんで！？ なんでそこで怒る！？」

そのとき、オレは顔が青ざめた。母親の右手は、パーの状態にし
たまま、彼女の頭上にある。

辺りには目覚まし時計の耳障りな音だけが響く。嫌な予感…。

「ハアッ！」

とか何か無駄に気合を入れて、その手を振り下ろす。

「や、やめ！ そんな力いっぱい振り下ろさなくてもとま——」

——ジリジリジリジパアーン！！！！

もう遅かった。オレの大切な宝物は、はたきで追い討ちを
された小バエのような状態で、まっ。ろくろすけを捕まえた。イの
ように重ねあわせた手の中にあるのだ……。

「鳥の……さえずりで……起きなさい」

母親はボソリとクールにいうと、両手を重ね合わせたまま、どこ
かへ去っていった。考えてみれば意味もなく宙吊りをされている、
オレを置いて……。

それ以来、オレは鳥のさえずりでおきることとなった。今では時間指定をできるまでに上達した。癖っていうものは怖いもので、両親の長期休暇が終わってから鳥のさえずりで起きるように……。かなしいけど。

――。

――だからケータイのバイブ音で起きるなんてことは朝飯前だ！

まあ、ちよつと前までは鳥のさえずりで起きていたが、最近はケータイっていう物があるし、それに頼っているんだけどなあ。

あー、すんげえ大きく話がそれたな……。

まあ、そういうわけで、こんな”昔のトラウマその2”を思い出している間に準備は完了した。ちなみに取り出した食材やは、隣の澤山さん家に預けた。ホント、お世話になります。

あ、そうだ。机の上に学校への道のりを書いた地図をおいておかないとな。

なんだかんだで、現在7時半。少し……いや、かなり早いけど、そろそろウミナも起きてくる可能性があるし、学校へいくとするのかばんはもう玄関に置いてある。

- * -

放課後。オレは裏口に立っていた。

目には花粉対策用の透明なメガネ。右手には通学用かばん。その中には”ある物”が入っている。

あたりには砂嵐がふき荒れている。相当風が強い。

だが、これも計算どおり……。これならあの作戦もいけるぜ。ありがとう！ お天気お姉さん！

……そして、ヤツがきた。

「逃げないとはな」

もちろん、放課後こんな強い風の中、わざわざ裏口の広場に来るやつなんて1人しかいない。…ウミナだ。風に吹かれて変に威圧感がある。なーんかコイツ…雰囲気でてるなあ…。

「おまえこそ。つーか机の上にあった地図わかったか？」

まあわかったからここにいるんだろうけど。

「少々わかりにくかったが、お前の気配を探りながらきたから簡単だったぞ」

おー、怖い怖い。

「じゃあ、勝負だ！」

ウミナはそう一言言つと、それが合図とばかりに、フツとファイティングポーズを取った。来る…。だが、まだだ。もう少し時間を稼がなければ。

「おう…。あ、でも…」

「なんだ？ もう勝負は始まっているぞ！」

おっと、やばい…。なーんか話題ねえかなー。

「いや…えーつと……………それがですね……………なんというか……………」
ねえよ！

そのとき、凄まじい強風がふく。これはラッキーとしかいいようがない。

「強い風…。うつ！ 目が！？」

よし、ヤツは突然の突風＋ふきつける砂嵐で目に砂が入って開けられない。オレは花粉対策用メガネのおかげで目に砂は入らないぜ！
いまだ！…と、ここで一気に接近して攻撃、なんて事はしない。
アイツに力で勝てるなんて思っていないさ。だからオレはもっと別の方法でいく。

かばんから、タッパー取り出して、その場に置く。

中に何が入っているかって？ それは昨日ウミナがうまそうに食っていた”アレ”だ。かなり多めに入っているので、地面において

も吹っ飛ばない。

そして、10Mほど先の木の陰に隠れる。そこにはあらかじめ置いておいた網がある。

ただの網じゃない。縦3M、横3Mあり、四隅には重石がついている。つまり、獲物捕獲用の網だ。なぜ俺がそれを持っているのか、そんなことはこの極限の状態では問題ではない。

強い風が止むと、残されたのは両腕をクロスして、ふさいだ目を隠しているウミナと、オレが設置したタッパーだけだ。

「クツ、強い風だった……。だが勝負再開だ！……ってなに、いない！？」

ウミナの上にビックリマークがでた。もちろん、そこにはオレの姿などない。ここにいるからな。

「なぜだ！ どこへ行った！？ 逃げたのか！？」

しばらく辺りを見回していたが、もうオレはいないと思ったのか、「ふう」とため息をつく。

「腰抜けが……………」

心底ガツカリしているようだった。なんか心が痛むが、我慢だ。

「……………ん？」

そのとき、ヤツの目線がある物……もとい、罾用のエサを見つけた。それは紛れもない、タッパーだ。

「あれは……。中に食べ物が入っているのか！？」

イノシシの突進のごとく、すごい勢いで近寄り中を開ける。

「お……おおお！！ チャーハン！！ 今日始めて飯にありつける！！」

そう。チャーハン……というか飯。昨日見つけたお前の弱点なんてものはそれぐらいしかない。しかも……オマエは朝から何も食っていないはずだ。冷蔵庫の中身は抜いておいたからな。

タッパーの中にはせめてものやさしさとしてスプーンを入れておいたぜっ！ あ、小者とかいうなよっ！

って、そんな場合じゃない！ アイツが夢中でチャーハンを食っ

ている間…つまり今だけがチャンスだ！

網を持って後ろからウミナに近づく。結構音を立てて走っているが、ウミナは気づかない。

が、そのとき、また強風。

すさまじい。さっきより強いぞ、これは！

ウミナは砂が目に入らないように、その場で耐えているのが精一杯の様子だった。だが、しっかりとタッパーにはふたをしている。そんなに大事か！

オレは砂など気にしないでいいので、少しずつ前に進んでいく。痛いけどな。

後2M。

もうすこしか…。風のせいで、結構近づかないとウミナまで網が届かないはずだからな。

だが、そのとき驚くべき光景を見た。

ウミナの先。

誰かがいる。

何かを担いでいる…。

……あつれー？ オレの目がおかしいのか！？

あれは…紛れもない…。公園とかによくある…………子供からお年寄りまで…………みんなに愛されている…………。

ベンチ！

え？ なぜだ？ なぜ人がベンチ担いでいる。しかも、あれは”担ぐ”というより”持つ”だ！ ピンと伸ばされた腕は、軽くベンチを持ち上げている。

持っているやつは…………ボディービルダーのような体型をしたマツチヨでもない、何もかも無に返してしまうような巨人でもない…………。

パッと見てオレよりも背が低い…。…小柄な体型……。悪く言え

ばチビ。誰がどうみても、ベンチを片手で持ち上げられるような肉付をしてはいない。

そして、もう一つ発見。風…。

チビを中心に渦まいているような……。いや…気のせいであってほしいんだが……。台風の目、というやつだ。チビの周りだけ風がない。

この風は…チビが起こしている…？ うーん、名づけるなら、”移動型暴風生産機「人型」”。いやいやいや、それはないだろ。うん。ちなみにないのは前者も後者も、だ。

でもオレは実際にこの目で見ている。みたくはない。現実だけど現実味がなすぎて目をそらしたい。

そのとき、強い風と砂が打ち付けるなか、オレは一つだけ聞こえてしまった。聞き覚えのある声を。

「シーサイン……。死ね！！」

だが、その発言についての感想さえも考えている暇はなかった。チビは右手だけで持っていたベンチに左手をそえて、後ろに下がって勢いをつける。

ピッチャー振りかぶって、投げたーってあああ！？

ベンチ投げてるー！！

物理法則を無視しているかのような軌道。ベンチは一直線に、ウミナのほうに飛んできている。

当のウミナは激しすぎる砂嵐によって、とうとう砂が目に入って視界がかなり悪くなっているようで、動きが取れなくなっている。

そりゃさ、オレなんかが接近して殴るぐらいじゃアイツは立て直して反撃なりなんなりしてくるだろう。オレをボコボコにするためにね。でもベンチだ。一直線だ。当たったらひとたまりもない。仮にもウミナは女の子なわけだし。

いやでももしかしたら…。アイツ強いし、正々堂々正面から打ち砕いて…ん？

そのとき、俺は今まで自分のしてきた事を思い出した。正確には、

思い出し始めた。

正々堂々？

オレがその四文字熟語を口にする資格があるのか？ 元はといえばウミナがこんな状態で身動きを取れないのは、俺のせいじゃないか……。卑怯なこととして……。小者っぷりを発揮しまくって……。本当にこれが主人公でいいのか？

いや、よくないな。主人公がどうこうじゃなく、1人の女の子も守れないのは男としてどうなんだ？

昔、一方的に物事を言ってくる親父から、一方的に言われた言葉がある。

『世界を守るのも全力、1人を守るのも全力』

ちなみにこれは、夕食のおつかいを頼まれ、マーケットにいた時に”前触れもなく”一方的に言われた言葉でもある。いや、でもコメデイにカツコイイ名言なんていらねえ！…が、今回ばかりはそれを参考にしてやろう。

ここはいつちょ大物になってやろうじゃないか。

そう、まさに何も恐れないその心を表すかのように勢いよく地面を蹴る。

飛んでくるベンチの前に立った。さあどうしよう。何も考えてねえーぞ。

「エ、エン！？ エンなのか！？ きたな！ 勝負——」

「うるせえ！」

ウミナはどうせ勝負の続きだ！ とか言おうとしたんだろうが、そんなことを今考えていれば命があぶない。今は俺の叫びで遮る必要があった。

「え、え？」

「目の前からたいへんなものがきてるんだ！ 大人しくしてる！」

「え？ あ…お…お…う…」

コイツ、押されると弱いのか……。？ って今はこんなラブコメなことを考えるわけにはいかない。

ここで手に持っている網の感触に気づいた。これを投げれば…。

「これでどうだ！」

網でからめとれば…、うまくいけば地面に落とせる…かもしれない。正直自信はない。だがやるしかない。

強くふく風の中、力いっぱい網を投げた。ん？ 強くふく風の中？ 網はむなしく、砂の中に消えてゆく。

そしてオレは、両手を広げた。全てを悟る盾の様に。

もう、何も言うまい。

ベンチが俺に向かって、正確には後ろにいるウミナに向かって飛んでくる。そう、直線上にいる俺はウミナにベンチが当たる前にそれに当たってしまうのだ。だが、こうなれば後には引けない。

そのとき、全身に声に出ないほどの痛みが走った。どうやらベンチが当たったようだ。

「エン！ エン！！ なんだそのベンチは！？」

体が地面に倒れる。上に乗っかっているベンチが重い。

吹き付ける砂嵐の中、俺は動けずにいる。

「エン。どうした！ 起きろ！ 私の攻撃を受けても、たくましく起き上がったよきに！」

ウミナの叫ぶ声が聞こえる。

だからさ、あの時…俺…内股でしたよ？ たくましいって…なんですか…？ …ああダメだ、意識が遠のく。

今度こそ、今度こそ…そうなのか…。

グッバイ。マイライフ……！

第4話

寝床は力ずくで獲得しろ！―奪還？編―（後書き）

【次回予告】

「バッドエンドではない！」

エンの犠牲を得て、最後は王道的にオチた……が話はまだ続く。

ベンチを投げたのは……？ 聞き覚えがある声とは……？

次回、”寝床は（略）”編、衝撃のラスト！

意見・感想など募集です。お気軽にどうぞ！

第5話

寝床は力づくで獲得しろ！——決着？編——（前書き）

ついにオレはやっちまった。

策もないのに、自分からあの反則的な動きをするベンチに突っ込むなんて…。

そしてオレは……どこへ行った？

第5話

寝床は力づくで獲得しろ！——決着？編——

お花畑……。一面に見える光景だ。あー、きれいだなあ。

しかも体が軽い。これが天国ってヤツなのか……。？ そんなものな
いと思っていたのに、ホントさつきから信じられないものばつかみ
るよな……。――。

——さつき……？

そうか……。さつき……。 ” 変な台風チビ ” のおかげで、オレはベン
チを食らってここにいますと？

しかも、さつきの声……。オレはあの声の主を知っている。しかも
姿形まで同じときた。あれは……。たしか、オレと同じクラス。そう……

……青——ゴフツ！

痛った！ 腹痛ったつ！

「エンー！ 起きろ！ エンー！」

目の前に、よくわからない白いモヤモヤが出現した。煙っぽい
だが、なぜか人の形をしている。大きさは……。、オレの肩ぐらいま
ではあるだろうか……。しかも、その煙はあろうことかオレの腹に向
かって拳を振りかざしてくる！

やめ、やめろ！

痛い、それ痛いから！

「エン、死ぬな！ 起き——」

白い煙が拳を振り上げて、……。力を溜めている！？ マジでやば
い！ 溜めはヤバイ！！ オレは両手をブンブンと振っているが、
遅かった。

「——ろっ！……！！」

グフツ！！

激烈な腹の痛みとともに、拳に体が飛ばされる。オレの肩ぐらい
までしかない背……。しかもこのバカ力……。オレが最近記憶している
人物の中では、1人しか思いつきませんよ……。ウミナさん……。

そして、視界はどんどんお花畑から遠ざかり――。

――ガバツ――！！

と、目が覚めた……ようだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

ここは……ベットのの上……？ 辺りには消毒液のにおいがする。他には、車椅子やら松葉杖やらなんやらがあつた。

えーっと……、学校……の……保健室か？

「エン！」

オレに誰かが抱きついた。

「ん？！」

「死んだかと……死んだかと思つた……」

オレの腹に顔をうずめている。痛つつ！ 顔をうずめている部分に痛烈な衝撃が……！

顔を上げたソイツの目は、珍しく（いやというか珍しいもなにも、まだ会つて2日なんだけどな）涙が浮かんでいた。ソイツは最近突然きたヤツ。オレがこうしてベッドの上に横たわっている原因もコイツがきたから、と言えるだろう。

それより……

「おまえ、寝ているオレの腹を殴りやがらなかったか？」

「えっ？ あ……いや……」

オレの腹の部分から見上げてきているこいつは、目がシドロモドロしたようになってる。もう、バレバレだ。

「つい……… ちょっと……だけ」

コイツも少しはやりすぎたと思つていいのか、頬を赤らめてへへッ、とちよつと笑う。しかもその目線は完全にオレからそらしている。

ちよつと……… だけ？

「あれがちよつとだけなわけねえーだろうがぁぁー！！！！」

ドーン、とオレにかかつていた布団やらウミナやらを上を吹っ飛

ばす。ドサツ、とウミナが倒れた。ナームー……お仏壇のはせ——
「エン君？」

——そのとき、近くで声がした。

この声は……？ いや、遠目でもわかる。あれは明らかにこの学校の”生徒”ではない。

「先生？」

保健室の先生だ。最近赴任してきた、若い先生。しかも、若いだけじゃない。とびつきりきれいなんだ。つかオレの名前、知っていただくさったのか。

カツ、カツ、カツ、とハイヒールの音が近づいてくる。オレの左側に先生の香水のいいにほひが……

「起きたのね……。よかったあ……」

か、かわいい……。予想以上だ……。いやとびつきりきれいっていうのは、クラスのやつから聞いたわけで……。その人はその言葉を大きく凌駕している。

胸の辺りまである黒髪。最近流行の巻き髪ってヤツをしている。

それが妙にお嬢様感を出している。目はウミナや母親とは正反対にたれ目……だ。すごい癒し系な顔をしている。もうすでに癒されている。

そして、胸。豊かな胸はグラビアをやっているんじゃないかってぐらい、その……、大きい。

出るところは出ているが、締まるところは締まっていて、これが大人な体のライン……。いいスタイルってヤツなんだろう。

んで、こう、すごい綺麗なのに……、一つだけ疑問点。

なんでナースさんの格好してんの……？

保健室の先生がナースの格好って、もはやコスプレにしかありませんよ。つか学校はこれを許してもいいのか！？ 先生達はあれか、ナース服フェチなのか！？ 懂れか！？

この人が着ているところを見た人は大勢いるはずだ。だが、この人がこんなにも似合っているから許してしまっているのか！？

先生はオレの”衣服”への視線に気づいたのか、頬に手を当て赤らめながらモジモジしはじめる。

「あの…その…あんまり見られると…恥ずかしい…なあ…な…んて……」

「あ、いやすいません、つい……（服が色々な意味で）すごかったもので……」

「え？　そ、そんなにす、すごいですか？　私の（体）……」

「あ、はい……」
いや、そりやそうだろ。保健室でナース服きている先生なんて見たことないもんな。

「試して……みる？」

え？　お、オレにナース服を着ると！？　いやそりやダメだろ！
男として！

きたらオレの色々なものが壊れるし、もしそんな現場見られたらオレの高校生活が終わりを告げる！

「い、いや……ダメですよ。大体オレは男ですし。そんなの…たいへんなことになりますよ」

まあ、ふざけて言ったんだろうが、一応断つてはおこう。

「いいの、雄になっても……。あなたなら……、あなたとなら……」
と、あるうことが先生がオレの首に手を回してきた。先生の吐息

がオレの耳にかかる…。

お、雄？

この時、オレは理解した。

この先生なんか、勘違いしてね？

「あ、いや先生、ちょっと……」

ここは放課後の保健室だ。外も暗くなってきたいて、とても誰か

が入ってくる様子はない……。しかも、オレの格好はブレザーを脱いで、Yシャツ一枚。という格好になっている。

先生がオレのYシャツのボタンを上からはずしていく。その指先が肌に触れるたびにびくつ、と反応してしまう。

「緊張しなくてもいいのよ……」

ニコリと笑った。その笑顔は先生の大人びた顔を一層引き立てている。ああ、こりやもう逃げられそうにない。ここには誰もこないわけだし、このままオレは……。

ん？

誰も……？

そのとき、オレは殺気を感じ取った。先生の背後に……ヤツがいる。白い殺気^{オーラ}を出して……、こちらを向いて……いる。握ったその拳はふるふると振るえて……いる。

そして、殺気を持ち主は力を見せ付けるようにして、そこらへんにあつた鉛筆を持ち、

バキッ

と粉々に折った。

「や、やばい……」

「そんな、大丈夫よ……。この時間は誰もこないから……」

先生違うつす。そっちじゃねえっす。オレがガタガタ震えながら先生の後ろを指差す。

ん？ と先生がそちらを向く。

「あ、え！？ きゃ、きゃあ！」

と、言つてオレを思い切り押し離して離れ、猛ダッシュでドアまで行き、でていってしまった。オレは！？ 捨てられた！？

結果、この保健室という一つの空間には、オレとウミナしかいないわけだ。そして、ヤツは白いオーラをムンムンと出している。

殺される……！！

立ち上がろうとベットから足を出した。そのときフツ、とウミナの姿が消える。

「え？」

その瞬間、オレの目の前に…ヤツの姿が…。恐怖だ。人間、頑張ればこんなこともできるようになってしまうのか。

「私が倒れている間に…先生と…な…。ずいぶん元気なもんだ…」

「いや、こんな白い殺気を出して瞬間移動できるやつなんて、そうはいないだろ。オレが知っている限り数人だ。困ったことに、その数人はオレの身近な人物であるのだから。」

「い、いや、あの…仕方なかったというか…。ほ、ほら寝起きで状況が読めなかったし」

必死な抵抗もむなしく…とはこの事を言うんだろ。むしろ抵抗にすらなっていない気がする。

「そうか…じゃあ一生寝ているおお…!!!!」

ウミナが振りかざした拳は、オレの腹へ一直線。

「だいたいお前には関係な——ハブウツ……!!」

最後の本音もむなしく、また…意識が…。もう…こんなオチは…嫌だ…。

そして、オレの意識は儚くもここで途絶えた。

……。

次に起きた時、景色は保健室ではなかった。ここは…、外？そして、上下にゆれながらも視界が進んでいる。

すれ違う人はみんなオレを見てプツと笑ったり、目を合わせないようにさっさと通ってゆく。

「起きたか…」

”オレの下から”ウミナの声がする。

下？

……状況把握。

コイツは自分よりも、数十センチ背の高いオレをおぶって歩いている。そして、その光景は最凶にかっこ悪いわけで……。

「お、お前……おろせ！！」

「暴れるな！ おろしてやるから！」

なんか上から目線な風に言われた気もしたが、さっさと地上へ着地。あー、恥ずかしい。何人に見られた？

「ほら、いくぞ」

ウミナが歩きだす。

「わかつとるわ」

二人並んで歩きだす。

考えてみれば、こいつとこうして落ち着いているのって初めてだよな。まあまだ会って二日目なわけだし、驚くほどでもないのか？ いや……でも、この二日間は濃かった。

逆に言えば、コイツがきてまだ2日しか経っていないことに驚いた。来てからというものの、初対面だったはずのオレに、全く“遠慮”というものをしない。だからあんな大暴れをするんだろうがな。」「その、今回は……」

急にウミナが口を開いた。

「今回？」

今回……って……？ そんなオレの疑問にも答えるような余裕もなかったのか、ウミナは続けた。

「負けにしておいてやる……。私も危ないところを助けられたわけだし……。だから、その……ベットは……譲ってやる」

勝負……、そうか。オレはコイツとくさくも勝負をしていたわけだ。結果、オレの見苦しい作戦は失敗し、天国行きになった。

だが、コイツからそんな言葉がでるとは……。くー、兄ちゃんはどう

れしいよ！ まあ最も、コイツの兄貴になるなんて死んでも嫌だけどな！

「そ、そうか！ い、いやあうれしいなあ……」

ポンポン、とウミナの頭を手で軽くたたく。そしてふとウミナの顔に目をやると……。

「グ……ス……」

……。

………？

コイツのこんな顔を見るのは2回目だ。1回目はオレが起きた時……コイツに殴り起こされた時だ。

コイツの強がっているようなキリツとした顔にはいつものような威厳はなかった。ウルウルと大きな目もぼやけている。自分でそれに気づいたのか、両手で必死にぬぐう。

「な、泣いてなんかいないから……」

コイツ……大人だなあ……。こんなに……、泣くほど悔しいのに……、本当に戦ってもいないオレに負けを認めるなんて……。オレも……大人にならないとな。いつまでもセコい小者のままじゃ……ダメだ。

「今度買いにいくか！」

一言、言ってやった。ついでに両手を挙げて背伸びする。

「え？ 買いにつて……」

「ふかふかなベツトに決まってんだろ！ ウミナ専用のな！」

「へ！？ い、いいのか！？」

あらまー。キラキラした目しちゃって。

「いいぜ。でも、それまでいい子にしてるんだぞー」

「お、おう！ いい子にしているぞ！」

うん。大人つてのは撤回。まだまだ子供だ。でも、コイツのおかげで、オレも少しだけ気の持ち様ってヤツを少しは……本っ当に、ほんの少しだが、……いや、やめておこう。

オレも潔く認めてやるか。

お前のおかげで劇的ビフォーアフターだぜってな。
え？ 台無し？ い、いや、まあそういうことだ！

まあコイツと行く買い物っていうのも楽しみだ。”ある意味”な。
って、当の”コイツ”ははしゃいでずいぶん遠くにいるし……。本
当に元気なヤツだよ。さっきまでのかわいい涙はどこへいった？
「こら、ウミナ。もしこのままお前が迷ったら、オレが面倒なこと
になるだろうがー！」

でも、

「だったらエンがついてくればいいだけだ！」
「いい子にっていうのは…？ いい子にしてるっていうのはどうな
ったの！？」

こんな風に元気で生意気で自己中なウミナも、ウミナだ。生意気
で自己中でも少しばかりは我慢してやろうじゃないか。それでウミ
ナの元気な笑顔が見れるなら。

でも、約束は守ろうね……。

第5話

寝床は力ずくで獲得しろ！―決着？編―（後書き）

すみません。数日前から風邪を引いていたのですが、ついに昨日ダウンしてしまい、更新できませんでした…。

気を取り直して、「寝床は力ずくで獲得しろ！」完結です。

このシリーズは結果的に3話に分けることになったんですが、これは僕としても予想外でして…（汗）

というのも、実はこのお話、2話で終わる予定だったんですが、それが色々付け加えていくうちに、伸びてしまいました…。

そんな感じで行くので、これからよろしくお願いします！（笑）

意見・感想など募集です。お気軽にどうぞ！

第6話

ヤツの正体と巨漢軍隊のギャップ（前書き）

ついに決着がついた。

結果は…、まあ言う必要はないんだろう。まあそれはそれとして、今回は新しい展開らしい。

第6話

ヤツの正体と巨漢軍隊のギャップ

突然だが、オレの職業は学生だ。ということはこの物語を読む上で知っている必要がある。

学生の仕事は勉強、とか言うぐらいだから、さしずめ学校は学生の仕事場というべき場所だろう。だから、というわけではないが、オレは毎日学校に通っている。

場所は…、オレの家から歩いて数十分ほどで着く学校。南坂高校だ。

入学動機とか聞かれると、…まあ、”近いから”とかいう何の格好もつかない一言で片付いてしまうわけなんだが、入ったことに後悔はしていない。だが学校というその単語を聞くだけで憂鬱になる奴もいるような場所も、オレはそれなりに気に入っている。

まあ、つまりオレが言いたいことは、今日も学校というわけだ。

ちなみに、ふかふかベット事件…、そうそう、オレとウミナの大決戦のヤツだ。あれは一応解決したのだが、ふかふかベットを買うまではなぜかオレとウミナが同じベットに寝ることで、平等となる……らしい。いや、ウミナが言っていたことだから、オレにはよくわからん。

数日後の休日に、ベットを買いに行ったりするのだが、そのお話はまた別。

今は学校へ行くことに専念したいと思う。

朝。

朝食を食べ終わって、片付け。といういつもの行動だ。ウミナはまだグース力寝ているだろう。まあ、まずアイツが早起きなんてできるかが疑問だよな。

だが、起きられても困る。なぜそう思うのか、というのは昨日の

会話が原因だ。

それは、例によってウミナと同じ布団で寝ることになったのだが、その際布団に入ったとき――。

――ベットは広い。まあウミナみたいな小柄な奴ぐらいなら、オレがいてもらくらくと入れる。

だが、体が少し密着するのは避けられないわけで……。まあそこは意識してはいけないポイントだと心がけている。無意識にそんなオレの努力も何も考えないで行動してくれるのがウミナなわけで、眠っている時は平気で腕に抱きついてきたりする。まあ、今はまだ眠ってはいないだろうから、その心配はないけどな。

そんな心配をしていると、右から声。

「エンは明日学校か？」

「ああ、平日だしな」

なんだ、急に？

「そうか……」

妙に寂しそうな声をしているじゃねえーか。もしかしてなんか悩みでもあんのか……？ ほら、まだきたばかりだし。

「元気ないな……。どうした？ できることなら力になってやるけど」

コイツの顔は一瞬だが、パツと明るくなった。

「じゃ、じゃあ……あ、明日……私も学校に――」

「――あ、それはだめ」

「なぜだああ！！！！ 力になってやるといったではないかああ！！！！」

オレをポカポカと叩いてくる。いや、ポカポカは間違い。ドカドカ、だ。お前のそのパンチ手加減しているつもりだろうが、無駄に重いんだよ！！

「ハハハッ、それとこれとは別ってやつだよ」

オレは頭まで布団を被って、ウミナとは反対の方向を向いた。

ウミナはオレが反対を向いた後も何か言っていたようだが、オレは聞かないようにしていたので何を言っていたかは知らない。そして、そのまま眠りに着いた。

――。

ってことだ。ウミナが学校にきたら（いや、というかすでに一回来たが、ほとんど外にいたのであればノーカウントと考えると）何か色々やらかすのは目に見えてわかる。

そうなれば、その責任は現在ウミナの保護者をやらされているオレにくるわけだ。それだけなんとしても避けたかった。

とりあえず、朝飯も昼飯も用意しておいたし、コイツが家にいてくれさえすれば飢えて死ぬことはないわけだ！ うん。アイツのことだからきつと何もできずにグダグダと一日を過ごすに違いない！
だいいいな！

- * -

学校に着いた。いつも通りの真ん中一番後ろの席に座る。

「おはよう」

オレの右から声がした。そちらを向いてみると、静風さんがニコリと笑っていた。

「お、おはよう」

オレも静風さんのような自然な笑顔を見様見真似でやってみる。

うーん。鏡みないとわかんないけど、筋肉が引きつっている感じがする……。静風さんみたいな自然な笑顔はオレにはムリなようだ。

静風さん。

忘れた奴がいたらオレが怒るが、第1話の初めに出てきたオレのクラスメイトだ。おとなしい性格で、メガネをはずしてからというもの、ひそかに男子の人気が上がっている。

時計を見た。8時30分過ぎ。もうすぐ朝学活……SHRを告げる鐘ショートホームルームなる。

そういえば、昨日みた台風チビ……。ソイツの正体はオレが昇天してたときに考えていたけど、邪魔されたんだよね……。あの怪力超人バカに。

そう、あれはたしかに……青——。

「おはよー！」

オレの目の前に現れたのは、女みたいに肩まである髪型に女みたいな——縮めて女面の青野だ。

「よ、よう」

だめだ。なんて言えばいいかわかんねえ……。だって……。

「どうしたの？ 元氣ないねえ……」

「い、いや……。なんでもない」

「そうなの？ じゃあ……」

そういつてトボトボとどこかへ行ってしまった。

オレが戸惑っている理由……それは……、昨日のウミナとの勝負の最中のできごとが大きく関係している。

あのとき、ベンチを反則的な軌道で投げた台風チビは青野とそっくりな顔と格好で、青野とそっくりな声をしていたのだ。というかあれは絶対青野だ！

一度昇天した身だが、それだけははっきり覚えている。はっきり覚えているもんだから、オレには見なかったフリなんてできるはず

もない。

だが、アイツの様子は”まるで昨日のことを何も知らない”かのような演技か？

いや、ここで根拠のないことを色々考えても仕方がない。後で問い詰めてみようじゃないか。

- * -

と言っても俺の頭の中ではその事がグルグルと延々に回っていたわけで…。少しだけ気疲れしながらも、昼休みになった。やっとだぜ。

席から立ち上がって、青野の席へ。アイツの席は一番前の一番左つまり窓際だ。

いつも朝青野がオレにやっているように、青野の目の前に立ちふさがる。

「え？ ど、どうしたの？」

いつもオレから青野に近づくことがないからか、驚きを隠せないようだ。いや…もしかしたら、オレが問い詰めようとしていることに気づいたのかもしれない。

「話がある。屋上に来てくれ」

単刀直入にビシツと言ってやった。

「えっ？ う、うん……」

なぜそこで赤くなる。オレのこのりりしくて真剣な表情が見えないのか？

赤くなるようなこと話す雰囲気顔じゃねーぞ！。

そして、屋上。もちろん、屋上には何もなく、なんとなくフェンスのある端のほうへ誘導した。高い所にあるからだろうか、風が強

い。しかも、その風は少しだけ冷たかった。

「一つ。真剣に聞きたいことがある」

「う、うん……」

最初の切り出しはバッチリだ。これで、真剣なムードがあたりに漂った。ごまかされることはない。

いや、だからなんで赤くなっている。風邪か？ 風邪なのか？

「お前、昨日の放課後……どこにいた？」

「え？ き、昨日の放課後？」

拍子抜けな顔をされた。何か重大な話をされると思ったのに、案外普通の軽い話だった時のような顔だ。

「授業終わったら普通に帰ったと思うけど……」

「本当か？」

「う、うん。本当だよ。帰ってからみたいテレビあったし……」

「その言葉に嘘偽りは本当じゃないのか！？ 本当のことを言ってくれ！！」

思わず力が入って青野の両肩を思い切りつかむ。

「な、なんで……？ なんでそんなに疑うの……？」

「そ、それはお前が……ベンチ——」

と言いかけた所で言葉が詰まった。コイツの目はオレに怯えている……？

バカかオレは……、これが演技なわけない。コイツが言ったことは大マジ真面目だ。

この震えた体……。潤んでもう涙がこぼれ落ちそうな目。これが……これが人を本気で殺そうとした目なわけない。そうだよ。勘違い……。

あ、それなら謝る必要が——

「うわあああん！！」

その瞬間、青野は両手で目を覆いながら走り去っていつてしまった。

っておいおいおい！！ 行っちゃった！？ これはいつもの朝の

ひとコマとは比べ物にならないほどやばい！ 追いかけて謝ろう。
オレは焦る気持ちも込めて地面を蹴った。

教室に戻ると、青野は自分の机の上に伏せていた。そんなにシヨツクだったか……。すまん……。

青野の前に行き、しゃがみこんだ。

「さっきは……すまなかった！！ オレの勘違いだ！」

手を合わせて、誠心誠意謝った。これが今のオレにできる精一杯のことだった。

「勘違いなんかじゃないわ。キミの言ったことは大当たり」

……………え？

オレは自分の耳を疑った。コイツが完全に女口調になっているとかそういうものじゃない。いやもちろんそこにも十分に驚いてはいるが、いいたいのはそこじゃない。声質から何から違う気がするからだ。

フツと上げた顔からはさきほどのオレに怯えていた顔の面影はない……。

逆だ。逆にオレが恐怖を感じる。なんだこの目は……。何も感じさせない……。無がこれほど怖いものなんて……。

「おまえ……本当にあの青野か……？」

そう思わず聞いてしまうほど、いつもの青野とはかけ離れているのだ。

「違うわよ」

え……っと？ ちょっと……まで。ち、違う……わよ……だと？ いくらなんでもこれは予想外するぎるぞー！

「私は青野南子アオノナコ」

「……青野……南子……？」

いやいやいやー！！ 何言ってんだこの電波君は……！！

どうした？ 泣きすぎて頭がイカれたのか？ もしそうだったら

手のつけようがないぞ、おい。だいたい苗字は同じじゃねえか。

「なに？ その疑った目は？」

「つかコイツの目……。いやまあ青野なんだが、なんか見たことがあるんだよね……。いつもの青野の目じゃ似てないけど……。今の青野の目は何かに似ている。」

「い、いやあ……。青野……さっきは本当にすまなかった。だからもう戻ってくれ！ 2重人格ゴツゴだけはやめてくれ！」

「は、はい？ だから、私は青野ナコだって言ってるでしょ」

「まだもう一つの人格のほうなのか！ わかったよ、わかったから戻ってくれ！！」

すると、突然青野……ナコがオレの胸倉をつかみ、じりつとよった。

「何度言わせるの？ 私は、あ・お・の・な・こ」

「ご、ごめんなさい……」

こ、怖うわっ！！ オレの言葉を聞いてパツ、と手を離すと、腕を組んだ。

「昨日のベンチを投げたのも、私。ナキの言っていることは本当。ナキはやってない……、本当に何も知らなかった」

うー、コイツが女口調で喋るとマジで女に見えてくるぜ……。

……ん？

ここでオレの頭に（やっと）ピンと何かが走った。ナキは問い詰めても本当に何も知らない様子だった。そして、教室に行くとまったく別人のような性格そして様子。

しかも自らを青野ナコと名乗り、青野ナキとは別人ということをかたくなに主張……。

「もしかして……。本当に別人？」

「ずっと言ってたでしょ！！」

「ど、どちら様？」

「だから青野ナコだったっのー！！」

「グエツ!!」

顔に痛みが走る。グーパンを一発入れられたらしい……。手加減をしてるのか、ウミナほどの力は感じないが……。それでもいてえ……。

あ、じゃあ本物の青野はどこにいったんだ!? 早く謝らないと。あの様子じゃ今頃アイツは、どこかへうずくまっているだろう。

「じゃあ青野ナキはどこですか?」

オレなぜ敬語! 相手はたぶん同い年でオレにタメ口だぞ! あー、でも体が勝手にいったんだからしかたないのか!

「こん中」

人差し指で自分の胸の中をさしている。

「あ、いや、ナキはいつもオレの胸の中にいるんだぜ! とかはいいですから」

「違う!!」

「グエ!!」

また顔を殴られた。このまま骨格が変わったらどう責任とってもらおうか。

「だから、この体はナキの体。私はナキとは別人! えーとつまり……なんていえばいいのかな……。えっと、色々あつて私がナキの体に入り込んでしまったんだけど……」

え? 二重人格説がここにきてよみがえるとは。もはや何でもありですか。もうなんか混乱してきた。

「そうですか……」

「また疑ったりしないの……?」

「いや、なんか、もういいんです」

なんかもう信じてあげないとこの話が終わらない気がしてきて……。それに、海外から走って数時間でオレの家までこれる人がいるし、この人もよくわかんないけど物理法則を無視してベンチを投げれるみたいだから……。もういいかなって。

オレ、どんどん普通の生活からかけ離れてるな……。

「信じてくれたみたいで、ありがとう。ナキのことも信じてあげてね……」

あー。なんかこの人まじめにかかってねえ？

なんで「シーサイン！ しねえ！！」とか今のあなたの口調からは想像できないようなこと言ってる物理法則を無視した軌道でベンチを投げたんですか？ とか、もし本当に青野の体に入りこんでいるとしたら、どういう経緯でそういうことになったんですか？ 色々とか一言で片付けられてもオレとしてはモヤモヤするだけですよ？ とか、同じ苗字を名乗っているけど青野ナキとはどういった血縁関係なんですか？ とか、聞きたいことは山ほどあった。

「あの、聞きたいことがあ——」

「あーっ！」

「あーっ！？」

言いたいことを言っている途中で中断されたうえに、思わず言葉を追いかけてしまう。

「もうそろそろナキのほうになってしまっわ！」

逃げた。この人絶対逃げた。

「じゃあ、ちゃんと謝ってあげてね！！」

フツ、と一瞬白目になった。この顔は絶対人に見せてはいけくないな。

黒目が戻ると、青野（たぶんナキ？）が目をパチクリさせて、こちらを見上げている。

「あ、あれ？ なんでエン君が……？」

あーっと謝らないとな。

「青野…さっきは疑ったりしてごめんな……」

「え？ あ、…うん！ 大丈夫だよ！」

青野の顔がパーツと明るくなった。うん。めでたしめでたしだ。だけど…単純だよな、コイツ……。

それにしても……、青野ナキと青野ナコか……。もしオレの気づかないウチに入れ替わってたりしたら…、うん。ナキの扱いをナコ

さんに見せたらベンチを投げたようにオレも投げられかねん。

そうなる前に対処しておくか。

「んでだ。青野」

「うん」

「お前のこと、苗字じゃなくて名前で呼ぶぞ」

これに対策はバツチリ。もし変わってたらナコさんが「今はナコよ」とか言ってくれるだろう。って考えてみれば入れ替わるときいきなり不自然に白目になるんだから、オレにもわかるんじゃないか。だが、青野「いや、ナキはオレが口を挟むスキを与えなかった。」

「え！？ 名前で呼んでくれるの！？ ありがとう！！」

そして、こみ上げるうれしさの勢いのような感じで机を叩いてバツ、と立ち上がった。いやうれしさかどうかは知らんが、少なくともなんか目がそういつているぞ。

「ってやめろー！ー抱きつくんじゃねえー！ー！！」

やめろ！！ オレにそんな趣味はない！！ 勘違いされる！！

あ、静風さんそんな目でオレを見ないでー。ってナキの親衛隊の男子がすごい目つきでオレをにらんでいるー！？

「はなれ…ろ！！」

オレに力いっぱいしがみ付いてくるナキを、力いっぱい引つ剥がした。すると、数人のガタイのいい男達が、オレの目の前に立ちふさがる。

「火山エン…。前々からマークしていたが、ついに行動に移したか…」

「え？ え？ ちょ、ちょっと？ 行動に移したって、あのオレ何も…」

「御託は無用だ！！ 青野ナキたん親衛隊隊長・五里田呉狸ゴリタリの名に
おいて、お前を狩る！！」

「たん！？ たんって言ったよこの人！？」

あれか、例のナキに好意やらなんやら抱いている一部の変態男子共か！！ 一つ言わせてくれ！ なんでガタイのいい奴ばかりな

んだよ！

変態共がオレにジリジリとよってくる。

こついうときは、頭を使え……。コイツらのわかりやすい弱点は……。あ、そうだ！ あれしかない！

オレは巨漢どもの後ろで、しりもちをついているナキを指差す。

「あー！ ナキが尻餅をついた拍子に、ズボン脱げてるー！！」

巨漢どもは新幹線が目の前を通り過ぎるような速さで、オレの指をさすほうを見た。変態巨漢共め。

「ズボ——って脱げてない！？ でも……尻餅をついたナキたんも……イイ」

頬を赤らめて巨漢たちは悦に浸っている。

1人は両手を口にあてるといふブリッコポーズ、1人は自分の小指を甘噛みするというセクシー(?)ポーズなど色々だ。

ダメだ。どれもマジで気持ち悪い。吐き気がする。

ということ退室させてもらおう！！

「あ、隊長！！ 痩せ狼が逃げ出します！！」

オレが前を通り過ぎた時、その通り道にいた隊員Aがオレを指差して叫ぶ。つかヒドイいわれようだな……。オマエらに比べたらオレは相当マシなほうだと思っぞ？

「お、追えー！！」

巨漢隊長殿がオレのほうを指差して隊員をうながし、自分も共に走ってくる。だが、でかい図体が一斉に教室の一つのドアからでようとするれば、当然——……

「う、うわー！！ ドアに挟まって動けない！？ だ、だれか抜けるー！！ でれんー！！」

——という風に、混乱が生じてオレを追いかけるどころではなくなる。オレは冷静になりながらも、必死に逃げた。

……あれ？ そっいえば色々あったおかげで気づかなかったけど、

今日はウミナ来てないな……。アイツのことだから絶対来ると思ったのに……。

いや、でもよかった。実に良かった。このままオレの高校生活は普通に遅れるようになってくれよ？

よくわかんない二重人格の片割れにあったり、ホモな巨漢達に追いかけてる時点で普通ではない……てのはなしな。

テレビの大音量が響く部屋。居間のくつろぎスペースと呼ばれている場所には、ソファーやテレビがある。普段この時間に人はいないので、静かなはずだが、今日は違った。

ソファーに女の子が1人寝ている。テレビを見疲れたのか、リモコンを握り締めてぐっすり寝ていた。

「むにゃむにゃ……今日の出番は……これだけなのか……？」
わかりやすい寝言を言ってる。

第6話

ヤツの正体と巨漢軍隊のギャップ（後書き）

お疲れ様でした。

毎日更新はなかなか難しいようで、こんな感じになってしまいました…（汗）

できれば毎日行きたいですが、たぶん現実はそう甘くないでしょう…。ですが、できるだけがんばってみます！

意見・感想など募集です。お気軽にどうぞ！

第7話

結果から言えば作戦失敗（前書き）

二重人格にホ。巨漢軍団…、もうわけがわからなくなってきた。状況を把握できない。これからどうなる？ 状

第7話 結果から言えば作戦失敗

オレの学生生活が続く限り、朝の登校という案外面倒くさいものはほぼ毎日繰り返されることだろう。

オレは登校するとき、いつもあまり何も考えずただブーツと学校を目指している。とはいえ、アホ面はまずいので、ブーツとしているのは心の中だけで、顔はちゃんと希望を持って前を見ている…はずだ。

今日もいつものように、ただブーツと歩いていたかったが、何せ昨日の出来事のせいで、その事について考えざるをえなかった。

昨日は、あの通り変態共をうまくまいたが、お昼休みというものの後には、まだ午後の授業というものが残されているため、結局は教室に戻るハメになった。

まあ、もちろん教室には例の”隊長殿やその隊員”がいるので、ソイツらの目線が妙に痛かったのは、印象深く覚えすぎていて忘れない。

だがヤツらにも一応”知性”というものはあるようで、先生という名の”教室の総監督”がいる前ではオレに表向きの敵意を向けてこない。が、オレの前を通り過ぎるときに、

「オマエイツカコロス。オマエイツカコロス」

というド。えもんもびつくりな口ボツ口調で、その発言するのは正直やめていただきたかった。

そういうのは気にしないのが一番なんだが、何せモノがモノなので、それはとても難しいことだ。

そして、その変態共がオレに敵意を示す根本的原因の青野ナキとも色々あった。

と言っても、確かに青野とはいざこざがあったが、どちらかといえ

ばたいへんなほうはナコさんのほうだ。

まだ半信半疑ではあるが、なんとなくナコさんの存在を信じてもいい気もしてしまう。

なんつーか、ナコさんの言葉の一つ一つにナキへの想い…というか愛？　が見えた気がしたからだ。

だけど、本当にナキの体に入り込んでいたとして、なぜあんなつたんだ？　科学的に証明することは絶対的にできないだろうから、調べても無駄だ。つまり、知る方法はただひとつ。

次にナコさんが現れたときに詳しいことを聞く。

これしか方法がない。しかし、簡単なようで難しい。

それは、ナコさんがいつどうやって出てくるか…つまりナコさんが出てくるための条件がわかっていないからだ…。こればかりはよく見ていないとわからないだろうな…。

もうひとつに気になったのが、ナコさん自身の肉体は現在どういう状態かってことだな……。生きているのか、死んでいるのか……。まあ、どっちにしるナコさんに聞く機会をうかがうしかないか。

そんなことを考えていると、もう学校の近くまで来てしまっているわけで、後数十mもあるけば校門の前だ。

「エンくーん！」

そのとき、後ろから声がした。とても澄んでいてキレイな声…。

振り向くと、ななななんと静風さんが！　見るだけで浄化されそうな笑顔で——触れるだけでどんな怪我も治してしまいそうなキレイな手を振って——見ると思わず顔が伸びきってしまうようなキレイなフォームで走ってきているではないか！

「し、静風さん？」

オレの前に止まると、ひざに手について息を整える。うん、10点。

「ハア……ハア…フウ」

決してそういうのじゃないぞ、ただ息を整えているだけだ。おい、オレの下半身はおとなくしている。

息切れが収まった静風さんは体を上げてこちらを向き、改めてと言って感じて笑顔になった。

「ごめんね。エン君が見えたから…思わず走っちゃった」
「キハアアアア！！」

その言葉と笑顔があれば飯を10杯はいける！

「だ、大丈夫だよ。じゃあ行こうか」

静風さんのような自然な笑顔、トライ2実行！

……たぶん失敗！

校舎に入ると、まずロッカーがあつて、その中に靴やら入れるんだが、オレと静風さんのロッカーの位置は名前の関係でまあまあ近かった。

ちなみに、ロッカーは2段に分かれている。ちなみにオレは上段のほうの列のロッカーで、静風さんは下段のほうの列のロッカーだから、静風さんがオレを見上げる形になる。

「エン君。今日1時間目なんだったっけ？」

やばい。上目づかいはもはや凶器の域に達している。

「えーと、地理かな」

「地理かぁ…。よかったー」

あ、そうか。

「やっぱり一時間目が好きな科目だとやる気です？」

静風さんは両親が旅行好きなせいで、昔から春夏秋冬の長期休暇は海外旅行だったそう。あ、秋は休みがないか。まあいい。

それで、色んな国を見て回っているから地理関係はすごく得意なようで、同時に一番好きな教科でもあるらしい。

「うん！でもこうして朝からエン君と喋れるのも——」
「え？」

「い、いやなんでもないの。行きましょう!」

「そ、そうだね…」

最後ゴニョゴニョ言ってるんだったかわからなかったんだが…、
なんだったんだ?

教室で椅子に座る。

いつもならここであのチビ女面野郎(矛盾だらけ)——ナキが
オレの前に来て、なんか色々いつてくるんだが、今日は”ソレ”自
体がいない。

すると、本当に狙ったんじゃないかって思うぐらいいいタイミン
グで、前からドアを開けて入ってくるが1人。

……ナキだ。おいおい、本当に狙っているんじゃないか? それ
ともコイツにはそういう才能があるのか?

つか、いつもならオレより早く来ているのに、今日は寝坊でも
したのか?

つと…昨日のことがあったからか、ナキのほう気になって仕方
ないな…。って、あ、そういう意味じゃないぞ。オレはあんな変態
巨漢軍隊の一員みたいな考えは微塵もない! 本当にこればかり
は譲れない。

が、ここで異変に気づいた。

ナキが入ると、例の百人十色変態巨漢軍隊がゾロゾロと一列でそ
れに続いて入ってくる。

「え!?!」

思わず立ち上がると、ナキがこちらに元気な笑顔で手を振った。
やめてくれ、その後の展開は見えているだろ。

「おはよー!」

ほらな。こうなるんだよ。

後ろの巨漢たちのオレを睨み殺すような目が見えないのか。あ、

いや後ろにいるから見えないのは当たり前だが。いや、でも昨日のこと考えれば、ここで手を振ってはいけないことはわかるだろう。あれはクラス全員が腰を抜かして目玉が飛び出すほど驚いた事件だからな。

ここまで言ってるんだからわかるだろうが、後ろからつついているやつらは昨日の巨漢たちだ。

巨漢の先頭：つまりナキの後ろには例の”隊長殿”がいる。

ナキが軽快な足でオレの机の前まで来ると、巨漢たちの肉食動物のような睨みは一層強くなった。おまえら早く席に着け。

「あ、あいつらは…？」

オレが巨漢の方に視線をやると、ナキがそちらを向いた。

おかしい。さっきのオレを突き刺すような目はどこへ言った。なんでそんなおまえらには似合わないような小動物のキラキラ目をしている。

ナキがこちらへ視線を戻すと、また肉食動物の目に戻る。もはや何もいわない。言いたくない。

「ああ、あの人たちね。昨日色々あったでしょ？ それで、実は彼らはなんかボクのファンみたいで、これからもファンでいていいですか？ って言われたから——」

い、いやもうファンっ？ かもう…なあ？ つーかコイツが昨日初めてその事を知ったことに驚きだ。クラスの全員…いや学年全員…いやいや学校全体が気づいていると思ってたのに。

「——一緒に登校したんだよ？」

それはおかしい。あの軍隊を引き連れて登校する神経はおかしいあれか、ヤツら肉食動物のような牙にやられたのか。ちなみにヤツらが肉食動物のような牙をしていることは想像だ。

だが、ここで変なりアクションを取ってみろ。展開が見えているだろう。

呼び出し食らって、逃げて、追いかけて、包囲されて――
だ。

ああ、考えるだけで鳥肌が立つ。

「そうか。それはいいことだ。よかったな。じゃあもう鐘が鳴るから席についていろ」

「う、うん」

会話終了！

我ながらなかなかの表面っぷりだと思った。

日が傾き始めた放課後。

南坂高校の廊下には一つの人影が物影に移り移り飛んでいた。

人影は何かを見失って止まると、鼻をクンクンと聞かせて何かのにおいをさがしていた。

腰ほどまである髪を束ねて、キリリとした顔をしている少女は――

言――

「エンの教室は…この辺りか」

――と言つて、また人には影にしか見えない速度で移動を繰り返す。

やがて、一つの教室の後ろのドアの前で止まると――

「ここか」

――と、悪がきがちっぽけな悪さを実行する時に浮かべるような笑みを浮かべた。

すると、後ろのドア…つまり少女がいるほうのドアから人が出てきた。

「敵か!？」

少女は腰を低くして、戦闘の態勢になった。

少女は長いジャングル生活でこの平和な日本という国においてはおかしい人と認識されるような思考回路になっており、それが長いジャングル生活のせいなのかは定かではなかった。

だが、もちろん出てきたのは普通の女生徒。

肩の下まである髪はたまたま開いていた窓からふく風でさらさらとなびく。

「う、うわぁ。びっくりしたぁ……」

女生徒はかなりびっくりしたようで、それは彼女の後ずさりに現れていた。

「おまえはこの学校の生徒か？」

この学校に制服を着ているんだから、この学校の生徒であることは当たり前のことであるし、第一今の少女がその台詞を言えた立場ではないことは誰もがわかつていることだろう。

「う、うん。そうよ。あなたは…、どうかしたの？」

女生徒はニコリと笑った。こんな自然な笑顔に初めて遭遇した少女は一瞬戸惑いを見せたが、すぐに切り返す。

「この教室に火山エンという男はいるか？」

「えーっということはいるんだけど、結構前に帰って…」

少女はその言葉を聞いて、心底残念がっているようだった。そもそもなぜ昼間にこなかったのか、という疑問はそこらへんの隅に置いておこう。

「じゃ、じゃあ、一つだけ聞かせてくれ」

「何？」

「火山エンは……その…この学校ではどんな風に思われているんだ？」

少女は赤くなった顔を紛らわすようにしてぽりぽりと頬をかいた。

「エン君はね……。クールで、やさしくて、カッコよくて……。女の子の人気も高い……かな……」

女生徒は自分の言った最後の言葉で少しだけ胸をつまらせた。

「そうか……。家での印象とはまったく反対なんだな」

「え？」

女生徒はほかの事を考えていて聞こえなかったようだ。

「い、いや。いいんだ。それじゃあ！」

と言つて、開いている窓から常人離れした脚力でどこかへ言つてしまつた。

「あの子………」

女生徒は何か意味ありげなことを――

「誰かしら？」

――言つはずもなかつた。

第7話

結果から言えば作戦失敗（後書き）

ラストがちよっとしんみりでしたね（笑）

今回はギャグが少し少なかったかなあ、とちよっと思いました。でもこんな時もこれから（何度も）あると思うので、どうぞ生暖かい目で見守っていてください（汗）

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第8話

教室の入り方にも色々ある――結構冷や汗編――（前書き）

後半オレの出番がなかったみたいだが、まあいいか。

そういえば、巨漢軍隊の陰口（というかもはや陰口の域を超えているが）はまだまだ続くみたいだ。

第8話

教室の入り方にも色々ある―結構冷や汗編―

オレは今席に座っている。何の席かって？　もちろん。”オレの席”だ。教室の真ん中の一番後ろ。ちなみに、今は1時間目の授業中でもある。

みんな先生が黒板に書く文字を、これでもかというほど必死に書いている。中にはそんなに必死にならないアホもいたりするが、それはオレとかオレとかオレだ。

なーんか昨日から今日にかけて不審な点が色々あって、それについて調査中といったかんじ。つまり手がつかない。

最初の不審な点、その1。昨日の夕方。

オレが家に帰るとウミナの姿は微塵もなく、どこにいるかなんて探すつもりもないが、前触れもなくかくれんぼをしている可能性もあるので、一応全ての部屋を探してやった。

すべての部屋を探したが見つからず、仕方なく夕方にやっているドラマの再放送をみながら今日の晩飯のメニューを決めていると、左から椅子を引く音がした。

何かと思いそちらを向くと、ウミナが椅子に座るところだった。忍者じゃないんだから物音ぐらい立てて帰ってきてくれよ。

だが、気になる点が一つあった。

「おう。どうした、元気ないな？」

そう。いつもの反則的なテンションの塊を発しているオーラ（イメージだが）がない。

「い、いや。なんでも…ないんだ」

おいおい。なんでもあるような言い方で言うなよ。だけど、こち

らも聞く気はそんなになかったので、そのまま献立決めを再開。

献立が決まって、もう出かけようと思ったとき、またウミナは口を開いた。

「エン」

「ん？」

「エンは学校で…その…女から好かれているのか？」

はい？

なんでそんな事を聞く？ おまえが聞く理由もないし教える理由もないだろう。が、しらばっくれても何一つ得もないし、まあ言っても得はないんだが俺もそこまで意地悪ではないので教えてやる。

自信を持って言おう。

「普通」だ。好かれているのかは知らんが、印象はたぶん「普通

」だ。オレは「普通」に登校して、「普通」に授業して、「普通」

に帰っているからな」

なんか自分で言ってるてなんだが、味の無い人間に見える。

「そ、そうか。普通か。な、ならいいんだ」

あれ？ なんかオーラが戻ってきているような…？

「あの女が何か間違っているだけだな。うん」

っておい。

「待て。あの女ってなんだ!？」

「よし。じゃあちよつとトレーニングに行ってくる!」

立ち上がって風のような速さで玄関に行ってしまった。ちなみに風というのは単なる比喻表現ではない。本当に風と同じ速さだったんだ。

「おい、なんなんだ!？ おまえは今日何をしでかしたんだ!!!」
オレの声がむなしく部屋の中に響いた……。

誰に聞いたんだか知らんが、ウミナが何か行動を起こしているのは確かである。この前の勝負の時、舞台に学校を選んだのは失敗だったか…。

オレのできることと言ったら、ウミナがここに来ないように祈るだけ。それしかできない自分にガツカリしたと同時にかなしかった。そうそう。不審な点その1といったぐらいだから、もちろんその2もある。だが先に言っておく、その2までしかない。

つーわけで、不審な点その2。今日の朝。いつも通り靴を置きにロッカーまで行くと、静風さんがいた。

ラッキー！今日はオレについてるかもな。

声をかけないわけにはいかない。よってオレは自身、今日はじめての会話を切り出す。

「おはよう。静風さん」

静風さんは声を頼りにこちらを向いた。オレに気がつくといつものナチュラルスマイルが炸裂。

「おはよう。エン君」

朝から癒されてもらってすいませんね。本当に助かっていますよ。と、悦に浸っていると…。

「あの、エン君…」

「は、はい!？」

浸っている時に声をかけられたので変に驚いてしまった。

「エン君の知り合いに、女の子っている？ 15歳ぐらいの」
ギクツ。

いない。いません。オレより力が格段に強くて、超人的な身体能力を持っていて、最近いきなりオレの家に転がり込んできた15歳ぐらいの猿ならいるけど、いません。

「い、いないけど。な、なぜ？」

オレは明らかに動揺していた。それはオレ自身もわかったぐらいだが、静風さんは何も不審がる様子にはなかった。よかった。この人がそういうのに気づきにくい人で…。

「そう…。い、いや…なんでもないの」

ちなみに静風さんもオレの”苦し紛れの質問・切り替えし編”で動揺していたが、オレは何食わぬ顔をしておいた。

って…もし静風がオレと同じように何食わぬ顔を作っていたら…
…もしかしたらこの人は気づいているのかもしれない…。

なーんてな。そんな心配は必要ない。今まで静風さんを見てきたオレにはわかる。静風さんは人の言葉は素直に信じてしまうとても純粋な人だ。いつか悪いやつに引つ掛けられないか心配だけだな。

にしても、急に静風さんがこんな質問をするのはおかしい。なんか、まるで何かあったかのような物言いだ。たとえば、昨日めずらしく外に出かけていたヤツに何か言われた…とかな。

というわけだ。先ほど言ったように、幸いその2までしか起こっていない。

だが、お気づきだろうか？　これでウミナが今日来る可能性は、ぐーんと上がった。

しかし、オレには少しだけ安心感があつた。その安心感はこの学校という空間にある。

ウミナの性格だ。どうせ表門から入ってくるだろう。そして、たぶんウミナが学校に行ったのは昨日の夕方…オレが帰った後のはずだ。

昨日ウミナはオレより遅く帰ってきたし、昨日の発言と朝の静風さんの発言をあわせれば、ウミナが学校にきて静風さんに変な質問

をして困らせたのは容易に想像できる。

そこがミソだ。そして昨日ウミナが来た時は夕方だったはず…。そして夕方は下校する生徒のために校門は開いてる。だから昨日は簡単に表門から学校に侵入できただろうが、今日はたぶん昨日より早め…つまり朝か昼にくるだろう。その時間、表門は主事さんか先生の許可を得ないと学校に侵入できないので、ウミナが入れば即刻見つかって入ることはできない。

…完璧だ。

じゃあ安心して授業にもどろーっと。

その瞬間、オレは自分の考えを全て覆され、滝のように冷や汗をかくことになった。悔しいことにその原因はもちろんウミナなんだが、それがあまりにも非人道的すぎることに冷や汗の原因があった。

「よう」

声がする。いやいやいや、違う、幻聴だ。そうだ、そうだよ。うん、聞こえないオレには何も聞こえていない。

「エン」

ハッハ。エンって呼んでるよ。だが、エンなんて名前はいくらでも…ないけど、でもオレじゃない。神様を信じるように、オレではないと信じたい。

「エンー」

控えめだった声がだんだん大きくなってきている。コイツはオレに声が届いていないと思っっているんだろう。

さて、ここで声の元を探れば、非人道的すぎる理由がわかるだろう。

声の元…つまりみんなもご存知のウミナの場所に問題がある。そこには誰もいない……というの意味がわからないか。簡単に説明すれば、床には40人ぐらいの足がついているが、ヤツの床には誰も触

れていない。結局何がいたいのかというところだな…。

そう。ヤツはオレの真上にいる。

まるでモモンガのごとく、両手足を天井にピタリとくっつけて、こちらを見下ろしている。…いや、ヤツからすれば見上げているのか？

とにもかくにも、おかしい。忍者じゃあるまいし、そんなこととしてオレの名前をこれみよがしに呼ばれても正直困る。だが、そんなことを考えている間にほとんどヤツの声が大きくなって、みんながヤツの存在に気づいてしまうだけだ。

「なんだよ？」

だから仕方なかったんだ。アイツに反応することは必要なことだったんだ。泣きたいぐらいにな。

「お、やつと気づいたか」

お前がオレを真上からロックオンした辺りから気づいてたわ。

「驚かないのか？」

「驚いたわ」

当たり前だ。家においてきたはずの人が気づいたら天井にいるなんてことがあれば誰でも驚く。だが、今露骨に驚いたら損をするのはオレだ。表立って驚けば、みんなに不審がられること確実だ。

「そうか。じゃあおりるぞ」

ウミナが着地してもいいような床を、目でロックオンしはじめた。オレの日常崩壊5秒前！　そう簡単に壊されちゃたまったもんじゃない。

「いや、ダメだ」

「なぜだ？」

「当たり前だろ。授業の妨げになってみんなが迷惑する」

「なるほど。じゃあやめておこう」

本っ当にコイツが単純で助かった。確かにアイツが降りてくれば

迷惑はかかるが、それは”先生に”だ。生徒は別に面白ければそれでもいいので、迷惑とは思わないだろう。

だが、この言葉の道理でいくと、授業が終われば降りていい事になる。つーことは、逆に考えればいい。つまり授業が終わるまでに”別の場所”に移せばいいってことだ。動かした後は……どうにかなる……いや、”どうにかする”だな。

「ウミナ」

「なんだ？」

「今すぐ屋上にいけ」

「なぜだ？」

「おまえは休み時間になったら下に降りたつもりだろう。それはもう、いきなり」

ウミナが「うーん」と少し考える仕草をする。

「そうなるな」

「休み時間にいきなり降りたら、みんなが驚いてしまうだろう。それは心臓が弱い人には恐ろしく迷惑だ」

「そうか。じゃあ屋上に待機している」

ああ、楽だ。楽にことが進む。だいたい心臓が弱い人はこのクラスにはいないし、あいつが降り立ったぐらいじゃそんなに影響はないだろうな。

ウミナは不格好な姿勢のままで”天井”を這っていった。

そして、オレの学園生活に平和が舞い戻ってきた。

終

というわけにはいかない。何か手をうたないと。

あー…今日も真剣に授業を受けるところではないようだ。

キンコーンカーンコーン。

「じゃあ授業はここまでだ」

…とか考えているうちに授業が終了したらしい。先生の声に反応して学級委員が「起立」と慣れた風に言う。実際にウミナがきたのは、もう1時間目の終わりだったみたいだ。

教室全体がガヤガヤと騒ぎ始める。ここでオレは「あーやっと1時間目かー」とかつぶやくのだが、今はそんな余裕もなかった。すると、授業が終わって早々に、オレの目の前にナキが立ちふさがりやがった。

「エン君」

な、なんだ？

ナキの顔は思わず息をのんでしまうこと真剣な顔をしていた。もしかして、今…ナコさんか？　そして、ナキ（ナコさん？）も生唾をゴクリと飲み込んで、重々しく口を開いた。

「お、お話…しよう」

「は？」

オレの色々な心配は一瞬で打ち砕かれた。

「い、いや世間話でもどうかと…」

アホだ。コイツ、アホだ。つーかおまえがそうことすると紛らわしいから、心底やめてほしい。本当にナコさんかと思ったぞ。

「そ、そうか…」

適当にあしらってさっさと屋上のヤツを片付けに行くか。

しかし、話を始めてすぐにオレは殺気に似た視線を感じ取った。

その方向はどうやら教室の前のドアの付近。あの付近には例の巨漢軍隊の隊長殿がいる。まあそうなれば犯人を言ったようなもんだが…。

何気なくそちらに視線を向けると、やはり隊長殿がこちらを干切り殺すような目つきで睨みつけていた。しかも、その周りには巨漢軍隊の隊員共もいるんだから驚きだ。

「エン君。＼シャツの腕になんかゴミがついてるよ?」

そのとき、オレの真正面から声がする。もちろん、ナキだ。ナキはそう言うなり、オレの腕のゴミを取ろうとオレの左にこようとしたり。つか、オレの許可もなしに腕に触れるな。変態共に何されるかわからん。

オレの「いや、いいって」というむなし抵抗もむなく、自分でゴミとやらを取ろうという反撃も、ゴミの位置がわからないというむなく巨大な壁によって阻まれてしまった。

いや、マズイ本当にそれ以上近づくな…。巨漢軍隊隊長とその隊員が許すわけがない。

チラツとそちらの方を見ると、なにやら細長いものを折る勢いでつかんでこちらへ振りかぶろうとしているではないか。その細長いものは学生にはかならず必要なものであり、もちろん投げるために昔の偉い人が作った発明品ではない。いや、マジで待て。筆箱は痛いだろう!

やめろと言おうとしたが、もう遅かった。もう筆箱は宙に浮いている。ああ、なんでこうもついていないんだろうか。

もう、それであいつらの気が治まるならいいや、とかあきらめムードになったそのとき、オレから発せられるはずだったスコーンというやけに響きのいい音と共に、オレの横に何かが鈍い音を立てて落っこちた。ついでに筆箱も。

全てを悟った。オレの隣にいる少女は、オレの今後の”平和な学園生活”を遅れるかどうか左右させるほどの人物である。そして、この教室のなかみんながいる前で出てきてしまうと、”平和な学園生活”が破滅の方向へと転がる可能性が100%になる危険人物でもある。

今日はさっきから回りくどく言っているな。そうだな…。じゃあ最後に、簡単に結論だけ言おうじゃないか。

終わった...とな。

第8話

教室の入り方にも色々ある―結構冷や汗編―（後書き）

【次回予告】

ついに、ウミナが教室に降り立った（？）

なぜ屋上にいたはずのウミナが教室にいたのか。そして、どう暴れてくれるのか。

ついでにエンの”平和な学園生活”の行方は…？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第9話

教室の入り方にも色々ある――大量冷や汗編――（前書き）

オレの隣で倒れているこいつはなんだ？
オレは夢でも見ているのか？

あー、困った。

第9話

教室の入り方にも色々ある――大量冷や汗編――

オレにどんなピンチが訪れようが、世界はそれをゴミを見るかのように無視して回り続けるわけだ。時間が止まったり、誰かが原因を取り払ってくれるなんて都合のいいことは起きるはずもない。これが現実という厳しい世界だ。

だから、オレの右で頭にヒヨコがグルグル回っているやつをどうにかしなければいけないのか他でもなく”オレ”になるわけだ。

だが、そんな瞬時に案が浮かぶほどオレの脳は優秀でもないのだから、さて、どうしようか。

教室が騒然とする。これだけじゃあ状況がわかりづらいか。そうだな…、具体的に言おう。

尻餅をつく者や、「えーっ!？」と叫び散らす者、口をパクパクさせて震えた手で指をさす者…、こんな感じだ。なんか、人間こうもリアクションが違うと逆に笑えてくる。

と、冷静な傍観者になっっている場合ではなかった。

ウミナの頭の上で回っていたヒヨコは、マジシャンがマジックで瞬間移動させたかのように消え、ヒヨコが消えるとなると、ウミナが気がつくのはオレでも予想できた。

「う、うう…」

目をパチクリさせている。やはり、予想通り意識を取り戻したようだ。

こんな時にかわいげのある声を出したってオレからは何もでないぞ！　むしろ何かくれ！

「私としたことが…、いくら目の前に集中していたとはいえ、死角からの攻撃に気づかないとは…」

ウミナは頭を右手で抑えながら、なんだか普通の人間なら当たり前のはずの発言をしながら、揺ら揺らと立ち上がった。立ち上がる

とウミナの顔がオレの顔ぐらいまであるようで、つまり真正面にウミナの顔が出現したわけだ。ああなんかオレも混乱しているな。

さーてさきほども言ったが、どうしようか。もちろんこの奇想天外な出来事までは予測なんてしていなかった。つまり、オレに与えられた”事態を奪回する案を考える時間”はウミナが起き上がるまでのほんの数秒しかなかったわけだ。

そして、もうその時間はタイムオーバー、つまり過ぎ去った。今、試行錯誤した案を放つ時なのだが、そんな案はあるわけもない。だが、なすすべがなかったこの状況を呆然と見ているだけじゃオレも納得がいかないので、もがくだけでもがくことにした。

「エ、エン…。すまない…。教室のみんなに迷惑をかけてしまっているな…」

ウミナがオレに気づいたようで、なんだか申し訳なさそうに頭を下げてしょんぼりしている。いつものオレなら、だったらなぜここに戻ってきたんだよ…とか言いたいけど、オレはこう言ってやることにした。

「オマエダレダ？」

名づけて、『あなたのことなんて知りませんよちなみに私は口ボツト大作戦』！ え？ ひねりが無い？ …そういう部分は今のオレに期待することは大きく間違えている。みんなも考えてみてくれ。自分の計画が予測もできないような出来事で邪魔されてしまい、それに変わる自分を保護するための案を考える時間はほんの数秒しかないわけだ。そんな中、ギリギリで新しい案を思いついて、それをすぐに実行しなければいけないときが来たとき、その案の名前まで気を配っている余裕なんてあるのか。いや、ないね。少なくともオレにはない。

「私だ。ウミナだ！ 何をしらはつくれている！」

あー、もうなんか色々限界。

「オマエノコトナドシラナイ」

具体的に言えば、この自分でもなんでこれをチョイスしたのかわからない”片言で日本語を喋るロボットキャラ”にだ。

これ以上この言いだしっぺさえも意味がわからないキャラをやっているのは、オレの定評を恐ろしく下げることにもなりそうなので”逃げる意味で”立ち上がったでどこかへ去ろうとした。

「おまえ…、私を忘れたのか…」

ウミナの前を通り過ぎた辺りでコイツが、お父さんが誕生日にほしかったプレゼントを買ってきてくれなかった子供ぐらいトーンを下げてそんなことを言うもんだから、さすがのオレも心配になって振り返ったが、それは人生という大きな道の選択の上で大きな間違えであつたらしい。

「なら…この拳で思い出させてやるわ!!」

この時なんで後ろを振りかえらず逃げなかったのか…。オレ自身でも疑問です。（後日談）

だ！

もうこちらも必死なので、自分でも何を言っているのか理解していない。まあ、その理由はあろうことか、ウミナは白いオーラを出してオレに飛び掛ってきたことに大きく原因がある。

つーか、さっきの哀愁あふれる喋り方はなんだったんだ!?

とか思いつつ、とっさに両手をクロスさせてそれをガードする。

が、勢いは殺せず、そのまま数m手でクロスした状態で飛ばされる。なんとか足で踏ん張ったので、体勢が崩れて尻餅をつくなんてみつともないマネはせずにすんだが、このヒリヒリと痛む腕を代償にしたのは痛かった。

「ほう…。ガードしたか…。ならもう一撃!!」

白いオーラの輝きが一層強くなる。そしてあろうことかウミナはオレに追撃を仕掛けようとこちらへ走り出す。

だが、さっきのダメージのおかげで、もう一度ガードするなんていう自殺行為はする気も起きないし、かといってオーラの輝きがま

しているウミナに立ち向かう勇氣もない。

よって、やる事は一つしかなかった。できればこの手は使いたくない。というかこの手を使うということは負けを意味し、同時にオレの”平和な学園生活”の崩壊も確実なものとなる。だが、オレの身体からだのためにもこれはしなければならぬことだ。

「わかった、ウミナ！ ちょっとふざけたい気分だったただけだ！」

ウミナがオレの顔の目の前で拳をピタリと止めた。

終わった。言ってしまった。

言わなければ目の前にあった拳によって骨格を変えられていた可能性があるものの、後悔しまくりだ。

そう、一つしかないやる事とは、コイツと知り合いたと…かわりがあることを認めてしまうことだ。つまり、簡単にオブラートに包まずに言ってしまうなら…降参だ。

「そ、そうなのか…？ ムキになってすまなかったな」

白いオーラが消えてゆき、ウミナが拳を下げた。安心感と共に絶望感がオレの頭の中を除いてきた。絶望感はおれをほうっておいてくれ。いや、やっぱ帰れ。

「エ、エン君！ これはどういうこと！？」

ナキが急に現れて、涙目でオレにしがみついて訴えかけてくる。

本当にどこに潜んでいたんだか…

知るか。今のオレに何も聞かないでくれ。

「エ、エンに…き、気安くしがみつくんじゃない！」

よくわからんが、ウミナもナキに対抗しているのかオレにしがみついていた。オレからすればお前も気安くしがみつくな、なんだけどな…。

と同時にウミナに男の群れが囲む。もちろん、ウミナはその群れの勢いでオレからどんどん遠ざかってゆく。ちなみにナキはその群

れのせいでオレから強制的に引つpegされて、床に転げ落ちた。「ぶがぁ」とかいうナキの情けない声が聞こえた辺り、男達に踏まれたことは必然と言えるだろう。と同時にどっからか「ナキたん!!」と軍隊共の悲鳴にも似た声が聞こえてきた。へっ、ざまーみる、だ。ウミナに群がっている男共だが、そいつらが言うことと言えば大体決まっ——

「か、かわいい……!」

とか——

「エンの知り合い!? やっべ、アイツの彼女じゃないよな?」

とか——

「どうやってあんな強いパンチが撃てたんですか!? 今度教えてください!」

——とかそういった思春期の男の頭には誰でもあるような願望が口に出たようなものばかりだった。

っと、よくわからんがオレにも群れが押し寄せてきた。でも、ウミナのほうの群れよりはそんなに破壊力がなかった。

こっちには男くさい臭いがあるような感じではなく、むしろ女子のほっが多い。うれしい、うれしい……が、あんまこられると心臓が破裂する……!

「あの子は誰なの!?!」

「どういう関係!?!」

「腕大丈夫!?!」

なんか色々言われているが、オレは聖徳太子じゃないので質問は一個ずつにしてほしかった。

「ちょ、ちよつと……質問は一人ずつでお願いしまーす」

ったくなんで芸能人のマネージャーみたいな発言をしなきゃいけないんだよ。

「じゃ、じゃあ私……質問しまーす!」

「はい。どうぞ」

オレの目の前にいたなんか特徴も言いつらいストレートヘアが肩まである人に質問権をあげた。あ、名前ぐらい覚えてるぞ。えーと確か…田中さん…だっけ。いや…鈴木さん…か？ まあいいか。えーっと、あの子は誰ですか？」

「あれは山野谷海奈と言って母親が連れてきたうちの居候だ。ちなみに先に言うておくけどアイツとはそれまでの関係で、友達より関係が上に行くことはない…というか友達かどうかわからない」

このあとにきそうな質問もまとめてつぶしてやった。すると、それ以外の質問はあまりなかったようで、みんなが黙りこくる。

「えーっとじゃあ質問は以上ですね？」

「はい」とか「そうですね」とか返事が返ってきた。

「えーっと…じゃあ、みんなとりあえず席に戻ろう」

だが、まだ納得がいかないのか、数名はオレを取り囲んでいて、どうも身動きが取れそうもない。それどころか、教室はさきほどよりも騒がしくなってきた。すると、どうやら5mほど先のウミナの群れのほうの質問も終わったようで、何人かが群れから離れていつていた。しかし状況はこちらと同じで、しつこい男子は何人か残り、メールアドレス等を聞き出そうと必死に努力していた。だが、状況はこちらと同じとはいえウミナのほうはオレのほうみたく身動きがわけではない。まああいつ等もさすがに変態扱いはされたくないようだ。

「えーっと、ウミナちゃん？」

あまり似つかわしくない肩までの髪を前で二つに分けている男子は、手を広げながら誰がどう見ても馴れ馴れしい態度でウミナに話しかけていた。

「気安く名前を呼ぶな」

当然ウミナは怒るわけで、腕を組みながら目をしかめてその目をあわそうともせず、男子はウミナの後ろで必死に言葉という使い方によっては天地に分かれるものを必死に使っている。ちなみにオレ

「！！」

今まで聞こえてきた色々な叫び声や怒鳴り声などの大きな声とはまた別な…、そう…年季が入っている……大きな声を出しなれていくような声だ。

教室の教卓側の開いたドアの場所に立っている白髪交じりの短髪、背広、小じわの多い顔はまさしく教師で、それはオレのクラスの担任でもあった。

後ろには他にも数名の教師がいるようだ。告げ口をしたのは誰だ？ いや、この騒ぎが止まってくれるならいいんだけどさ、オレ確実に犠牲になるだろ？

もう、あれだ。ウミナを抱えてどこかへ逃げれば、なんとかウミナのことだけは隠せるかもしれない。つーかもうそれしか最善の策が残されていない。

そう思った矢先、可能性が打ち砕かれるとはまさにこの事を言うかのように、担任がウミナのほうを指差した。

「だ、誰だ！ 君は誰なんだ！？ その格好はこの学校の生徒ではないな！？」

担任はつばを撒き散らして、なんかいかにもな台詞を吐いた。そういうの言ってみたかったんじゃないのか？

「わ、私は山野谷海奈だ！ 確かにこの学校に所属するものではないが、私はただエンに会いにきたただけだ！」

さて、いらん事を口走るといふのは、このことを言うようだ。これは告げ口よりもタチが悪いですね。

「エン…！？ ……火山エンか…！！ 火山あ、こっちこい…！！ むしろ職員室にこい！」

担任は指先と矛先をオレに変えて、期間限定20%増量中のポテチのように先ほどより多くのつばを撒き散らして怒鳴り込んできた。

さーで、これからオレはどうなるんでしょうか。考えたくもない

な。だって、今の状況に陥っただけで、こんなに冷や汗というものを大量にかいているんだ。職員室なんていう墓場にいったときには、身体にどんな異常が起きるんだか。

もう一度言おう。考えたくもないな。

とりあえずオレは、教師の一喝でかなしいぐらいに身動きが取れるようになった体で、オレの後をついてくるウミナなんて見向きもせず担任…いや、墓守の後についていくことにした。

第9話

教室の入り方にも色々ある―大量冷や汗編―（後書き）

【次回予告】

ついに教師に見つかった！

どんどん物事を大きくしてゆくウミナ…。楽しいはずの学校にもついに終止符が打たれる…？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第10話

教室の入り方にも色々ある―嫌味教師登場編―（前書き）

あーあ、見つかったんだよ…。

これからどうなるんでしょうか、なんて無責任な台詞がいない状況になってしまった…。

第10話

教室の入り方にも色々ある―嫌味教師登場編―

「なぜこんなことになった？」

「あ、オレにもさっぱり…」

これは、教師と生徒の会話だ。さて、問題はその中身なんだが、このとおり尋問されているみたいな会話は良いとは言いがたいものだった。

今、廊下を歩いている。いや、違うな…、担任の後をついていつている、が正しい。行き先はもちろん職員室。この状況で抵抗して脱走なんて自殺行為をするほどバ力でもないが、かといって他にやることなんてあるはずもないので、オレは途方に暮れている人と同じような状態でそれについていくしかなかった。

だが一方、ウミナは過ぎてゆく景色を指をくわえてもの珍しそうに見ているので、オレのこの気持ちなんてわかってはいるはずもないようだ。

ちなみに、職員室の近くには3年生の教室があるわけで、近づけば近づくほどオレとは違う色の室内シューズを多く見るようになるわけだ。もちろんその上級生たちの目は、私服で丹念に周りを見渡しているウミナにいつている。その目線の方角はともありがたいのだが、そいつの隣にいるオレは目線がこないように小さくなるしかなかった。

「エン、あの薄暗い室の洞窟につながっていきそうな入り口はなんだ？」

ウミナは流し場とその隣にドアがない入り口があるところを指差している。ちなみにそれは二つあって、それぞれ『男』『女』という標識がはられている。

「あれは中の臭いだけで色んな夢を奪われそうになる、改装もされていなくて使う人もほとんどいないトイレだ」

「ほう…。興味深い…」

オレはお前のそのよくわからない感性に興味深いけどな。

「じゃ、じゃああれはなんだ？」

今度は縦に長い長方形のボタンを押すと水が出てくる物を指差していた。

「あれは俗にいう水飲み場というヤツだ。上にあるボタンを押せば水が噴き出てくるぞ。ちなみにA組の種川ってヤツがそこに口をつけて飲んでいるところを見て以来オレは使用を控えている」

「ほう…。種川とは変わったやつだな」

変わったヤツで済むのか…。まあお前は人のこと言えないけどな。そんな会話をしながらしばらく歩いていっていると、もう職員室の前だった。

中に入ると、先生にある場所に行くように言われた。

ある場所…。それは職員室の隅にある”濃い茶色で厚さ5cmぐらいの木のしきい”で分けられた空間である。まあ言うならそこは職員室であって職員室ではない。

主な利用の仕方は、”3者面談”、”2者面談”、”事情調査”、の3つである。ちなみに、勘違いされては困るので言っておくが、3つ目は事情調査という名の説教になることがほとんどである。まあそんなことがあるから、この空間が”説教部屋”と呼ばれていることは全校生徒の常識の域まで達しており、もちろんオレはこんな場所を利用したことなどない。

あーあ。ついにオレも事情調査という名の説教のために”説教部屋”のお世話になる日が来るとはな…。

中に入ると、高さ4、50cmぐらいの重々しそうながつちりした木のテーブルがあった。それを向かい合わせにして、2人までなら座れそうなカステラの表面ぐらい茶色いソファアが向かい合わせになっている。

とりあえず手前のソファに座ると、オレの左隣にウミナが気品も

クソもない感じで勢いよく座った。

「おおー！ フカフカだー」

オレはそれどころじゃねえつつの。

「これ…ほしい」

「ダメ」

「えー」

ダメだぞ。そんな子犬みたいにウルウルした目したって、夜道の親父はだませてもオレはだまされないぞ。あ、夜道の親父は例えであつて、コイツが毎晩家から抜け出してそんなデンジャラスな冒険しているわけじゃない。まあ必死に弁解する必要もないんだけど。

そんな会話をしていると、後ろの入り口から足音が聞こえてきた。先生か？

「君らが問題を起こした生徒か…」

ウミナとオレは後ろを振り返る。やはり先生だった。だが、担任ではない。七三分けのペツタリした髪。深く刻まれたしわ。嫌味の言い過ぎが原因かどうかは知らないが、とにかく引きつっている口。つぶれたように小さい目。

コイツは…、数学科教師・伊谷見墮裂だ。イヤミダケちなみに苗字が伊谷見で名前が墮裂だ。一応オレのクラスも担当している。苗字がうざったいんだよバカ野郎。

なまえのとおり嫌味を言うことで有名であり、特にこの”説教部屋”につれてこられた生徒への皮肉や嫌味は最凶で最悪らしい。噂ではその嫌味を言うことが人生においての喜びであり、ストレス発散に使っているらしい。

「ほう。この学校の生徒じゃない子を連れてきた…」と

「何が悪い！」

ウミナが振り返ったまま、先生を睨みつけて明らかに喧嘩をする姿勢で勢いよく言い放った。

いや、つーかお前は全面的に悪いんだから反論の余地はないぞ。

「それに今の時間は学校にいていなければいけないはず。なんでこんな不法侵入なんてマネしている暇があるんだね？」

「私は…私は学校に行っていないから…。だから様子を見にちょっと…」

伊谷見はウミナの発言を道端で1万円を見つけたのかというほどに見逃さなかった。

「学校に行っていないと？ キミぐらいの歳なら普通、」学校に行っていないはずはない” んだけどなあ…。もしかして入れてくれる学校がないんじゃないのかな？」

コイツ……学校に行っていないはずはないのくだりをわざと強めていいやがったな。いくらウミナが全面的に悪いとはいえ、いい加減ムカついてきた。

「伊谷見先生」

「何かな。社会不適合者の隣の生徒」
「いちいち癪に障る言い方を…」

「それ以上は名誉毀損ってヤツですよ。それに、あなたも仕事があるんでしょから戻ってください」

よし、よくやったぞオレ。極限まで怒りを抑えることに成功した。こういう人はこっちが変な行動を起こしさえしなければ、飽きてどこかへいくはずだ。

「ところで、キミはこの女の子のお友達かな？」

急に明らかな話題そらしをしてきやがった。

「いえ、一応保護者です」

つーかなんなんだ。こんなこと聞いて…。

…ん？ 待てよ……？

あ……そういうことが…、くそ……やっちまった！
これはまさか…、

「ほう。保護者か…。つまりキミがこの子を管理した結果こうなったと？ まあそういうことなら、キミもこの子に負けにくいぐらい不適合な要素があるんだろうね」

やはり、嫌味を言うための質問か…！

オレの反撃を受けることもせず、流すこともせず、強引に返してきやがった。これはかなり嫌味に慣れてやがるな…。

「く…貴様……」

つい我を忘れて感情を出してしまう。

「貴様…？ 教師に向かってそんな口の利き方でいいのかな？」

「火山…。とりあえず事情だけでも聞くぞー」

そのとき、入り口の外から声が近づいてきた。これは間違えなく担任の声だ。担任が来さえすれば、なんとかこの嫌味教師を追い出すことはできそうだが、このむかむかした気持ちはどこにやろうか。もう一度、最後の抵抗をしてやろうと睨み顔で伊谷見のほうに目をやると、とうの伊谷見はなぜそうなったかよくわからんが、顔が真っ青になっていた。

「か、かかかか火山？」

おい、嫌味教師。声が裏返ってるぞ。

「あれ？ 伊谷見先生どうしたんですか？」

職員室と説教部屋の境界線に立っている担任は、不思議そうにしている。

「あ…あの…火山っていうのは…えーっと…真珠様の……」

真珠…？

オレの母親の名前と同じじゃないか？ つーか、様って……ウチの母親とどういった関係ですか。

「ああ、そこにいるヤツね。そいつは火山真珠カヤマシンジュさんの息子さんですよ」

担任の言葉を聞いた途端、さっきの真っ青になった顔に加えて冷や汗と震えが出始めたようで、それはもう情けない姿だった。

そして、担任のほうに向けていた体を、かなり大げさに振るえな

がらこちらを向いた。

「い、いやあ…よく見ると凜々しくて良い顔をした青年じゃないか…」

さつきとは表を返したかのように腰の高さが低くなってやがる。

これはまさか…、ウチの母親に何かの理由があつて逆らえない…とか？　そして、もしそうならそれはその息子であるオレにももちろん当てはまる事になる。ほう、なら…。

「あー、でもオレ不適合な要素があ——」

「いやあ！　本当に良い顔だなあ！！」

オレの言葉を遮るように大声でお褒めの言葉を言つてきやがつただけど、オレの反撃はまだ止まらないぜ。

「あー、そういえば今日母親が帰ってくるんだった。ウミナ、今日あつたことはちゃんと報告しような？」

「そうだなー」

オレがニコリと笑つてウミナに顔を傾けて言つと、ウミナもそれに乗つかつて同じことをしながら言つた。

「私も母様には言いたいことがたくさんある」

ついでに今いった言葉はオレのほうを向いていったのではなく、さらに今までのにつこりした顔でもなく、そのまま獲物を睨み殺すような殺気に満ち溢れた狩人の目で伊谷見のほうを向いていた。

「ひ、ひいひい！！」

伊谷見がへっぴり腰の内股で飛び上がる。

「あー、なんかこれから事情聴取されるみたいだし、関係ない人には出て行ってほしいかな…なーんて」

「へ、へいひい！！」

Hey:?

伊谷見はまた飛び上がった、アメリカのコメディアニメのような感じで、辺りに風だけを残して去っていった。へっ、ざまーみろだ。「な、なんだかよくわからないが、始めるぞ」

状況が全く読めていない担任は、何食わぬ顔でオレの目の前にあ

るソファに座った。

そのとき、担任の目線がオレではなく、オレの後ろにいった。オレもなんだと思ってその方向に振り返ると、さっきの伊谷見がいた。

「あ、ああああのー、先生」

「どうしました？」

「そ、そそそそれが…し、ししし真珠様からおおお電話です…」

母親から担任に…？

つか、焦りすぎだろそんなに怖いのかよ。

そんなオレの疑問もよそに、担任は立ち上がってそそくさと電話に向かった。オレはなんとなく気になったので、聞き耳を立ててみた。もちろん座る位置は変えずに、腰から上を職員室のほうに傾けるといふ奇妙な姿勢でだ。

「エン、なんだその格好は？」

「しっ！ 今大事なところ！」

「そ、そうなのか…。じゃあ私も真似しようじゃないか」

じゃあの意味がわからないが、ウミナはオレのマネをして体を傾けた…が、オレと違うのは傾ける方向に人…つまりオレがいるということで、傾けてそのままオレに体重を乗せてきた。

いや、あのさ。お前なんでこういうときに限ってそういうことを…。

つと、何か会話が聞こえてきた。

「はい。ただいまわかりました。え…？ あまり深く追求するな…と？ はい…はい…。ついでにやつちゃってと…」

なんなんだ！？ 何をやつちゃうんだ！？

「あ、はい。わかりました…。それでは、はい」

ガチャと受話器を置く音がして、足音がこちらに近づいてきた。オレは聞き耳を立てるためにしていた奇妙な姿勢を解除して、座りなおした。

「むう…。終わったのか？」

だが、ウミナはオレに寄りかかる姿勢を解除する兆しが見えないので――

「きちんと座りなさい！」

「え？ いやエンも同じ姿勢――」

「まあ！ □答えするのね！？ 晩御飯抜きにしますよ！」

「お前…後で殺す…」

ウミナがオレを睨みつけながらしぶしぶといったような感じでもとの背筋を伸ばした姿勢に戻った。

ハッハ、オレいい教育してるぜ。あー、殺される。

「火山」

後ろから声がしたので、自然な感じで振り向く。

「な、なんでしよう？」

「事情聴取は中止。後、その隣の子に学校を案内してやりなさい」
ナイス！ ナイス母親！

つてええ！？ 案内！？ オレがコイツを！？ いやいや、断りたい。ぜひ断りたい。そんな変な注目を浴びるような仕事したくない。つか母親は何でそんなこと言ったんだよ。

「なんでオレが？ それに混乱を招く可能性があるから、コイツは早く学校から出した方がいいんじゃないんですか？」

必死の抵抗。冷静に。

「いや、そういうわけにもいかなくてな。事情を聞かない代わりと思つて案内してくれ」

結局の失敗。理不尽な。

でも、そういうわけなら案内しないわけにはいかないか…。コイツの事情を先生方にさらさない代わりにコイツを生徒達にさらす必要があるなんて皮肉なもんだ。

その前に気になることが一つ。

「あの、授業はどうすれば？」

「ああ、そつか…」

担任は少し固まって、何か案を思いついたのか人差し指をオレに向けてきた。人を指差しちゃいけないって先生に習わなかったのか？　ってお前が先生だからそれを教える立場じゃねえか！

「じゃあ、放課後に案内してあげればいい」

えーつとつまり居残り決定ですか…？　ああ、最悪だ…。家に帰ってやることたくさんあるのに…。

「えーつとじゃあそれまでコイツは…」

「どうしようか…」

無責任な。そういうことまでちゃんと考えた上でその案を言ったんじゃないのかよ。

「私はエンの近くにいたいぞ！」

こういうときにそういうこと言われても困るだけだ。

「やっぱり知っている人が近くにいないと不安だよなあ…」

担任もなに同意してんだよ。

「よし、仕方ない！」

両手をパンと叩いてよくわからんが、へんな気合を入れたようだ。「椅子をひとつ用意するから、エンの隣に座っていなさい。あ、でも大人しくしてるんだぞ」

担任が少ししゃがんでウミナと背をあわせて、さっきオレにやったように人差し指をウミナに向けて言った。

「おお！　それはありがたいぞ！」

つて勝手に決めるんじゃねえ！！

「待て待て待て、お前が教室にいたらみんな授業に集中できないだろうが！」

オレは中腰になって両手を広げてウミナに食いかかるというホラーアクション映画では狂って最初に死ぬ人のような格好で、ウミナにオレの”正しい意見”をぶつけた。

「大人しくしている。それでいいだろう？」

ダメだ…。やっぱりコイツにまっとうな意見なんてきくはずがないんだ…。

「そうだぞ火山。それに一日ぐらい平気だつて」
おい担任！ それでいいのか！？ そんなアバウトな指導でいいのか！？

そのとき、キンコンカーンコンという授業の開始を告げるチャイムが鳴った。このチャイムを聞けば、廊下やトイレにいた生徒のだいたいは教室へ急いで戻る。授業遅刻に関してなんの関心もない生徒は、急ぐなんて動作は１ミリもしないが。

「さあ、火山。いけ。遅刻するぞ」

オレは担任の決定に全く同意できなかったが、かくいうオレもチャイムを聞くと急いで教室に戻るタイプなので、仕方なく教室に戻るしかなかった。

さて、母親はなんで案内なんて面倒でかなり意味のないことをさせたのか…。この疑問を考えるのは案内が終わってからのお楽しみにしておこうじゃないか。いや、全然お楽しみじゃないんだけどさ。

第10話

教室の入り方にも色々ある―嫌味教師登場編―（後書き）

【次回予告】

まだまだ続く、「教室の入（略）」。

果たして普通の授業が成り立つのか、案内を無事に終わらせることができるのか。というか次回で完結！

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第11話

教室の入り方にも色々ある――生寝てる編――（前書き）

さて、ついにウミナがオレの平和な教室に乗り込むことが決定しち
やったわけだが…、どうしましょう。オレ、大丈夫か…？

第11話

教室の入り方にも色々ある――一生寝てる編――

ガラツと引き戸式のドアを開けて教室に入った時の反応など、思
い出したくもない。

「あー！ あの子だー！」

「や、やつぱかわいいー」

「なんで火山君椅子もっているの！？」

などと騒ぎたてられて、椅子を持っているだけで精一杯だったオ
レにはうんざりだった。

こうして、めでたくオレの隣にウミナは座っているわけだが、コ
イツがいるとその向こうにいる静風さんとナチュラルな会話をトラ
イできなくなるだろうが。なんで反対側に座らなかつたんだよ。あ
れ、いや待てよ。椅子置いたのオレじゃん…。うわああ！！

オレは自分自身で自滅してしまったシヨックにより、頭を抱えて
机に覆いかぶさった。

「何をやっているんだ？」

その体勢のままウミナの方…右を向くとウミナが目を細めて、何
か気味の悪いものでも見るような目つきでオレを見ていた。コイツ
の目ならどうでもいいのだが、その向こうで静風さんが心配そうな
目でオレのほうを見ていたので、風よりも速く元の体勢に戻った。

さて、さっきまでオレを変な目で見ていたウミナだが、もう例に
よって好奇心旺盛なキラキラした目で黒板を見つめているわけだ。
はつきり言えば黒板にお前の求めているようなものは一切ないぞ。
断言できる。

といっても、オレとしてはこのままコイツが黒板に夢中になった
ままで、平和に時間が過ぎることが一番の願いなので、何があつて
もウミナに話しかけることや、そちらをなんか様子が気になった程

度の理由でチラリと見ようとしなかった。

だが、やはりウミナは夢のない黒い板をいつまでもキラキラした目で見続けていられるほど、バカではなかった。

「エン。これ言っていることがつまらん。何か話せ。」

だが、飽きたなら飽きたなりの道理というか、人として守るべきものがあるわけで、明らかな部外者のウミナがそんなことを口にしていいわけではない。

「当たり前だろ、授業なんだからな。そんな面白可笑しく勉強が身についたら全国の学問に悩める学生の立場がなくなるだろ」

「関係ない。私は暇なんだ。エンはいつも人に囲まれているからがいいが、私はここ数日昼間にやっているテレビの中の修羅場ぐらいしか人間味を感じていないんだ」

昼間にやってるテレビの中の修羅場…？

「なんだそれ？」

「ほら、1時ぐらいからやってる『紅蓮の恋愛事情』というヤツだ」
紅蓮の恋愛事情って…たしか今話題になってる昼ドラのことだよな。

「どんなストーリーなんだ？」

オレがそれを聞いた途端にウミナがオレの肩をものすごい力でつかんできた。おい、目が（ほし）になっているぞ。

「そ、そうか。気になるか！ えっとな、ストーリーは昔愛し合っていたケンジとマサミが家の事情で別れなければいけなくなって、それぞれ別々の人生を歩むんだが、ケンジのほうが交通事故でマサミのことを含む記憶をなくしてしまい、その後であったマキコと恋に落ちるんだが、ある日道を歩いていたら偶然マサミに出会い、マサミのことを思い出しマキコに別れたいと頼むが嫉妬深いマキコはマサミの家を突き止めてに嫌がらせを——」

省略。いや、違うな、途中から聞いてなかった。オレ昼ドラにあんま興味ないし…。いやいや、その前に学生だから見ることもできないがな。

まあ、確かにある意味でかなり人間味はあるな。いやでも人間味の感じられる番組なんて他にもあるだろうよ。なぜその中でも特に昼ドラというドロドロした恋愛の代表みたいなものに人間味を感じたのかは知らないが、なんかコイツがそういうもんみて変に影響受けたら困るよなあ…。

でもコイツも少しはさみしかつたんだろう。ちよつとぐらい相手してやるか。ちよつとだけ。

「じゃあ仕方ない。しりとりをしてやろう」

「おお！ さすがは私の飯を作る者だ！」

お前はオレをバカにしているのか？　なんか家来みたいなほめられ方でいい気分にはなれないぞ？

「ところでしりとりってなんだ？」

つておい。知らないのかよ。どんな家庭環境のもとで育つ――

あ、そうか、コイツ顔は日本人だし最近家電（テレビと冷蔵庫と電子レンジのみだけど）にも慣れてきてたから忘れてたけど、どこだかは知らないがとにかく海外のジャングルからきた純ジャングル人だった。

つーことは日本の言葉遊びも知らないのも当然だよな。

「しりとりつーのはな、たとえば…」リンゴ”つてオレが言ったらその語尾の”ゴ”から始まるものをウミナが言っわけだ。そうして続けていって、最後に”ん”がついている言葉を言うか、語尾につながる言葉がいえなくなったら負けっていうゲームだ」

「なるほど。じゃあ早速やってみようではないか」

「よし、じゃあ先行はお前に譲るぜ」

「えーつと……じゃあ……シンナー中毒の”く”！」

お前それ10代の若者が元気よく発言する単語じゃねーぞ。つーかなんで知ってんだよどこで覚えた？　あれか、オレの母親かオレの母親が教えたのか。それともあれか、昼ドラか。いやいや、でもなんでシンナー中毒が出て来るんだよ。どの可能性を探ったって不自然なものしかないだろ。

「く……」

あ、別になんか攻撃を食らってよろけた拍子にもらした台詞ってわけじゃないぞ。

「クイの”い”」

つ、つまらないと言っなよ…。

「い…い…インナー野郎の”う”！」

いやいや、別にインナーで止めてもよかったよな？ それとも何か？ 下着が大好きで、冬でもコートもはたまたシャツも着ずにインナーのみで元気に動き回っている”変態男”のことをそんなに言いたかったのか？

「じゃあウコン。あ、んがついちったー。オレの負けだな。よし勉強に返ろう」

はい、”ちよつとだけ”は終わりましたー。『秘儀・自滅』を使ってさつさと面倒くさいことをやめたぞーつと。ちなみに技名は今考えました。反省はしていないが後悔はしています。

「エン弱いなー。まあ私に勝てるのも思っていないかったがな」

言ってる言ってる。最終的に得するのはオレだけど。さて、平和な授業に戻りましょうか。

――。

そして数分の平和という名の沈黙。だが、それを破ってくれちゃうのはやはりウミナ。もう勘弁して。

「エンー。つまらん。何か他にないのか？ お前ごときでも私と対等に張り合えるようなものは」

お前しりとりに勝ったぐらいで何様のつもりだよ！ と、まあここは反論しても「火山ー。授業中にいきなり叫ぶなんてお前らしくもないなー」と先生に注意されて「おいー、エン。少しは静かにで

きないのか？」とかウミナに小バカにされてクラスメイトのクスクスという笑い声が聞こえてきて——まあとにかくいいことはなさそうなので、ここは無視の方向で前向きに検討してゆきたいと思います。

「……………」

「チツ、私の声も届かなくなったか」
ウザったいぐらいに届いていますよ。

「ふん。もういい」

ウミナはキョロキョロと周りを見渡し始めた。そして、あろうことか隣にいるマイ・エンジェ…静風さんに目をつけた。

「お前…、前にどこかで会わなかったか？」

あの鋭い目で、しかもそれを細めて疑り深く、静風さんを睨みつけているのだろう。あまりに失礼な行為ということは、オレは顔を見なくても十分わかったので、このシャープンを持っている右腕で頭をぶん殴ってやりたいが、そんなことしたらオレの右腕が粉砕骨折になりかねないし、このいつの時代のかはわからないナンパ文句のような台詞の続きが気になった。

「わ、私…？」

静風さんは自分を指差してウミナのほうを、それはもう悪い例えで言えばいきなり酔っ払いの雄たけびを聞いて、思わずそちらを向いたときのような驚きをした目で見ていた。

「そう。お前だ」

静風さんにお前とか言いやがって、まあでもこれでこの前の推測の証拠がつかめるわけだ。わからない人はとりあえず第7話と第8話参考、とだけ言っておこう。

「……あ、ああ…あの時の子ね…」

やっぱりオレの推測は当たっていたらしい…が、なぜだか知らないが静風さんは、この会話…誰かに聞かれていないよね…？ みたいな考えをしているのがまるわかりなぐらいそわそわしだした。

周りを見て、まるで教室にいたことが発見者…つまりウミナ以外

にはなるべく知られてはいけなような雰囲気をかもしだしていた。
「どうした？ そんなにキヨロキヨロして」

ウミナがオレが気になってきたことを、ストレートに言ってくれた。こういうときこの人の気持ちも考えずに、”素直に”発言してくれる性格は役に立つな。

「い、いや…なんでもないの。えーっと前に教室に来た子…よね？」
静風さんは、なんだかキヨロキヨロしたことをこれ以上深く掘り下げられないように話題をそらした感じで、逆に疑問文を投げかけた。

「やはりあの時に会った者か。私は山野谷海奈だ。よろしく頼む」
ウミナがスツと右手を差し出した。その先は静風さんの目の前でたぶん少しだけニコリと笑っているのだろう。女同士でこんな挨拶をすることなんてめったにないはずだから、静風さんもタジタジな感じだ。だが、状況を飲み込んだ静風はニコリと笑ってその右手を握った。

「えっと、私は静風詩織よ。こちらこそよろしくね」

どうやらよくわからんが友達という関係になったんだろうか？
それにしても静風さん本当にいいお顔で…。下の名前が初登場ですね、なんて口がさけてもいえませんよ。

よくわからんあいさつも終わったあと、ウミナはしばらく静かにしていた。とりあえず授業の終わりを告げるチャイムがなったりしたんだが、「これはなんの音なんだ？」とかそういうありえない質問が横から飛び掛ってくることはなかった。

その理由は、ウミナを見れば一目瞭然なのだが、まあなんだ…コイツ本当に子供だな…。つまり、コイツが静かな時というのは限られてまして…、その一つに”寝ている時”というのがあるんだ。つまり今はその状態。

彼女、眠っています。

静風さんもそれに気づいていたようで、近くの人に「静かにしてあげてー」とか促していた。

と、まあ1人が数人にその数人がそれぞれまた数人に…と言った具合にそれが広がるもんだから、一瞬でクラスは気味が悪いほどに静まりかえっていた。本当に物音一つでも部屋全体に響くほどだ。つか、寝るなら保健室にいろよ。いやむしろ、保健室で静かに眠っていてください。お願いします。

とまあ、そんなオレの願いは寝ているウミナには何百年経っても届きそうにないことは、オレ自身、誰よりも承知のことであった。放課後…：本当に案内しないといけないのか？もし放課後になつてコイツが寝ていたらオレは何も言わずに帰るぞ？

たぶん、起きるんだろうけど…。あの…：早退してもいいですか？

第11話

教室の入り方にも色々ある——生寝てる編——（後書き）

【次回予告】

ごめんなさい。今回で完結しませんでした！

というわけで、まだまだまだ続く、「教室の入（略）」。

本当に次回で完結！……か？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第12話

教室の入り方にも色々ある―嗚呼再戦編―（前書き）

ついに案内を結構することになった。
できれば早く帰りたいけど…。

第12話

教室の入り方にも色々ある―嗚呼再戦編―

さて、「もーいーくつねーとーおーしょーおーがつー」という正月定番の歌があるように、楽しみなものほどこまめに時間を数えたりして来るのが遅いものだが、まあ逆を言えばきてほしくない時間ほど、意外に早くきてしまうようだ。

結局、案内というオレからすれば本当にどうでもいいものは、オレ、ウミナ、ナキ、静風さんの4人で行くことになった。

気になる（なりたくもないが）親衛隊の方々だが、ナキの――
「今日は解散！ ついてきちゃ……ダメだからね……？」

――という、目に影がかかってニコリと笑う”逆に怖い笑顔”で言った二言でホームランされてしまった。かわいそうだが、オレ的にはバンザイだ。よくを言えばナキも消えてほしいけどな。もっと欲を言えばウミナも。あつそれじゃあ案内の意味がなくなるか。

そんなわけで今から教室を出て、まずは4階から案内をして順に下へ降りてゆき、1階を案内してそのまま帰るというルートが効率的によいということで、そのルートで一致団結した。

廊下を歩いていると、やはり他の生徒の――もちろんウミナへの目線が少々気になったが、これも仕方ないのだろう。

「さつきから通りゆく者たちの目線が痛いんだが……なんなんだ？」
鋭い感覚を持っているウミナもやはり気づいていたのだろう。丁度それを話題にしてきた。

「あー、山野谷さん目立ってるからねえ……」

静風さんがいつもの静風スマイルではない苦笑いをしていった。まあそりや目立つな……。周りは制服なのに1人だけ私服を着ているんだから。

「えー？ 私がか！？」

ウミナは自分の服をつかんで思い切り凝視して確認しはじめた。

そしてそのポーズのままオレのほうを向いてきた。

「エン！ 私どこが目立っている！？ 何か見つけやすい部分があるのか！？」

見つけやすいってなんだよ。どこかのスパイみたくスニーキングミッションでもするわけじゃあるまいし。

だいたいそういうのは街中にいるピンク色の髪のをしたギャル達に言ってくれ。たぶん腹を抱えて笑われると思うけどな。

「いやいや、服は普通なんだけど…、ほら、制服じゃないからさあ！……」

ウミナの後ろにいたナキがナハハと笑いながら自分の制服を指先でつかんで言った。

「なるほど…、木を隠すなら森の中か…」

腕を組んでふむふむといった具合に感心している。コイツなりにきちんと理解しているつもりなのだろう。でも状況が状況だから結構バカらしいぞ。

とりあえず最上階の4階へ行った。ちなみに、オレの高校は上から見ればHの形に校舎ができていて、3階に1年、2階に2年、といった具合に学年が上がるごとに階が下がってゆきどんどん遅刻しにくくなる、というすばらしいシステムになっている。そして、どの階も主に校庭側に面しているほうが教室となっている。逆に校庭とは反対の道路側にある校舎は主に特別教室や準備室だとかがある。だが、例外として1階の3年生の教室は道路側にある。

そして4階だが、この階にはいわゆるHの校庭側がない。まあつまり、道路側の校舎だけが4階まであるわけだ。ちなみに少し前に行った職員室はHの真ん中、いわゆる連絡通路っていう部分の2階にある。

まあとにかく、4階には国語科準備室とか使われていない資料室だとかがあるんだが、とりあえずそこを案内しても仕方ないので、

他の視聴覚室と音楽室を案内することにした。

さて、今はその4階に向かうべく階段をのぼっているんだが、のぼっていると足音と会話が妙に響くのはもはやデフォルトと言えるだろう。

「いいか、ウミナ。今日は”特別に”案内するんだぞ」

オレはウミナにジャラツと穴のあいた木にたくさん鍵がついているものをつけた。これはいわゆるマスターキーってやつで全ての部屋の鍵がぶら下がっているすばらしいものだ。

「これだって本当は生徒が持つことは禁止されているんだが、特別に借りてるんだからな」

ちなみに教室で担任から渡されたんだが、本当は主事さんとかが持っているらしい。

「そりゃー、私が案内されるんだから当たり前じゃないか」

コイツ…なんでさっきから高飛車な感じになっているんだ…。どこのVIP客気取りか？ 特別つか？ あ、って考えてみれば先生方からの扱いはそんな感じじゃないか。なんてこったい。

「とにかくオレが言いたいことはな、あんま騒——」

「あ！ やつと一番上まで来たぞ！」

オレがウミナを指差して世間…いや人としての常識を”やさしく”教えようとしたとき、ウミナは闘牛が闘牛士の赤いマントに突っ込むかのような勢いで”ゴール”まで言ってしまった。もちろん、オレの話なんて聞こえてもいないんだろう。

「あ、おい！！」

「火山君…。苦労してるね…」

静風さんがオレの苦労に同情してくれたようだけど、もはや何も言わない——

「はい…」

——わけではない。さすがに静風さんを見殺しはできん。

階段を上がると、すぐに年季が入って錆びている重そうな鉄の扉が目に入る。この扉を開ければ視聴覚室だ。まあたぶん中でビデオ（もちろん教育の）を見ているときに、音が外に漏れないようにするためにこうなっているんだろう。

ウミナが扉を開けようとひっぱる。しかし鍵がかかっているのもちろん開くわけではない。

「こ、これあかないぞ……！」

ウミナが最初よりも力を込めて強く引くと、ピキピキ……と何かが破壊されそうな本当にいやな音が聞こえ始めた。

「ま、待て待て……！　こういう扉にはだいたい鍵つてものがあつてなあ……！」

オレがかけていって鍵穴に鍵を差し込んで扉を開けなければ、コイツは確実に扉を破壊していただろう。というかその前にセ。ムという名のセキユリティが発動して警察がきてしまうな。

「ご、強引なんだね……」

「た、確かに……結構元気があるのね……」

後から来たナキと静風さんも驚きの表情を隠せないようで、目点になるというのはまさにこのことを言うのだろう。

「と、とりあえず中に入ろうか！」

オレはこの元気の源について質問を求められても困るので、話題を無理やり切り替えるためにも中に入った。

進むとまずドアが目に入る。そして、右に階段状の薄暗い通路。

中はたぶん映写室になっているはずだ。さすがに映写室の中に入るのは”機材的な問題”でかなりまずいと思うのでやめておこう。

とりあえず数段の階段を上ってまたドアを開けると、一気に世界が広がる感覚がした。

視聴覚室は普通の教室とはちょっと違う形で、いわゆる大きな大学の教室のような感じである。机が一行前に行くごとに階段状に一段ずつ下がっている。真ん中と両端は通路となっていて、一番前の

ホワイトボードはここから見下ろす感じだ。

「お、おおおー！」

ウミナはよくわからない喜びと驚きが入り混じったような声で一通りリアクションしたあと、真ん中の通路を両手を挙げて「わあああ」と言いながら一気にホワイトボードの前までかけていった。

お前はそんなにホワイトボードとか黒板だとか、そういう夢のないものが好きか。だったらがんばって買ってやるから、一生それにかじりついていてくれ。

「よし、じゃあ行こうか」

オレはこんな光景を微笑ましく見ていられるほど寛大ではないので、振り返って、苦笑いを浮かべて後ろにいた二人の肩を軽く叩いて出口へ向かった。

「エン。この部屋はすごいな！！ 広いし、おもしろそうだ！：

……ってエン？ どこへいく！！ おい！！」

なんか後ろから意味不明でアホらしい感想を何言か並べているバカナ子が、オレに向かって何か叫んでいるがそんなこと知りません。当初の目的なんて忘れしました。

さて、次は音楽室か……。一応あそこには色々とエン……じゃなくて縁があるんだが……、まあ今は関係ないか。アイツにはちらりとだけ中に入れてやろう。

そんなことを考えいると――

「なんでほうつておいたあゝ！！」

「グアッ！！」

腰の辺りに強い衝撃！ なんだこの痛みは！？

反射的にちよつと前かがみになりながら腰を抑えて後ろを振り向くと、ウミナが拳を握って肩で息をしてながらオレのほうを睨みつけてきた。

「う、ウミナ……。いきなりなんだよ……？」

「私を無視するんじゃない!!」

ウミナはオレにまた近づいてきた。これは拳^{パンチ}の予感!?

オレはとっさに働いた防衛本能で右手を盾にすると、丁度よくそこにウミナのパンチが当たった。その瞬間、手首と肘の丁度真ん中辺りに激烈な痛みが走る。

「痛つつ…」

やっぱコイツ力強いな…。例の母親のおかげで結構…いやかなり打たれづよいはずなのに…。とにかく、オレが本気で痛いというところを声を上げて言うなんて、オレの自身あまりないことだ…。さすが超人。

「今回はこれで許すけど、次に無視していなくなったら10倍になると思え」

10倍…。これが10発オレに入ると考えただけで震えが止まらない。だが、素直にコイツの言うことを聞く気にもなれない。どうしようか。

「火山君…。山野谷さんってパワフルなんだね…」

そんな哀れんだ目でオレを見ないでください…。オレが弱いんじゃないんです。ウミナが強いだけなんです。

「エン君。ボクが手当てしてあげようか？」

「お前は黙ってる」

「ひ、ひどい!!」

うつ!?! 今大きな男達の強い殺気がオレに注がれる感覚が…! ? いや気のせいだ。気のせいであつたと信じよう。あんな男たちのこといちいち気にしてたら、そのうち夢にまでできそうだ。とりあえず音楽室へ行こうとしたが、静風さんが少し恥ずかしそうにトイレへ行きたいというので、その顔にほんわかしつつ、申し訳ないが先に音楽室に入ることにした。

音楽室は階段からあがって左にいけばすぐにある。まあつまり、視聴覚室から数歩歩けばついてしまう場所にあるのだ。

中に入れば、さすがに音楽室というだけあって黒板の前にピアノ

があつたり、アコースティックなギターが数本並べてあつたりする。

だが、ウミナは部屋に入るなり、ピアノでもギターにもまったく興味をしめさなかった。

「おお、あれ私の故郷にもあつたぞ!!」

しかし、違う…大体の人ならそこまでかじりつかないものに、ピシツと指をさして多大なる興味を示した。

ウミナはそれの上においてあつた”先が丸い毛糸がからまつている棒”を持ち、叩き始めた。

ポンポンと音を鳴らしているそれは、この学校では吹奏楽部ぐらゐしか使わないであろう物だ。ほぼ木できていて叩くと、やわらかくて心地よい音がる楽器…。

……それは……まさしく……木琴！

と、まあ…ここまで引き伸ばす必要はなかったが…。

ウミナは軽快に木琴を鳴らしながら、満足げな笑みを浮かべている。なんかよくわからないが、叩いている曲はどこかの民族が夜に火を囲んで踊る時に流れていそうな曲だ。つーか結構うまいな…。

「お前…ここにくる前によく叩いていたのか？」

「まあ…うん。村の長老が私が叩く唄はとても癒されると言ってくさった」

ほう…。コイツが敬語を使うほどの相手とは…。その長老とやらもなかなかすごい人だったのだろう。一度会ってみたいような絶対に会いたくないような…。

オレはここで異変に気づいた。あれ、そういえばナキが会話に入ってくこないけど…。何やってんだ？

後ろにいろであるうナキのほうを向く。そこにはオレの想像通りナキがいたわけだが、その様子がおかしかった。うつむいて、どこか影がかった感じた。いつものナキらしい”よくわからないテンションのオーラ”は感じられない…。

……ちょっと待て。えっと、いつものナキ…？ いや、逆を考えれば…つまりこれは、いつものナキらしくない、ということだ…。
ああ、すごく嫌な予感がするぞこれは。

「おい。ウミナ…」

オレはウミナのいる後ろを振り向かずに、動かないナキの様子を見ながら言った。もちろん、何が起ころうとも対処できるようにだ。

「なんだ？」

「外へでろ」

「え？」

早くしろ…。本当にやばいかもしれんぞ。

「いいから…でろ…いやでてください」

ここまできたらお願いしかない。後でどんなに上から目線を食べらっても、今の状況を打破できるならまだいい代償だ。

「なぜだ？」

しかし、ウミナはそんなオレの”切なる願い”も、”疑いの目”でしか見てはいなかったようだ。まあそりゃいきなり人の態度が変わったらオレでも疑ったりするけどさ…。

「……早くでろ！！！」

オレはもう他にいい手段も思いつかないので、思い切り叫ぶことでその重大さを教えようとした。だが、そんなことを叫んでも”時既に遅し”には変わりなかった。

「シーサイン…。今度こそお前を殺す！！」

オレの目の前でうつむいていたナキは顔を上げると、獣のような目でオレの後ろにいるであろうウミナを睨みつけた。

「う、うわやっべ。やっぱナコさんになってる！」

そう。ナコさん。ナキのもう一つの人格——じゃなかった。何かがあつて、ナキの体の中に入り込んでしまった女の人だ。気性がある…いいのか？ まあかなり人との接し方に差はあるのは確かだ。

ナコさんは地面を蹴ってウミナのほうに飛ぶ。だが、その進行方

向の途中にはオレがいるわけで、関係なく突き飛ばされたのは言うまでもない。ああ、もうムリ。やっぱりオレには止められません。

そのままナコさんは、槍のような拳でウミナの顔面を衝く。しかし、ウミナがそれを簡単に食らうわけもなく、いつものバカ力で力任せに両手で受け止める。だが、槍のようなパンチの威力は凄まじく、あのウミナでも完全には威力が殺せずそのまま数m後ろへ下がるほどであった。

「やっぱこの体じゃここまでの威力が限界なのね……」

ナコさんが舌打ちをした。その顔にはやはり影がかかっていて、腹の底から悔しいという感情が伝わってくる。

ウミナは両手で持ったナコさんの右手を押すと、ナコさんは宙を舞って壁に叩きつけられた。

「技はいい……だが、力がなさすぎる……。技ばかりに頼らずに、少しは力のほうに重心を置いたらどうだ？」

ウミナはパンパンと手を払うと、ナコを上から見下ろしてに言った。その言葉には威厳さえ感じられたが、よく考えれば外見はウミナなのでオレには生意気にしか見えない。

「う、うるさいわね……。本当の私ならあんななか……」

「負け惜しみはやめておけ……」

「な……!？」

ナコさんは怒りで、その身を起こそうとした。だが、もうこれ以上戦いを大きくするわけにはいかない。というか止めるタイミングは今しかない気がする。

「待て。これ以上はやめておけ」

オレはナコさんに近づくウミナの前に立ちふさがった。これはナコさんを助けるためでもナキを助けるためでもない。こんな状態なら心配しなくても平気だろうからな。まあでもちよつとぐらいはそんな目的も入っているが、もっと大きな目的があった。

「エン……!？ こやつはまだやる気だぞ!? 大丈夫だ、私は別にコイツ殺す気は——」

ウミナはオレの両腕をつかんで、食って掛かってきた。だが、その言葉は全てオレでもわかってのことだ。

「わかってる。だが、少しだけウミナは外に出ていてくれ」

オレはできればこの場から立ち去りたい思いであつたが、ウミナをなだめるために落ち着いた口調で話す。

「そ、そんなことしたらエンが…」

「大丈夫だ。お前以外を殺^やる気はないはずだから…」

あの時、オレと会話をした”ナコさん”も、今オレの後ろで壁に寄りかかって座っている”ナコさん”も同じ”ナコさん”なら、ウミナ以外は絶対に標的にしないはずだ。それはオレがナコさんと普通に会話をした、ということとで証明されている。

ウミナはいつものワンパクな表情を失い、手をもじもじさせていた。そして、不安そうな目線はオレと後ろにいるナコさんを行き来している。それは写真にとつてあとでからかいたいぐらいに、いつものウミナの表情とはかけ離れていた。なんというか、女の子の顔だ。

「大丈夫だ。オレを信じろ」

オレはウミナをじつと目で見つめる。イメージ的には子供が何かをやらかして、その真偽を目で判断するときの親だ。

「わ、わかった…」

なんかちよつと赤くなっている気がしたけど…。まあ言うこと聞いてくれたんだからいいか。

ウミナは時々こちらを振り返りながら、フラフラとドアを開けて外へ出た。早く行けよ。

「さて、ナコさん」

外へ出たのを確認して、後ろのナコさんのほうに向き直った。そして、オレが言いたいことはもうウミナを狙わないでほしい、というお願いでもなく、大丈夫ですか？ という心配でもなかった。

「わかってるわ…。なんでシーサインを狙つか…でしょ？」

ナコさんはオレの言いたいことは、既に理解していたようだ。だ

が、オレは今、他にもつと気になっていることがあった。

「その前に、どういう状況でナコさんが表へ出てくるかを教えてほしい」

この方法さえわかればうまくやってウミナを狙う理由も、ナキの体に入り込んでしまったまでの詳しい経緯などもたつぷり時間を取って聞くことができる。

「ああ…。そのことね…」

ナコさんはオレから目線をそらして少し考えたあと、また口を開いた。

「うーん。正直よくわからないのよねえ…」

それは一番困る回答ですぜ。だが、ナコさんはオレの期待を裏切る人ではなかった。

「でもたぶん、キミがナキになんらかの刺激を与えると、私が出てくるようになっていくんだと思うわ…。この前ベンチを投げた時がはじめて私が表にでたときだし」

「えーっと…。つまり…」

さり気なく乙女には筋肉質すぎて言いづらいことを言うてくださったのはありがたいのですが…、ナキを大事にしているナコさんにはとても言いづらいんですけど…。

「そう。例えば、キミがナキに色々言って、ナキがなんらかのショックを受けると…私がでてくるの」

うわ、やっぱりか。

というか…これってナコさんにとってはかなり複雑なことなんじゃないか？ ナキを大事にしているけど、表に出るにはナキがショックを受けなければいけない。まさに皮肉。The・Hiniku。「確かにさっきも刺激を与えましたけど…、そんなの些細なことですよ！？」

そうだ。確かになんか言った気がするけど、「お前は黙ってる」って言っただくらいですよ…？ ほら、全然些細でしょ？

ナコさんは小さな声で「些細なことではない気がするけど…」と

苦笑いをして、頬をぽりぽりとかきながら続けた。

「でも、最近なぜかナキがちょっと不安定っていうのもあるし…。もしかしたらそのせいで私が出やすくなっているのかもしれないわ」なるほど。最近ナキに何があったのかは知らんが、とにかく何かが原因でナキが不安定な状態になっていて、そのおかげでちょっとしたことでもナコさんが出てきてしまうと…。

「えっとじゃあ、次になんでウミナを狙うか、なんですけど」

この調子じゃあ、ナコさんにQ&Aはまだまだ続きそうだな。

「あーっと、それを答える時間はないかもしれないわ…」

「ええ!？」

ナコさんはオレのもっと情報を聞き出したいという気持ちとは裏腹に、どんな体の自由がきかなくなってきたようで、それは少し手を動かすだけなのに震えるほど力を込めて動かしているように見えることで一目瞭然だった。

「そろ…そろ…入れ替わる…わ……」

ナコさんはかくかくと動きづらそうにオレの手を握ると、オレの目を見つめてきた。オレの胸が高鳴っていくのがわかる。これって…まさか…。

「とりあえず…ナキを頼むわね…」

で、ですよねー！ それだけですよねー！ そうか、何か期待したオレはバカなんだね。

「わ、わかりました…」

そして、ナコさんはなぜかいつも（と言っても1回しか見たことないんだが）のように白目になってナキに戻る…という動作はしなかった。

それどころか、目を瞑ったまま開かなくなってしまった。

「な、ナコさん…じゃない、今はもうナキになったか…。ナキ！ ナキ！」

呼びかけても起きない…。口に耳を近づけるとなんとか普通に息はしているので大丈夫だとは思うが、たぶん疲れているはずなので

休ませる必要がありそうだな…。

それよりも、それを2人にどう説明すればいいんだ…。ここでオレの頭が働けばいいんだが…そんな都合よくいかない。いやいや、そんなこと言っている場合じゃない。働かせるしかないようだ。

もう、案内どころじゃない、ということとは誰もが理解していることだろう。いや、というか、理解していきな。とりあえずこれから立ち上がってドアまで歩いて行ってドアを開けて説明して――
――ああ、もう！ 考えるだけ無駄だ！

さあ、次は案内じゃなくて説明なのか。しかもウミナ1人を3人でではなく、ウミナと静風さん2人を1人で、だ。

オレは精神的に重くなった体にムチを打って、嫌々立ち上がった。

第12話

教室の入り方にも色々ある―嗚呼再戦編―（後書き）

一応「教室の（略）」シリーズは完結です！

しかし終わり方がすごく中途半端ですねー（汗）。しかも今回はかなり長かったと思います（実は11話の二倍…）。なので、ここまです読んでくださった方はお疲れ様です（笑）。

さて、次回は一応このシリーズの続きといつかなんといつか…、そんな感じになっていくと思いますが、見てやってもらえたらうれしいです、かなり。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第13話

アイツが怒ってオレが怒る（前書き）

とりあえず、長い一日は終わった、かと思いきやまだまだ続くらしい。

第13話

アイツが怒ってオレが怒る

結果から言えばなんとか乗り切った、といえるのだろう。そりゃまあ内容はどうだったかは、深くかかわっていて客観的に見れないオレには評価しがたいが、今オレが自分の部屋で無事に椅子に座って頬杖をついているんだからそう言ってもいいだろう？

しかしこの場合、重要なのは”結果”ではなく”過程”なのかもしれないということは悔しいがなんとなく理解できる。だからみなさんにオレが本当に乗り切ったかどうか確かめてもらおうじゃないか。

そのためには、昨日の音楽室にいた時間まで戻る必要があるよう
だ――…………

…………――部屋には壁にもたれかかって意識を失っている女子……じゃない、男子生徒が1人。そしてそれを腰に手について、面倒くさそうに眺めている男子生徒が1人、俺だな。さてと、オレはこの場から逃げるほど臆病でもないが、進んでこの場の”事件”を解決するような勇敢さを持ち合わせてもいない。

状況を整理すれば、今から静風さんとウミナの二人に“今起こったことについて”を説明するのだが、ただの説明ならまだよかった、つまり今からしなければいけないのはかなり面倒くさくてややこしい説明だ。

まあ、具体的に言うとな……、今から説明する二人……ウミナと静風さんにはそれぞれに違う説明をしなければいけないわけだ。静風さんへの嘘の説明をウミナが黙って聞いてくれるかが心配だけど……、今は心配するよりも一回一回の行動にわが身を賭けながら進むしかないようだ。

理由は、ウミナは”一般人じゃないこと”、”静風さんが一般人

だということ”の2つを挙げただけで十分だろう。とりあえず静風さんにはとても気が引けるが、”嘘の説明”をしなければならぬ。そしてウミナには、面倒なことになりそうだがナコさんのことを説明して、さらに色々聞き出す必要がありそうだ。

重々しい防音扉を開ける。そういえば、まったく意識のない人間は普通の意識のある人間を背負うよりもかなり重いらしいが、とにかく…重い重いナキを”背負っているので”…いや違う、”背負っているのに”、片手で開ける必要があった。そして左手には例のマスターキーを持っているので、結局左右の手という1/2の選択肢すら存在していなく、手の空いている右手であけるしかないようだ。

外へ出ると、左に体育座りで眉間にしわをよせている明らかに不機嫌な生命体：ウミナがいた。ちなみにそのウミナの前には、眉間にしわは寄っているが不機嫌には見えずどちらかというと不安そうな表情を浮かべてそれを和らげるために右手が口に添えている（気がする）静風さんがいた。

「あ、火山君：と青野君！？」

静風さんの照準の定まっていなかった目は、自然に音楽室を出てきたがよく見れば人をおぶっているの、思わず2度見してしまうような目標を見つけたようで、即座にこちらを向いた。

そのリアクションをしている間に、オレは片手で起用に防音扉の鍵を閉めた。

「あ、青野君…どうしたの…？」

振り返ると、静風さんは口に右手が添えられている姿勢のまま目を見開いてたずねてきた。どうやら、驚きすぎてその姿勢から動くのを忘れてしまっているようだった。

「えーっと、たぶん貧血だと思います。だから今から保健室に連れて行くかと」

オレは下手にボ口がでないうちに、用件を伝え終わらせる。だが

静風さんは、嘘とはいえナキがオレの背中の上にいる理由がただの貧血だと知ったのに、安堵の胸をなでおろしてはくれなかった。

「あ、それと……ウミナちゃんがね、私が戻ってきてからずっとこんな感じなの……。もしかして……何かあったの？」

静風さんは少しだけ顔を傾けてウミナのほうを向いた後、助けを求めるようにジリリとオレに詰め寄ってくる。その行動はオレの心臓の心拍数ってやつを、これでもかというくらい盛り上げてくださった。

「えーっと……。ナキが貧血で倒れたのを見て……。それに驚いた……のかと」

「あ……、そう……なの……」

静風さんは頭の30cm上辺りから腰辺りまで黒い影が降りてきていそうな顔をして、少し目をうつむかせた。少し納得できない、という感情とウミナの安否を心配している、という感情が入り混じっているように見える。さすがにこのバレバレな理由を信じてもらおう、なんて甘いことは思っていない。だから、ここは静風さん”気遣い”ってやつに賭けてみた。でもなんか、こういう感情を見せられてしまうとかなり罪悪感がわくな……。そしていまだに大人しくしているウミナに逆に恐怖を感じるね。

「とりあえずオレが何とかするから静風さんはこれを主事さんに戻しておいてほしいんだけど……」

オレは静風さんにジャラジャラとした鍵のかたまりを差し出した。なにしろウミナにナコさんのことを説明するためには、静風さんを少しの間だけ遠ざけないといけないからな。

「うん。じゃあ、私いつてくるね……」

静風さんはそつとかたまりを受け取ると、振り返って少しだけ速歩きで階段のほうへ向かった。賭けは成功。そして、また罪悪感がオレを覆いだす。だが、俺のいつも使い物になっていない頭は急に回転をはじめた。

「静風さん！」

こんなに大きな声を出そうなんてことはさすがに思っていなかった…。これは”考えるよりもさきに体が動いてしまった”というやつか。

「え？」

静風さんが髪を少しだけ揺らして振り返る。その動作にはほのかにいい香りが漂ってきそうだが、それを堪能する余裕なんてあるはずもない。

「オレ達はたぶん保健室にいるから、鍵を預けたらそのまま帰っちゃって大丈夫だよ。ほら、遅くなると両親も心配するでしょ？」

急に回転した頭がたたき出した苦し紛れの優しさは――

「うっん。鍵を返したら私も保健室に向かうよ！ 火山君だけじゃ青野君を見ているのもたいへんかもしれないでしょ？」

「は、はあ…」

静風さんの、さらに一回りも二回りも――いやむしろオレと比べ物にならないほどの大きな優しさで包み込まれ、かき消されてしまった。本当にいい人だ、と思ったと同時に仕方なかったとはいえ、自分がそんな優しい静風さんに嘘をついたことへの罪悪感はまたいつそう大きくなった。今度、何か買ってあげて自己満足しなければ収まりそうにないな。

保健室の前にたどり着くと、ドアの札に【保健室の先生は今校内のどこか（主に職員室）にいるので保健室の中にはいません】という別に頭を使えばもつと簡潔に書けたんじゃないか、と思う文章がツラツラと並べられていた。ちなみに、ウミナはここまで終始何を話しかけても無視される状態にあったので、もう廊下での会話はあきらめていた。

これは…、もしかしたら保健室に入れないというやつか…。困ったな。……だが、最後の可能性をオレは捨てない！ と思いつつ引き戸に手をかけて、スライドさせようとした。

いつもの展開なら、現実はあるに甘くないという言葉とともに、びくともしない戸が目の前に立ちふさがるはずだが、今日のオレはついているようだ。軽い力でそれは開いてしまった。

中に入ればもちろん札のとおり保健室の先生の姿はなく、あの勘違い先生の謎の行動のおかげでウミナからの攻撃を受けて死亡エント、という展開の心配はなさそうだ。本当によかったです。

奥に2つ並んでいるカーテンに囲まれているベッドまでナキを持つていき、その上に一応そーっとおろす。いや本当は投げれば簡単でむしろその方法をとりたいのだが、何しろ今ナキに衝撃を与えて起きられても困るだけだ。とりあえず悔しい気持ちを抑えつつも、布団をかけるまでの過程を踏むまで主に方向転換などにならず手間取ったが、ウミナも助けてくれる様子もないので使いたくもない気合で”見た目はベッドの上に寝ている病人”を完成させた。

さて、やっと落ち着いた。これで向こうの”怪我して治療を受ける生徒が座るための椅子”に、足を開いて座っていて思わず注意しなくなるようなウミナに説明ができる。静風さんが来る可能性があるので、さっさと話さなきゃな。

「ウミナ。さっきのことなんだが…」

オレは目線をベッドに寝ているナキに戻して寝ていることを確認してから、椅子に座っているウミナの背中に目線を移して、そこへなるべく落ち着いて近づく。

「私よりもそいつか…」

そいつって…。実際止めた時はコイツの言うそいつ…紛らわしいな、とにかくナキではなく、ナコさんだったんだよ。しかも誰かを選ぶ、とかじゃなくて静風さんがくるまで時間がないから仕方なかったただけなのに…。まあコイツがオレのことをどう思おうと関係ないが、これが原因で日常生活に支障がでるのは嫌だし、これからナコさん関係で何かが起きた時に、勘違いされたままじゃかなり対処しづらくなるので、こいつが嫌というとしても説明を聞かせることにした。

「違う。そういう問題じゃなかったんだよ」

「じゃあどういうことだ！」

オレの言葉のどこに地雷があったのか、とにかくオレの発した言葉に反応して、出した声のように勢いよくこちらを振り向いた。鬼のような形相の顔は目がつりあがり、眉間に怒りのしわがよつていてもはや少女の面影はなかった。いや、本当に怖いぞ。できれば今すぐにでもやめてほしい。

「落ち着けよ。オレの話を聞いてからオレをぶっ飛ばすなりなんなりしてくれ」

オレはその勢いに任せて、ナコさんとナキの名前と人物像、そしてナコさんが何かしらの原因でナキの体の中に入ってしまったこと、ショックを与えるとナコさんが表にでてきてナキの肉体を支配できること、ナコさんはナキを大切に思っていること、そして今まで2回起きた事件：“砂嵐とベンチのコンボ事件”とさっきの”再戦in音楽室事件”はナコさんがウミナだけを狙って起こしたこと、を話した。

説明の量は思ったよりも多く、いつ静風さんがくるか冷や冷やしていたが、なんとかもつてくれて全部話すことができた。だが、たぶん現状での全部であって、まだまだあるんだろうけど。

「そういうことなんだよ。だから音楽室から出ろって言ったのは、事情を聞くためだったんだ」

そして、気になったのは話終わった直前から、ウミナの顔がどんどん赤くなっていたことだ。

「だ、だけどな、じゃ、じゃあ、な、なんであの場で言わなかったんだよ！」

ウミナは数秒前にオレが喋り終わった時よりも顔をまっかつかにして、真横にあった腕を縦にブンブンと振る意味不明なジェスチャーをしながら苦し紛れの一言を放った。もちろんさっきの鬼のような形相は話の最初ほうで緩んでいて、今はさきほどまで本当にそんな表情をしていたのか疑わしいほどだ。

「そりゃ、帰ってきた静風さんが入ってきたらたいへんだし、お前に話すと場がややこしくなるからな。ほら、よく言うだろう、”敵を騙すにはまず味方から”ってさ。それにお前は静風さんが入らないようにしてくれたんだろう？」

俺は両手を広げながら自分でもそうだと思うほど偉そうに言ってみた。それはウミナがここまで俺の思ったとおりに動いてくれてうれしいからでもある。つまり少し調子に乗っているってやつだ。

まあ静風さんが敵だ、なんて天地がひっくり返っても思いたくもないし、ウミナを味方などという安易な枠組みにはめ込みたくもなかった。ちなみに前者はいい意味で、後者は悪い意味で、だ。

「あ、ああ…確かに入らないように止めたが…。な、なるほど、基本的な戦法だな」

ウミナは左手の平をグーにした右手でポンと叩いて納得の意を表した。だが、オレの言葉を振り返って何かに気づいたらしい。

「……っておい、ややこしくなるってどういう——」

「いやあゝ、疲れたあゝ！」

ウミナがオレに台詞付きで俺に殴りかかろうと右手を挙げたその時、左に見えるドアから勢いよく引き戸を開けて元気な女の方が入ってきた。だが、ひと目でわかった。あれは例の”会話を勘違いしていた保健室の先生”だ。というかここに戻ってくる人なんてそれぐらいしかないな。

ちなみにその格好は、黒いシルクのとつやつやしたYシャツを第2ボタンまであけ、下は黒いミニスカート、その上に膝の下まである長い白衣を羽織り、さらに黒縁のメガネをかけているという、前のナース姿とはうってかわりどっからどう見ても大人のお姉さんだった。ちなみに黒い髪は前と同じで巻き髪ってやつだ。これが普段学校で着ている服だとしたら、前に来ていたナース服はなんだったんだろう…。

先生のほうを反射的に向いたので横目でしか見なかった…いや、みたくなかったが、オレの顔のほんの数cm離れたところにウミナ

の拳がピタリと止まっていた。うわ、これは……あんまり調子に乗りすぎるのもいけないようだ……。というか先生、ナイスタイミングです。

「あ、火山エン君だー！」

先生はウミナをいないものとしているのかそれとも本当に気づいていないのか、目も向けずに片手で開いた口をふさいで真っ先に俺のほうを指差した。しかもなんで俺の名前覚えてるんですか。

「え、あ、ども……」

いきなり指を刺されてハイクオリティーな言葉を返せるほど巧みな話術を身につけていないので、恥ずかしながらたじたじになってしまった。

「この前ベッドの上ではお世話になりましたっ」
時が止まった。

そして、先生が勢いよく深いお辞儀をして、俺が「その言い回しはダメでしょ！」と思った瞬間、頬の辺りに大きな衝撃が走り俺の視界はグルグル回り、気づいたらベッドの隣までふっ飛ばされていた。

「ウミナ、お前何やってんだー！」

俺はヨロヨロと起き上がってヒリヒリする頬をこすりながらウミナを指差した。もちろん、声を張り上げて。

「黙れ！ 私が怒ったから殴った、それだけだ！」

怒ったから殴るってどんな野蛮人だよ！！ そんな感情と暴力が直結している体なんて危なすぎるだろ！！

もちろん顔を地面に向けていた先生は殴る瞬間を見ていなかった。顔を上げたあと、さっきとは全く違う風景に口をあんぐりあけて驚いた様子だった。そして、その目線の先はまたまたウミナなど気にもせず、完全に俺のほうに注がれているようだ。完全に先生と目があっている。

「火山エン君ー！ 大丈夫ー！？」

そして、まさにウミナの目の前を保健室の先生がいないものとし

ている様子でパタパタと走って過ぎた。通られたウミナはその背中を追っただけで、他におかしな点といえば「なんだこいつ？」という台詞が似合う滑稽な顔だけだ。

「っとうわぁ!？」

何を思ったか知らないが、先生は俺に抱きついてきた。先生、抱きついて痛みが引くならこの世のけが人はみな幸せになれる。むしろそれ目的だけが人が増えます。

俺はなんとか痛くない程度に二の腕をつかんで冷や汗をかきながらも先生を引っぺがすが、引っぺがして見えるようになった正面の視界にいたのは、例の白いオーラをまとい釘バットがお似合いな形相をした超人・ウミナだった。ああ、いつそのこと退かせないでいたほうが幸せだったかもな。

「い、いやこれはだな、その、俺のせいじゃないんだ」

そうだ。どこをどう間違って先生が俺にこんな態度を取るようになったかは後で小一時間問い続けてみたいぐらいにかなりの疑問だが、とにかく理由を一つも思い出すことのできない俺にはまったく罪はないと信じたい。

「火山エン君? どこに向かってしゃべって——」

先生はやつと俺の視線が違つところに向いていることに気づいたのか、俺が喋っている方向:つまり真後ろを振り返る。

「——きゃぁ!？」

先生。あなたはさっきその人と一瞬でも50cmもないほど近づいたんですよ。そんなに大げさなリアクションを取るなんて本当に気づいていなかったんですね。

そしてオレは気づいていた、いまさら何をしたって後の祭りだ。ちなみにこの場合、危機が訪れるのは俺なわけだが。

「わ、私はなにもしていないわー!!」

そして、そのまま学生時代は陸上部のエースだったのかと聞いてみたいほどの俊足で一瞬にしてドアまでたどり着き、そのままほとんどおバカな人じゃない限り信じそうにない弁解を叫びながら出て行

ってしまった。

えーっとこのパターンは…？ 前も同じようなことがあったよう
な…。こういうのデジャビュっていうんだよねー。

だが、オレも学習しなかったわけではない。そう、逃げればいい
んだ！ と思い、立ち上がる0.何秒前に瞬きをした瞬間、俺の前
からウミナの姿は消え、なぜか横に立っていた。

さて、その後の展開はお察しのとおりだ。まあちよつとだけ前回
と違う点を挙げるのなら、関節技のようなものをかけられて気絶
させられるよりもっと苦しい思いをしたぐらいだ。

だが、俺はそんな中でも短気で勘違いしやすいウミナがこれ以上
怒らないような言葉を選びつつ、あの先生との関わりのなさをこれ
でもかというぐらいに説明しなければならなかった。そうしないと
いつまでこの拷問状態から解放されるかがわからなかったからだ。
そして、もう一つ違う点は静風さんが保健室に来る予定があった
ことである。

説明してウミナも納得したのはいいものの、どこかに怒りの原因
があるのか関節技をとこうとしなかった。さすがの俺もプライドを
捨てて謝り通そうかと思うぐらい限界の域に達そうとしたとき、静
風さんが部屋にゴールインしてくれた。もちろん、静風さんは入っ
てすぐにウミナの暴力を言葉で止めてくれた。あんときは真面目に
天使に見えたね。

そんなこんなで何事もなく家に戻ってきたわけだよ。

どう？

乗り切ってる、俺？

さあて、きいてみたは見たもののその答えは絶対に聞きたくはな
いな。もちろん理由なんてものは存在しない。いや、するかもしれ
ないけど、そんなこと知りたくもない。

とりあえず、誤解はとけたものの、ウミナのムスツとした顔は緩むことはなかった。たぶん今もリビングで、あの明らかに機嫌が悪そうな顔をしているのだろう。うーん、飯を食うときにあの顔のまじじゃこつちも気分が悪くなりそうだ。何か打開策はないか…？

10秒ほど考えてみた。すると、ずいぶん前に言ったあの約束が頭に浮かんだ。

そう、あれは数日前…。ウミナと俺がベッドをかけて決闘（といえるかどうかはわからないが）をした時だ。もう思い出していただけだろうか？

俺も今の添い寝状態がいつまでも続かれるのは困るし、あいつの機嫌を取るつもりはないが俺の飯まで不味くなっても困るし、それに明日は土曜日で休日だしな。

よし、ベッドをエサに機嫌をなおしてみようじゃないか。

ドアを開け、階段を降り始めると、なんだかよくわからないこんがりとした臭いがしてきた。いつもと違う廊下の臭いに少し不信感を抱きながらも、悔しいが頭の中ではいかにしてアイツの気をそらすかでいっぱいだった。しかし、そんなオレのナイスな気遣いもリビングのドアを開けたときに全て吹っ飛んだ。

「なんだ…この視界は……」

まず最初に目に入ったのは、黒。いや、煙か。

部屋の半分から上が真っ黒な煙で覆われている。まさか、火事か！？ そんなことがあつたら母親にどんな死刑を食らうかわかったもんじゃねえ！！

だいたい俺は火の元だとかガス線だとかそういう大切なものではなくチエックするようにしている。これだけは自信がある。つまり、犯人は……。

「ウミナあ！！ どこにいるー！！」

それしかない。というかこんなことを叫んでいる前にキッチンにいつて火をどうにかしないと！！

キッチンに入る。鼻が曲がりそうな臭いがする。何を作ったんだ！？

えーっと、一番奥に冷蔵庫があつて、そのひとつ手前にガスコンロがあるはずだ。あ、ちなみにオレの家は電子コンロじゃないぞ。母親が「干物をあぶれない！」とかで火がでないと困るみたいだからな！

ってそんな解説してる場合じゃない。数歩だが、できるだけ大まかに速く走る。だが、ここでまた異変に気づいた。

ガスコンロからは灼熱の温度は感じられない。火は消えている……？　じゃあなんで煙……？　いや、というかこの鼻がひん曲がりそうな臭いと煙はあきらかにこの目の前のフライパンから立ち込めているな。なら話は早い。

オレは冷蔵庫が面している壁にひっかけてある鍋つかみを手にはめて、フライパンを流し場にいれて一気に中に水を流し込んだ。

ジュウウウ！　というけたたましい蒸発音が耳障りだったが、とりあえず今部屋にだたよっている煙を取り除くべく流し場の反対にある窓を開け、さらにリビングのおく（くつろぎスペース）のほうの窓も開けた。

そしてそこらへんにあつたタオルやなんやらで煙を外に出す。やっと黒い視界が明るくなってきたが、それによつて見えてきた目の前で肩を縮めて下を向いている少女にそうとう重要な用があつた。

「おまえ、どんな実験をしたらこうなるんだよ！」

オレの叫んだ言葉にビクツと反応したが、姿勢は変えずに口を開いた。

「う、うるさい！　私が……そのエンに……その……」

うるさい、という声にも力が入っていない。

「なんだよ？」

「その……チャーハンを作つてやろうと思つただけだ……！」

ウミナはオレの顔を見まいかのごとく目をギュツとつぶり、顔を

赤くしてでかい声をあげた。

ずいぶんと口は悪いが、こいつも反省…はしてないんだろうなあ…。まあいい、こんなことがあったから買い物は中止、と言ってやりたかったが、約束事にうるさそうなウミナと約束なんてものを交わしてしまったし、なによりそろそろコイツをベッドから追い出してやりたい。

「とりあえず片付けするから手伝え」

「わ、わかった…」

そして当然キッチンへ移動した。

焦げて信じられないぐらいに物体Aがチャーハンごびりついていたが、ウミナが――

「それは私が落とす！！ いや、落としてみせる！！」

なんて、どこかの冒険ものの熱血な主人公が言いそうな台詞を胸を拳で叩きながら言い出したので、コイツに任せることにした。

横で超人がごびりついた大敵と格闘している姿はどこか滑稽で、クスリと笑いそうになったが、そんなことしたらオレがコイツと格闘することになったので、今はやめておこう。後で1人になったら大笑いしてやる。

そんなこんなで、オレはたぶん明日コイツとベッドという大きな買い物をしに行くことになるんだろう。

と、まだその話を切り出してもいないのだが、目の前のことに夢中になっている人に話かけるのは危険な行為で、お力のあるコイツだとなおさらのことなので今は飲み込んでおいてやる。

まあ飯を食べているときか、その後どこか落ち着いた時に言おうと思う。まあ、そんなに意識することないか。

とりあえず、今やるべきことをやるのが賢明だ。

オレは泡で使えなくなった指の代わりに手の甲でおでこをかき、ため息をつきながらも作業に戻った。

第13話

アイツが怒ってオレが怒る（後書き）

なんだか前半部分はほとんど「教室（略）」シリーズの内容の続きみたいになってしまいましたけど、気にしないでください（笑）。

さて、また次回から2・3話程度お話が続くことになりそうです。そんなわけであとがきを書く機会もどんどん減ってゆくわけです（汗）。

それでは、また数話後にお会いしましょう。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第14話

寢床を買いに行きましょう―都会進出編―（前書き）

とりあえずナコさんのことで起きていたウミナとの誤解は解けたらしい。そしてあの煙だらけの大惨事もなんとか切り抜けた。

さて、一難さつてまた一難。今度は買い物か…。

第14話

寝床を買いに行きましょう―都会進出編―

駅までは徒歩15分程度。オレの家は街のにぎやかな場所から少しだけ離れているとはいえ、その場所まではそこまで遠い距離でもない。

ちなみに今は歩き始めて5分ぐらい。まあ、普通ぐらいの体力と普通ぐらいの器を持つ人間ならなんてことのない距離と時間で、つまり体力が有り余っている人ならなおさら屁でもない距離のはずなのだが、誰かオレの隣でチンパンジーのようにうるさい文句を言ってくるウミナを止めてくれ。手段は問わない。

「エンー。私がお前を担げば徒歩2分なんだぞー」

なるほど、コイツはやはりコイツは体力のほうには問題はない、というかまあ当たり前か。うん、むしろ器の大きさってやつがおかしいんだな。今度お寺にでも預けてこようか。

「つか何が”徒歩”だ。お前の場合走るところのスピードじゃないだろ。」

「あのな、何度も言っているけどお前に担がれるのは非情に恥ずかしいんだ。変な目で見られるんだ」

「知ったことか」

…まあなんて子なの！！

……あーあ、オレのことはお構いなし。一回コイツに本気で社会のルールを教えたほうがいい気がしてきた。

と、まあそんなチンケな会話を繰り返している間に時間も過ぎていくらしく、回りの風景もだんだんにぎやかなものへと変わって来る。ぐだぐだとくだらない文句を言われ続けるだけでも、そこそこの暇つぶしになるらしい。二度とそんな暇つぶしはしたくないがな。

「そつえば、エン」

「なんだ？」

「私はこつちにきてからずっと気になっていたのだが、あの動く塊はなんなんだ？」

動く塊…？

コイツが指をさしている方向を点線をつけて追ってみると、後ろから排気ガスを出して爽快そうに走り、最近の地球汚染だとかの話題に絡みそうなものがあつた。それはいわゆる3Cと呼ばれているもので誰もが知っていそうなものでもある。あれは…もしかして…車？ え、お前本当にこういう近代的なものを何も知らないのか！？ 今どきマサイ族でもテレビを見ている時代だぞ？

「お前、車も知らないとは…」

「くるま…？ ほう、あれは車というのか。覚えておこう」

なんかがんばって今の生活になじもうとしている姿を見るとなんとかわいらしく思ってしまうではないか。まあその行動をしている奴が奴だから、日常の行動もあわせると打ち消しあってしまうて、むしろ印象的にはマイナスにかわりはないけどな。

そんなことを話している間に、目的地…じゃない、目的地へ行くための乗り物の…ややこしい！！ とにかく駅についた。

さて、今はお昼を少し過ぎた辺りだし、この時間帯なら電車の中もそう混んでいないはずだ。だから駅から電車に乗り込んで何駅か過ぎるのを座って待てばいいんだが、ウミナが静かにしてくれるかとか勝手にどこかへいたりしないか、とか目的地につくまでの短い時間でも色々問題がある気がしてならない。

とりあえず、オレはSuicaという非接続ICカードシステムを持つ便利な定期券を持っているので、切符などというものを買う必要はないが、オレの隣にいるウミナにそんな技術力の高いものを持っている可能性はゼロに近い、というかゼロなので、”確実に”、”120%”切符を買う必要がある。今から向かう場所はそこまで遠い場所ではないので、電車賃も200円ほどあればいける。もちろん、買ってやるのは保護者のオレなわけだ。

改札の前にいき100円玉を2枚入れ、ピッとモニターを押すと切符が出てきた。まだ暖かい切符をウミナに渡すと、

「これはなんだ？」

と、まあこの都会にいる普通の人間なら絶対に言わないような台詞をはくのは予想できていた。だから、それに対する答えも出来上がっている。

「そのときになればわかる」

我ながら面倒くさそうな返答のしかただと思った。

とりあえずその後、改札で切符をどこにいれるかわからずにそのままとおり、ピンポンという音と共に行く手を阻まれたり（もちろんウミナが）、駅の中をこれでもかというほど走り回って駅員さんに注意されたり（言わずともウミナが）、なんとなく予想はしていたけど起こってほしくなかったイベントが色々沢山起きた。

しかし、なんだかんだで今は電車の中で落ち着いている。やはりこの時間帯はすいている車両が結構あったので、見事に二人分の座席を確保できたわけだ。そして、そのすぐあとに窓の外を見ようと席に膝をついている子供を注意する親の気持ちも痛いほど理解した。あれは本当に恥ずかしいんだな。

そんなわけで、木枯らしに吹かれながら、そびえたつ建物（といっても6階ほど）の前に腕を組んで堂々と立っている者が1人、そしてその横で腕を組む者を見て他人面したそうにしているが、目を離して迷子になれるのも困ると思っていそうな者が1人。あ、これはオレね。

というか、本音を言わせてくれ。オレはさっさと中に入りたい。でもウミナがこういうでっかい建物を見ると面構えが戦闘モードっぽくなるみたいで、こちらとしてはすごい迷惑。しかも店（人ご

みの多い)の前で立っている俺、そしてウミナはかなり邪魔になっている。自分で言つといてなんだけど、俺は邪魔にはなりたくない、とだけは付け加えておいてくれ。

さて、そんなわけで中へとつげーき！

ウミナは声をかけても、上の空になっている人を起こすように眼前で手を振ってみても、動く気配すらないので、背中を両手で押して無理やり動かした。そして、ウミナは腕を組んだ姿勢のままオレに押されて入店。

さすが家具専門店だけあって、中は子供連れとか同居を考えているであろうカップルとかが多かった。えーっと、オレも一応子供連れっていう部類に入るのかな？

っと、こんなことを考えている場合じゃない。中に入ったことでウミナの興味は他へいき、当然組んでいた腕はオレのがんばりのむなしさを表すかのように簡単に解きやがるのであった。だが、オレはその瞬間何かを察知して、ウミナの首の後ろのタグをつかむ。というか、誰でも予想できるとても面倒な展開を先につぶしたただけの話なのだな。

まあ、すぐにつかんだおかげで、ウミナの店内を爆走しかねない好奇心旺盛な体は一步だけ前進むことしかできず、あとはオレのつかんでいるタグに引き寄せられるだけだった。

「うぐう」

ウミナの悔しそうな声のおかげで、妙に勝ち誇った気分になれた。

さて、ここは4階。ここは寝室で使われる家具などを中心に中心に取扱いしている階らしい。つまり、ベッドを中心に取扱いしていると言っても過言ではない。ちなみにウミナがオレから奪おうとしたベッドもここで買った。そのときは珍しく母親も一緒だったから妙に覚えてる。

とりあえずどれかを買うはずなんだが、オレも「買ってやる」なんて大口叩いた割にそんなに金があるわけではない。まあ、もした

くさんあったとしても、毎月母親がオレの口座にいれる生活費を切り詰めて切り詰めて作った大事なお金には変わりはないはずなんだがな。というか、改めて思うけど、こんな親子ありなのか…。

まあなんにせよ、どれを選ぶかというのはオレではなく、そのベツドの上で実際に寝る本人…つまりウミナのはずだ。ちなみに今は隣でいつもの目をキラキラさせるやつをやっている。今にも走り出しそうでオレは怖いよ。

「さて、ウミナ」

「なんだ！？ エン！」

はい、テンション上がりすぎ。

「オレの言葉を聞く前に落ち着いてくれ。じゃないと話せない」

「わ、わかったぞ！」

返事の元気さのおかげでオレの日本語が伝わったかは疑問に思っ
てしまうが、ウミナがその場で両手を広げて深呼吸をし始めたので、
なんとかオレの話もできそうな気がした。

だがしかし――

10分後……。

――あの、すみません。いつまでやるのでしょうか。そんなに長く
続けているんじゃないかもはや太極拳やってるときの呼吸からね？
しかもあの動作はないからすごい無駄な時間だね？ つーか深呼
吸なのにやりすぎで逆に息上がっちゃうよね？

オレの頭の中で様々な疑問が飛び交っていたが、とりあえずオレ
は現状を一言で止めることにした。

「止まれええええ！！！」

ウミナが両手を広げたままピタリと止まった。

「なんだ？ 邪魔をするな」

お前、そっちメインになってない？ 本来の目的忘れてない？

「落ち着け、っていうオレの言葉はどこへいったんだ？」

ウミナはオレの言葉でやっ去何行か前の台詞を思い出したらしく、まさにハツとした表情を浮かべている。

「そ、そうだった。つい夢中になってしまった…」

月○×日。今日、深呼吸に夢中になる人をはじめて見ました。

そして、ウミナはすぐに――

「よし、落ち着いたぞ」

――と、自信たっぷりな目をオレを見上げてきた。その真っ直ぐな目はいいと思うけど、落ち着くの10分って長すぎると思うぞ。

「今日の目的。はい、ウミナさん言ってください」

ウミナは、「はい」と言って手を上げた。

「エンがどうしてもここへきたいと言つてので仕方なく――」

「はい却下帰りましょうか」

「嘘だ嘘だ！ 私の寢床を買いにきたんだろう？」

「たたくそんなに焦るなら最初からそんなちなけな嘘つくなんての。」

「そういうことだ。つまりな、お前は自分の寢床を選べってことだ」

「私が…、あのふかふかなものを…？」

ウミナは予想外だったのか、今まで色々なことに興味がいつて忘れていたのか、驚きの表情を隠せない様子だった。まあ隠そうともしないと思うけど。

「そのとおりだ。この階にあるふかふかなヤツならなんでもいいぞ。」

あ、でも高いのは――

「いざ出陣――！」

消えた。オレの目の前から消えた。あつはー、もうウミナの姿が小さいやー。

ま、この階にあるものだけっていつてあるし、迷子にはならないだろう。

そんなわけでオレは、ウミナがオレを呼びにくるまでこの階を適当に歩きまわることにした。まあウミナが選ぶとはいえ、オレもよさそうなベッドをいくつか見つけておいてやろうかな。

久しぶりの優雅なショッピングが始まった。

…はずだった。

第14話

寝床を買いに行きましょう―都会進出編―（後書き）

更新が大幅に遅れてしまいましたね。反省です。

毎週土日辺りに更新を目処に頑張っていますが、更新が遅れてしまう場合もあるのでご了承ください。

さて、気を取り直して、今回からまたシリーズがはじまりました。買い物です。暴れます。

そういうことなので、あとがきを書くのは何話か後になると思います。それでは、そのときまで！

【次回予告】

ウミナが暴走しないわけがない。いつもの行動から予測できたはずの火山エンも今回ばかりは油断していた？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第15話

寢床を買いに行きましょう―…出会い？編―（前書き）

もうね、彼女には大人しくしてほしいよね。でもね、そんなことムリってわかってるからオレは1人で行動中。

第15話

寝床を買いに行きましょう……出会い？編――

歩きまわって数分。まだ全然まわりきれていない。

さすがといったところか、様々な形状のものがあつたり収納スペースつきのものもあつたりと、とにかく種類が沢山ある。

うーん、それにしてもワンフロアとはいえかなり広いな。やはりこの何十もある中から、これからしばらく使うであろう物を選ぶのは、かなり難しそうだ。まあ選んでもオレの物になるわけじゃないから、正直どうでもいいんだけどさ。いや、でも欲張りなウミナのことだ、どうせこれもいいあれもいいで迷いまくってるに違いない。そつえば、オレのベッドを選びにきたときは……そう、さっきも言った気がするけど母親がいたんだよな。なんだかよくわからんが、めずらしく母親が少しだけ寝不足そうにしていたのを覚えている。

……………。

当時のオレ（8歳ごろ）は既にオレをほとんど置き去り状態にした母親のおかげで、家事や日用品の買い物などはかなり手馴れていて、なんとなく世間を知った気になっていたが、まあそれも狭い範囲の話。小さい頃の頭なんかでこんな都会に来ようなんて、考やうともしなかった。もちろん、最寄の駅周辺のいわゆる”都会寄り”のところには行ったことあるが、乗り物に乗ってまで都会へ、つてのは社会科見学ぐらいでしか経験しなかった。しかも、社会科見学のときはバスに乗っていて、これもいわゆる”気づいたら目的地！”状態だったので、電車にのってここに降り立った時は、正直、少

しだけ怖い印象を受けた気がする。

そんなわけで、目的地のお店…というかまあ今オレ達がいる場所だが、そこ入ってもウミナほどじゃないが、店内を見回すことぐらいしかしていなかった気がする。だから自分のベッドを選ぶ、なんてもう一段階上の行動は、頭の上にあるメガネのごとく忘れていたのかもしれない。

ベッドが売っているフロアについても周りを見るだけ。母親から離れようとはしなかった。そのとき母親も、なぜかオレと同じように辺りを見回していたんだけど、オレと違いことといえば、手に当分のオレにとっては難しい文字ばかり書かれている紙を見つつ、見渡しているぐらいだった。

しばらく二人でそんな奇妙なことをしていて、さぞかし店員さんに「なんだこいつら？」的な目で見られたと思うが、まあそれに気づいた歳になるのは少し経ってからのことだ。

数分後という短くも長い時間が経つ。すると突然、母親の目が獲物を見つけた獣のように光ったかと思ったと思ったら、いきなり走り始めた。

速い、だが当時のオレにとって”母親とはぐれること”死”を意味していたので、離されぬように必死についていった。それはもう、必死だ。もし今のオレがその場にいても、人の目なんて気にできなかったと思うほどな。もうね、我ながらよくはぐれなかったと思うよ。

そして、一つのベッドの前にいきなり止まったかと思うと、手に持っている紙と見比べて、

「フフフフ」

と不気味に笑ったあと、30mほど先にいる店員さんまでダッシュ。もちろんついてゆくオレ。

追いついたときにはもう、店員さんに母親が話しかけていた。

「——ってことなんですが」

この後の母親と店員さんとの会話はよく覚えていない、というか理解できなかったたので覚えられなかったのかもしれない。

「そうですか。では――」

だけど節々理解できる部分はあったので、そこは覚えている。それも断片的すぎて内容につながるものではなかった。

「それをお願いします」

そう言った母親、そしてそれに答える店員さんの言葉は、なんとなく知っている単語が並べられていたので、だいたい覚えている。

「わかりました。それでは手続きをしますのでここで少々お待ちください。すぐにおよびいたしますので」

って感じだったかな、たぶん。そして母親は”また”、そして”いきなり”、さきほどのベッドまで爆走。当然ついてゆくオレ。

母親は仰向けになって死んでいる物体に「ここにいなさい」というと、またどこかへ消えていった。ちなみに仰向けになって死んでいる物体というのは、火山エンというまだ8歳の子供だ。

そしてその30分後。火山エン（8歳）のそのときから10年近く使うことになる大切なベッドを購入。選んだ決定的な理由は、『気づいたら母親が買っていた』というなんともかわいそうなものだった。

――…………。

ん？ あれ？ 待て待て。結局、オレ選んでなくね？

ダメじゃん。オレダメじゃん！

その場でアゴに手を添えて、頭がよさそうな感じでいたりきた

りしてみる。こうすると、何かいい案が浮かぶ気がするからだ。しかし、ふと横を向いた時、通行人に「え？ 何やっちゃってんのこの人」みたいな目で見られた気がしたので、すぐに手を足の横にピタリとつけて戻した。

「うん、よし、やっぱほら、こういうのは何も知らないオレが選ぶよりも、詳しい店員さんとかに聞いたほうがいいよね！ そうだよ。参考になにがお勧めか聞こうじゃないか。」

オレはさっきの恥ずかしい思いをかき消すように、店員を探すために辺りを見渡し始める。見渡して見渡して、向いていた方向の反対を向いたとき、黒い長ズボン…えーっとパンツっていうだっけ？ と、ベージュのエプロンをつけている店員さんを見つけた。もちろん、そこへ向かう。

近づくほど、その人の特徴がよく見えてきた。

仕事用なのか、肩ぐらいまである髪を後ろで束ねている。目とか口とか表情的なものはどちらかといえばキリリとしているウミナよりはふわっとしている静風さんタイプで、少しだけ垂れている目を小動物とたとえずしてなんとたとえようか。

というか、近づくともわかること。なんだが背も小動物だな。ウミナよりは少しだけ高いだろうが、まあいい勝負なことに変わりはない。ついでにビジュアルもな。でもこれは種類が違う気がするから、異種格闘技みたいものだと思うけど。

しかも、なんつーか、おっとりしているのに加えて、なぜかフラフラして歩いているように見えるのはオレだけだろうか？ もう、なんだか、こっちが心配になってきた。

まあいい、とりあえずこの人も店員だし、このフロアのことは詳しいはずだ。

「あのー、すみません」

オレはいかにも店員さんに何かを尋ねようとするお客のような遠慮加減で話しかける。というか実際に何かを尋ねようとするお客な

ので、当たり前だった。

「どうしましたか？」

パーっと笑顔が注がれる。そして、同時に店員さんから、さきほどまでのフラフラとした心配な様子が嘘のように消えた。それは、いかにも店員さんという感じの表情で…、というか考えてみれば実際に店員さんなので、当たり前…なのか？

「えっと、ベッドを買いにきたんですけど、どれがいいかわからなくて…」

「そうなんですか。えっとご自身のものでよろしいんですよね？」
「と、そうか。オレが1人で聞いているんだからそう思われても仕方ないよな。」

「あ、いや…」

でもどうしよう。なんていえばいいんだ？ 親戚……。それとも友達……。？ って友達^{それ}はなんか色々な意味でダメだし、不自然だ。

「親戚の女の子のなんですけど」

今のオレの脳からひねりだされた精一杯の言葉はこれだった。オレが店員でも思うだろう。なぜ親戚の女の子が寝るベッドをお前が買いにきているのか、と。

「背はどれくらいですか？」

だが、さすが、と言ったところか、表情がまったく乱れない。

「えーっと……」

なんて言おう、か……。もちろん、

「あなたより少し低いぐらいです」

なんていえないしなあ……。

……ん？ ……あ？ ……え？

「そうですか……。私より少し低いぐらい……」

あーっと！！ やっぱ……！ なぜだ、心の中だけに収めておくはずだったのに……。うん、恥ずかしい。そしてかなり失礼。ちょっと10回ぐらいバンジーしないと気がすまねえ。

「あ、すいません！」

オレは申し訳ない気持ちいっぱい、勢いよく、体が直角に曲がるほど深く頭を下げた。

「あ、いえ、気にしないでください」

オレが声に反応して顔だけ上げてみると、店員さんはニコリと笑って手の平をこちらにむけて、否定する言葉のとおり振っていた。やさしい、けど今のオレには逆にその笑顔に恐怖を感じてしまう。なぜかって、笑顔の裏にどんな怒りが、なーんてね。

「それだと…」

店員さんは少し周りを見渡しながら歩き始める。もちろんついてゆく。

「こちらなんてどうでしょう？」

店員さんの白いブラウスから出た小さな手は、派手ではない程度に薄いピンク色の、かわいらしいベッドを指定していた。うん、そういうかわいらしいのはあなたに似合いますよ。……と、今度は勝手に言葉に出る、なんて都合のいいことは起きてくれなかった。理不尽だ。

ウミナは暴走をはじめて、はやくも20分程度経過していた。あの程度は走っているはずなのだが、彼女に息の上がる様子はない。そして、初めて立つ土地で話す相手もいずに黙っているウミナは、すれ違う人々が振り返るほど可憐な少女であった。

しかし、当の彼女はそれをまったく気にするようすもなく、常人離れている動体視力で視界に入るベッドの隅から隅までチェックしている。だが、なぜかそのベッドに触れて、色々と確かめることをしようとはしていなかった。

ベッドをチェック、またチェック、と既に流れ作業になりつつあった行動の中に変化が起きた。今いる知らない土地では、唯一の知り合いとも言うべき者が視界に入ったのだ。もちろん、ウミナの視線は、そちらへ行くことは説明せずともわかる。と同時に、自然と

口も開いた。

「お、エン。エンだ！」

無表情だったウミナの顔はパーっと日がさしたように明るくなった。そして走る目標をエンの後ろ姿に定め、そこへ向かう。

向かいながら、もう一度声をかけようとしたとき、その隣に見知らぬ人がいることに気づく。しかも、女。そして、それに気づいたときにタイミングよくエンが向きを変えたので横顔が見えた。なんだか頭をかきながら、少しだけ赤くなって照れている様子だ。ここで少女の足は止まった。

「エン……。なるほど……。私がない間に……」

ウミナは怒りで手が震えている。そして、下を向いて眉間にしわの寄っている笑顔を浮かべる。それは誰が見ても「逆に怖いわ！」とツツコミをしかねないものだった。しかし、どうやら彼女は表情のほうに気を配っている場合ではないようだ。

少女は身近にあつた軽そうな丸い木の椅子を、片手でひょいと持つ。そして、一言。

「こんの馬鹿者があああ！！」

あー、本当になんでさっきは自然にいえなかったんだろうな……。なんて過ぎてしまうことオレは後悔していたのかもしれない。

さて、とりあえずさっきのベッドは保留、ってことにしてもらった。即決つてのはあまりよくないしな。

「こちらなんてどうです？」

店員さんが指定したのは薄いオレンジ色に花柄というかわいらしいものだった。

「はい、可愛らしいですね」

「そうでしょう。しかも、下に収納スペースがあるからちよつとしたタンズ代わりにもなるんですよ」

店員さんがいくつかベッドの下に収納スペースを開けてみせる。

なるほど、おまけ機能つきってやつか。でもアイツにオレンジ色か……。似合うのかな……。

と、考えていると、店員さんがゆっくりと立ち上がった。

「真剣に考えてあげて、偉いですね」

オレのわんぱく少女に似合う色を考える様子を読み取ったのか、店員さんがニコリと言った。

そして、これはオレにとって、あまりにも残酷な不意打ちっていうやつだった……。

「あ、い、いえ、ほら、長く使うものですし……」

あー、やばい。うまく言葉が出てない。この感覚、最近オレは味わっていないけど、わかるぞ。

「なおさら偉いです。親戚の子も喜びますね」
ニコリ。

また、だ。2度目の追撃。オレ自身、もう限界、という感じで顔の辺りがほてっているのが自分でもわかってしまう。そして、照れ隠しになんとなく頭をぼりぼりとかいたりなんかしてしまう。

「その、いっつもやんちゃなやつなんで、こういうのはオレが選んであげようかなー、なんて！」

アハハハハ、と笑ったそのとき。

「私がない間に……」

右から声が聞こえてきた……気がした。

反射的にそちらのほうを向くと、あらあら摩訶不思議、噂をすれはなんとやら、ウミナがそこに突っ立っていた。

だが、どこか様子がおかしい。こう、なんていうの。うーん、なんだらうね。オレの本能が全力で危険を察知して、ついでに回避すると警告している感じ。

ウミナは膝を少しだけ曲げて、軽そうな丸い木の椅子を右手でひよいつ、ととつた。

えーっと、何をしているんでしょうかね？　こちらにきて座るんでしょうかね？

心の叫びはオレの本能を信じたくなかった、というその一心しかない。だが、それとは裏腹に、ウミナは大きく口を開き――

「この馬鹿者がああ!!」

――ピツチャーふりかぶって、投げた!!　って椅子!!

さて、人は何かの拍子に、全ての出来事がスローに感じる瞬間があるという。そのときのオレはその状況だったようで、色々と鮮明に見えてきた。

回転する椅子。じわじわと迫ってくる。しかも、その椅子が向かっている先は、どちらかといえばオレではなく店員さんのほうに來ている気がする。そう思った瞬間、店員さんは人間の防衛本能が發動したのか、目をつぶって頭をかかえ、その場にしゃがみこんでしまった。スローで。

ってまずい。このままじゃ店員さんにデッドチェアしてしまう!!

オレは店員さんの前に立つ。

あれ? この光景なんだかデジャヴユ。

……… うん……… そうだね、プロテイン……… じゃない、ナコさんがウミナにベンチを投げてきた時だね。うわ、何んだろうな、このトラウマな光景。

……… あれ?

だが、違和感を感じる。トラウマで心に衝撃がきたからではない。むしろ逆だ。この光景はオレにとって恐怖以外の何者でもないはずなのに、なんだか別に怖くないというか……。つか、なんとかする気がしてきた。

あれか、もしかしたらベンチっていうもつと大きなものが向かってくるのを体験したから、椅子程度じゃ動じなくなったのかな?

推測だがあながち間違っちゃいない気がする。なんか複雑。

近づいてくる椅子の回転の方向は……… 右に30度ほど傾いている。ここまでわかってしまっていると、他にやったことといえば、それ

にあわせて脚を受け流すようにつかむぐらいしかなかった。もちろん店員さんには当たらないように、少しだけ山を描くようにして。目線に戻すと、肩で息をしているウミナがまだオレを睨みつけていた。

「な、なかなかやるな……。だが次はもつと威力を上げるぞ」

ここは戦場でもないし、お前と決闘していたわけでもない。そんな物騒な台詞はお前が1人でなんとか戦うときのためにとっておいてくれ。

「つか……」

「何言ってるんだよ？ お前のためにやっていることなのに」

「ハン、私のためか」

オレのやさしいことばを、疑いの目で吹き飛ばす。背が低いくせにどこか上から目線なのがム力つくな。だがとりあえずここは説明をして、バカな頭を覚ましてやるうじやないか。

「そうだよ。お前のベッドを選ぶために店員さんに聞いてただけだ。さて、オレは何か悪いことをしたか？」

何一つ間違ったことを言っていないオレの言葉に、ウミナの顔がウツと言った感じにゆがむ。どうやらまた勘違いのバカヤローをしていたようだ。本当に、そろそろ学習しようぜ。

「エ、エンがま、まぎらわしいことしているからだぞ」

プルプルと震えた指がこちらを指差す。紛らわしいことってなんだよ。お前に怪しまれるようなことをした覚えはないんだが。

「あ、あの……」

下から声が聞こえる。あ、忘れてた。

「すいません。本当にやんちゃで……！」

声の方向を向いて、ヘナヘナと地面で女の子座りをしている店員さんに思わずどきりとしたが、謝罪ついでに手を差し伸べた。

「あ、すいません」

その手に店員さんが捕まって、よっこいしょと立ち上がる。

「あ、あー！ あー！……」

横で大きな口を開けてオレを指さしているウミナがうるさいが、そんなの今に始まったことじゃないだろう。

「あ、あの、その、ありがと……ごさいま……す」

店員さんがなにやら頬を赤くしてうつむいたまま、さっきまでのキヤラとはまったく別な感じでそんなことを言うので、その光景をみて思わず頬が緩みそうになった、というか一瞬緩んだが、オレは全面的に悪い立場にいるので、

「あ、いえいえ！　むしろ迷惑かけてすいません！」

と、返すことしかできなかった自分をどれだけはたきたかったことか。

「あ、あの、すごい……ですね」

って、あれ？　オレ、ほめられてる！？　しかもなんかいいムードじゃないっすか！？

よ、よしオレも男だ。ほら、雰囲気が重要っていうじゃん。せーの！

「グハエ！」

そのとき、頭に衝撃。目ん玉が飛び出るほどビックリして、加えて痛みまであるんだからお釣りがほしいほどだ。

おそらく凶器は物が落ちた音からして木、そしてそれから連想されるものはさきほどの丸い椅子しかなかった。

オレは思った。

ああ、そうか。雰囲気以前にウミナがいたら意味がないですね、と。

第15話

寢床を買いに行きましょう―…出会い？編―（後書き）

【次回予告】

買いそうで買わない。そう、当初の目的はベッドをうつことだった。

次回、ついにうつことに…？

そして、店員は本当に今回限りの登場なのか…？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第16話

寢床を買いに行きましょう―靴下安い…編―（前書き）

惜しかった。もう少しでなんかすごいオレの人生にとってプラスな出来事が起こる気がしたんだけど…。
後頭部が…痛いです。

第16話

寢床を買いに行きましょう―靴下安い…編―

さて、とりあえずベッド購入。

あ、冒頭から今回の目的を果たしちまったな、すまん。だが、早く買わないとまたウミナが何かをやらかす気がしてならないんだ。こっぴどいのは早めに済ましてしまったほうがいい気がするんだ。

とりあえず買ったのは先ほどの犯行現場（椅子を投げたところ）に一番近くにあったものだ。つまり、オレが奇襲を受ける直前に紹介された、あの”オレンジ色の花柄”ベッドだ。ウミナの凶暴さを知っているオレからすれば、少々かわいらしすぎる気もしたが、ウミナは、

「お前のために色々選んでやったんだよー」

というオレのありがたい話を聞いて、

「これにしてやる！」

とか立場をまったくわきまえていない発言をしたので、とりあえずどういう形であれ本人の意志を尊重しよう！　ってことでこれに決定となった。

さて、本当なら後は帰るだけなんだが、だめだ、どうもフラフラ…する。まあ、原因はもうわかってる。さっきのウミナの妙に強い一撃のせいだ。……たぶん。

「大丈夫ですか？」

財布をしまったあと、少しだけボーっとしていたオレを心配して言ったのか、それとも「早く持ち場に帰りたんじゃないや、帰れ！」と言いたい気持ちを抑えて言ったのか、店員さんはオレにやさしく声をかけてくださった。とりあえず、前者であつたほしい。というか前者であるということをオレが断言してやる。確証はないけどな。

「大丈夫です。平気です。元気です」

オレの3連続強がり発言は、本当に強がりに見えてしまったよう

で、というかまあ本当にちよつとぐらい強がり入っているんだけど、とにかく店員さんは、先ほどよりも何倍か心配そうな顔をこちらへ向けてきた。失敗しちまった。逆に心配させてどうする。

「あの、なんだったら医務室に……」

ああ、なんてやさしいんだ。それが業務上の義務だったとしても、オレにとつては10日続きの雲の隙間からそそぐ、太陽の光を崇める人々ぐらいありがたみを感じる。いや、大げさじゃないぞ。こうやって少しぐらい頭のネジが外れると、変なことも簡単に言えるようになってしまふんだ。本当だ。試してみてください、おすすめはしないけど。

だがそんなギャラクシーな行為を受けて、ファンタスティックな気分になって、意味もなく英語を使うことへの恥ずかしさも忘れ、天に昇るオレの足を、反則な握力で思い切り握って、地面どころか地下まで叩き落とすのは、もちろんウミナしかいなかった。

「エンが元気と言っているだ。お前、しつこいぞ！」

違ウヨ。違ウヨ、ウミナサーン。かーのじよはわーたしにその寛大な心をもーって――

「帰るぞ、エン」

せめて最後までふざけさせてくれよ。

というか、腕がいたい。お前の右手で思い切り握ったものが”オレの右腕”だということを忘れないでいただきたいな。

「折角の好意なのに、その態度はなんだよ？」

「う、ううつるさい！ いいから帰るんだ！」

ウミナはこちらを向かずに、オレごと店員さんのいる場所とは真逆のほうへ行こうと、オレの右腕をつかんでいる右手で引く。だが、その力はオレがここで動かずにふんばっていればとどまっていられる程度の力だ。それはウミナなりの心の動揺っていうもんだと取っ
ていいのだろうか？

というか、お前の向かおうとしている方向はエスカレーターがある場所とはかけ離れているぞ。

「エン、うーごーけー！」

ウミナからすればたいした力は出していないんだろうが、まあオレにとつては多少キツくなってくる程度の力加減になってきた。このまま何も言わずにここにとどまっていたら、いつか勢いあまって気づいたら星になっていた、なんてアンパ。マンに出てくるバイキ。マンがやられるときのようなオチで終わりたくはないので、こちらで吐く息を喉で震わせることで、一言言葉を発してやろうと思う。「わかったから、とりあえず離せ！」

と同時に右腕をオレの肩辺りまで上げて、下へ勢いよく振る。すると、オレの言葉と腕の動きのおかげで、ウミナがつかんでいた部分にスーッと久しぶりに空気が通る感覚がした。ちょっとだけ赤くなっているのはこの際見逃してやろう。

「よし、離れた。帰るぞ」

「待て待て。なんでそんなにカリカリしてるんだ？」

オレはずっと気になっていた疑問を素直にぶつけた。ウミナは確かに喜怒哀楽のどの感情が飛び出てくるか予想のできないやつだが、それなりの前兆つてものをなんとなく読み取れることはできる。というか、まあ、つまり感情の原因つてやつはいつもわかるんだが、時々こうやってよくわからないうちに怒ったり、落ち込んだり、そういうことがあるからだ。まあほとんど怒ることばかりだけどさ。

「り、理由などない！」

「って思い切り顔赤いぞ。」

まあ、理由がないとは思えないんだが…、とりあえず本人はコトを吐くつもりはなさそうだ。

「なら少しは落ち着けよ。ほら、店員さんがまた困っているだろう？」

推測で言葉を発したオレは、確認の意味で店員さんのほうをチラリと見た。うーん、まあ困っているというよりは、心配している感じの顔だな。この際、細かいことを気にしていたら人生やっていけないよね、うん。

だが、ウミナは、落ち着かせようとしたオレの言葉とは裏腹に、オレ自身まったく予想していなかった行動にでやがった。

「また……。まただ……」

また…とは？　どういうことだ？　ウミナの雰囲気がおレにとって芳しくない状態になってきている気がするんだが、なにかまずいことを言ったか？　しかも今までに言ったことのあるもので、だ。いや、というかまあ地雷は嫌というほど踏んできたんだがな。何度も言うが、また、ということは前にも言ったことのはずだ。……つて、ありすぎてわかんねーだろ。

そして、色々と考えているうちに、ウミナの中で勝手に作られた制限時間は、タイムオーバーしてしまったようだ。ちなみに、ウミナの気持ちなんて読めるわけもないし、読みたくもないので、オレがそう判断しただけだ。

「エンの…エンのバカヤロー!!」

ウミナは目をギュツと閉じて、自分の苦しさを表すかのように叫んだ。ここまではまだいい。まだ、というのはできればしてほしくはなかったが、その後の行動と比べたらということだ。そう、つまり問題は次の行動だ。

なんと、”力の加減”というウミナにとって一番大切な”体の役目”は、怒りだかなしみだかのせいで失われていた。

結果、ウミナはオレの腹辺りを押して、オレが数十メートル吹っ飛ばされる、というオレにとってはなんと納得のできない事態に落ち着いた。いや、落ち着いてないか。

だいたい10秒か20秒ぐらいは吹っ飛ばされた場所…、つまり、500円で5足、お買い得な靴下セット』が大量に入っている力ゴとそれが置いてあったテーブルがあった位置で動かないでいた。

正確には動けないで、だがな。

ちなみに、当の『500円（略）』が入っていたカゴとテーブル自体はオレが当たったせいで、中身が飛び出たりして、元の位置からは大きく動かされている。そしてその中身というのが、オレの頭から大量に乗っかっているわけだ。

たぶんウミナは、オレを見向きもしないで、どこかへ走り去っていったに違いない。というか、もし見ていて何も行動を起こさないのであれば、それはひどすぎるというやつだ。補足していえば、優しい心を持っている店員さんは、オレの隣で心配そうにオレの肩を持って、声をかけてくださっている。

「本当は商品のことを心配しているけど、お前が邪魔で片付けることもできないから早くどこかそうとしているんだぜ！」

という、オレの頭の中の悪魔のささやきも今はまったく気にならなかった。

とりあえず起きよう。

大丈夫です、と一言断って起き上がろうとすると、店員さんはゆっくりとオレの肩から手を離れた。オレもその動作に触発されたわけではないが、ゆっくりと立ち上がった。

「あの、大丈夫…ですか？」

店員さんは商品も気にせずにオレのことを見つめてくる。そんな目で見られたら赤面する以外何をしろっていうんだ。

「だ、ダイジョウブですよ。ほ、ホラ、商品拾ワナイト」

そんなオレはちょっとだけ片言な日本語になったいたかもしれないが、この際胸の中にしまっておこうとおもう。

とりあえず一緒に商品をもとの位置に戻す。すると、次に優先すべき行動は一つに選ばれた。すごく、すごくすぐこの場にいるたいが、オレも保護者という立場にある以上、アイツが迷子になつては困る。

「すみません。あの、追いかけてきますね」

オレはそういったあと、すみません、という言葉と共に頭を深く下げると、店員さんはまたニコリと笑った。

「いえいえ、でも、ちゃんと仲直りしてくださいね」

その言葉はなんだがやわらかくて、とても暖かく感じた。

名前ぐらい聞きたかったけど、オレはもう、振り返ってかけだしていた。もったいない。

少し走ればウミナはすぐに見つかった。周辺の空気をどんよりさせるほど落ち込んだ様子でうずくまっていたのは、見つけたくなくとも見つけてしまうというものだ。

「おい」

後ろからオレが声をかけても何も言わない。

「あれか、本格的な嫉妬か、お前もついに桃色乙女な年代か」

「……………!!」

ウミナの頭の上からボンツと湯気がはじけ出た気がしたけど、オレの目の錯覚と信じたいと思う。

「ウソだつて。ほら、何か話さないとわからないだろ」

「……………ふん」

ふん、つて…。オレが求めたのはそういう言葉じゃないんですけど…。なんというか、せめて会話が成り立つぐらいにはしてほしいんだがな。

ってかよく考えたらこんな光景、人に見られたらそうとう恥ずかしいよな。ってもうすでに見られてたりするのかな？

そう思い、振り返ってまわりを見ようとした。まあ、幸いオレが恥ずかしくなるような景色は見えなかったが、違うものを発見して”しまった”。簡潔に言おう。柱と、女性。……すまん、簡潔すぎるな。反省している。

とりあえず、オレが見えたのは、柱から店員さんが顔を半分だけ

だして、こちらを伺っている異様な光景だ。つか、そんなに心配だったんですか？

.....。

そう思った瞬間、オレの頭に衝撃が走った。なんだ、視界がぶれてきているではないか。ちなみにオレには誰も攻撃していない。たぶん、さっきのウミナの攻撃が後を引いている。

うん、やっぱり力のあるヤツの投げた木が後頭部直撃するのは結構ダメージがでかいらしいな。しかもすごく遠くに感じていたベツド購入という目的を達成したせいでどこか力が抜けたのか、ウミナの行動につき合わされすぎて体力が尽きたのか、とりあえず体に力が入らなくなってきたことは確かだ……。

さーてさて、本格的に……やばくなって……きた。そろそろ限界かもしれない。ああ、また気絶か。なんか12話ぶりだね……。

でも……ここで倒れるのはダメだ。

理由？ そんなの誰がどう見ても明確なものとなっているはずだ。後ろにウミナ。前にはこちらの様子を穴があくほど見ている店員さん。この二つの要素があるだけで十分だ。逆に言えば、この二つ以外に何があるんだっていうだよ。

とりあえず……、どこか……ベンチかなんかで横にならないと……。

店員さんのほうをもう一度確認。やっぱりまだこっちを見ている。ここで立ち去ったら激しく失望するだろう。でも、しかたない。

……うし！ やりたくはないが、今すぐにどこかへ去ってしまうのが一番いい選択とみた！

よし、ダッ……シユ？

……え？

この瞬間、オレは完全に力が入らなくなる感覚を味わってしまった

た。どんなに力を振りしぼろうとしても、どこからもなにもわいてこない感覚だ。それを味わうのは何年振りか……。だが今は、その何年前のできごとと話せそうにない。つまり、情けなくも倒れてしまっようだ。

うたれづよさには…自信があっ…ただけど…な。

次に目を開けたときに移ったのは、なんとなく予想していたんだが……”天井”だった。

第16話

寢床を買いに行きましょう―靴下安い…編―（後書き）

【次回予告】

寢床を（略）シリーズ、次回完結！

結局エンはウミナと絆を深められず、店員さんにお近づきになることもできなかった。

次回、火山エンはこのまま終わってしまうのか……？

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第17話

寝床を買いに行きましょう―白衣はない編―（前書き）

何回目だろうか。

倒れるなんて短期間に何回も経験していいものではないって信じて
ます。

第17話

寝床を買いに行きましょう―白衣はない編―

天井。一概にそういつても様々だ。

とりあえず言っておこう。少なくともオレはこの天井を知らない。だが、天井が見えている、ということは今は仰向けになつて寝ているのだらう。寝ている場所は硬くはなく、むしろフカフカしている、寝心地がよい。つまりまあ、ベッドなんだろうな。

右手を目の前にかざして、握ったり開いたりしてみる。どうやらちゃんと動くようだ。別に動くかどうかの心配なんてこれっぽっちもなかったが、なんとなくそうしてみたくなつた。なんというか、自分の置かれている状況を、よく整理したいんだ。

オレはさつき急な目まいと共に体の力を失つて…、たぶん倒れたんだらう。そして運ばれて、こうして寝かせられている。…たぶんな。

このままこうして眠っているわけにもいかないので、上半身だけ起き上がってる。

どうやら本当に体に異常なんてないようで、なんなく起き上がった。このままあぐらをかきつつ、壁によっかかつて座つていてもいいが、そうすると、嫌でも自分の場所を理解できた。

目の前には白い机が置いてあり、その上には鉛筆立てや、よくわからない書類が何センチか積み重なつて置いてある。他を見渡してみると、包帯などの応急処置ができそうなものが入っている棚や、小さい冷蔵庫とかもある。

自分に起きたことと重ねて判断するならば、ここは100%と言つていいほど、医務室のはずだ。

とりあえず、なんで医務室にオレ1人がポツンと取り残されているのかは、何よりの謎なわけなんだが…。つてそうだ！ そうだよ！ あの店員さんとはかく、ここの医務室の係の人や、ウミナさえもいないってどういうことだよ。あれか、ドッキリか、これから

信じられないことが次々と起きるっていうのか。

「……はあ」

声に出さないとはいえ、1人でマシンガントーク全開でいった後というのは、ため息もつきたくなってしまう。むなしいし。特にこう、いきなり孤独の中に突き落とされたりする、みたいな状況になるとね。いやいやいやいや、別にウミナと一緒にいたいなんて言っているわけではない。店員さんのほうは否定しないけどさ。って何言ってんだオレは。

…これ以上考えていても仕方はないな。だけど、とりあえずここを出て何かしよう、という気も起きない。なんだか、体がとてもダルいし。

うーん、もしかして日々の疲れでこんな状態にー、なんて。…ほんのちょっとだけリアルかもしれない。ま、もうこの際それでいい。そしてオレは、吸い込まれるようにベッドへ横になるのだった。

………。

何分ぐらいたったのだろうか…。

オレは心地よい眠りの中にいる。起きないといけないような気もするけど、もう少しこのままだった。あー、なんか久しぶりのんびりできるなあ…。

「私がやるから下がっている！」

ほーら、鳥のさえずりも聞こえてくる。

「お客様、一応従業員としての義務があるので、私がやらなければいけません」

もっさ、このまま溶け込んで、

「な、急によそよしくなったな！ 大体そんなの関係ない！」
全てに身をまかせてさー。

「関係あります」

…ムリだろ。

「…そんなの無理だろおおー！！」

オレはこの無理なノリや、気にしないで眠れない自分、というか何もかも嫌になって、心の叫びと共に勢いよく起き上がった。そして、床にある靴に足をいれて、ベッドをそのまま椅子代わりにする。二人ともまったく予想もしなかった出来事が起きたせいか、目を大きく見開いて固まっている。うん、いいリアクションだ。そりゃ、眠っていると思った人物が、会話の流れを無視して大声で叫んで起き上がったんだから、そんなリアクションをしても仕方がない。オレでもする。

声からしてわかってはいたが、やはり目の前にはウミナと、例の店員さんの姿があった。なぜ二人でひとつのタオルケットを握りしめているかは、この際聞かないことにする。

「エ、エン…？」

「び、びつくりしたあ…」

各々のセリフはどうでもいい。今のオレにそんなことを気にしていられる余裕も、器も、持ち合わせてはいない。

「ここの、本来いるべき、係の、人は？」

いきなり大声を出して勢いよく起き上がったので、なんだか息が上がって、分の切れ目がおかしいのは承知の上だ。

「と、トイレです」

「トイレ。そうですか」

「え、っ？」

………続かない。会話終了。気になったのは、答えた時に店員さんの声が裏返ったのと、ウミナのその明らかに動揺しているリアクションだけだ。…それだけ、だ。

「ずっと？」

「は、はい！ お、おなかの調子が悪いみたいで」

また裏返ってますよ。

なんつーか、いなくなるタイミングもなにもかもまるで図ったようだな……。……なんて疑ってかかるのは、俺の感覚がおかしくなっているだけか？

「そういつときって、他の代わりの人がきたりしない……の？」

「は、はい。それはそうなんですが、み、みんなトイレです」

おかしい。いくらなんでもこれはおかしいっすよ。俺の感覚うんぬんの問題じゃないっすよ。ウミナもそんなに大きく首を縦に振らなくてもいいよ。逆に不自然だよ。

「へ、へえ……」

だが、いくら怪しがっても物的証拠は何もないし、オレが何か言っても、都合のいい理由をつけて押さえつけられるだけだろうな……。そもそも、本当にみんなトイレ行きで、驚くほど悲惨な事になってんだとしたら、逆に失礼なことをしたことになるかもしれないし。

「そんなわけで、私がきました」

ま、まあいいか。別に嫌だっけわけではないし。不信感はかなりあるけど。

「えっと、とりあえず倒れたときには特に異常はなかったんで、そこまでの心配はないとは思ってたんですが……」

俺は医療関係の面で、専門的な知識なんでものは持ち合わせてないんだが、この言葉を本当に信じていいのだろうか……。多少なりとも俺の命にかかわる気はしなくもないぞ。

「……その……一応、このあと何かあったときのために……」

そして、店員さんは二つに折りたたんだ紙の両端を、両手で持ってオレに渡してきた。ちなみに腕を伸ばして頭を下げているので、なんだかラブレターを渡す女の子みたいだ。

「あ、はい。どうも……」

オレは横から殺気に似たような視線を受けつつも、なんだか店員

さんにつられるように両手で受け取り、別に何を思うこともなく開いて、中身を確認してみた。

とりあえず目に入ったのは一行目に書かれている名前だ。えーつとこれは…、『下北沢 礼』…？ …『しもきたざわ れい』って読むのか？ まあ、スペースがあるし、『下北沢』が苗字で『礼』が名前だろう。

「あ、ちなみにその名前の読み方は、しもきたざわらい下北沢礼ですからね」

「ら、ライ！？ まるで意味があるような名前の読みだ。…だが、俺には変わった読みですね…、としかいえなかった。

というか、あれか、オレの思考を読み取ったのか。いや、それともこういう反応に慣れているのか？ いや、そんなことはこの際どうでもいい。とにかく問題は、その下に書いてある英数字だ。

「えつとそれで…、その下にあるこれは…」

俺はその英数字が書いてある部分を指差して店員さんに見せた。

「あ、それは私のアドレスと、電話番号です」

「な、なんだと！？」

彼女は女神のように晴れやかな表情で、ニコリと笑った。おお、なんと神々しい。これが希望の光というものなのか。一方横からにじみ出てくる絶望にも似た空気を、どう処理したらいいものかも悩みどころだ。

「えつと、なんというか、いいの？」

俺は右手に紙を握り締めたまま、ほぼ初対面の女性に色々な意味での確認を試みる。色々な意味がどんな意味かは、人によって捉え方が変わってくるだろう。それが醍醐味というやつだ。

「何がですか？」

なんだこの笑顔は！！ まるで自分が全く持つておかしいことをしていないかのような無垢な瞳！ こんな顔をされたら、事情聴取中の警察でも無償で逃がしてくれそうだ！

でも俺は警察でもなければ、これをこのまま受け入れることのできる余裕をもつ男でもない！ だって今これを受け入れたら、横で

怒りのオーラを放ってるウミナに、どんな暴力をつけるかわからないもの！

「いや、ほら、知らない男に簡単に連絡先教えたりしてさ」

でも多少タジタジになるところは、この際見逃してほしいものだ。
「そ、そんな、簡単に教えるわけじゃないじゃないですか。えーっと、今回は私のほうにも否があるわけですし、それに、お詫びもしたいですし、べ、べつに変な意味じゃないですよ？」

「そ、そうなんですか？」

いや、でもさっきから言葉を詰まらせつつも、笑顔のまま表情が変わらないのが逆に怖いんだが…。

…うん、ダメだ。やっぱりこの人にこの流れで勝てる気がしない。だってこれじゃあ、疑って掛かる俺が悪者みたいな気がするもんな…。

……いやいやいや、もしかしたら本当にただお詫びをしたいだけで、別に深い意味はないのかもしれない可能性がないということもある。最終的にどちらの意味になるかは、ちゃんと言葉を見てほしい。

「そ、そうですよ。だから、ちゃんと登録しておいてください。あ、登録したらちゃんと私に送ってくださいよ。じゃないと意味がありませんから」

「は、はあ……」

とりあえず、今は流されておこう。なんか、いくら抵抗しても結果的にこの紙をつけとる運命な気がしてきたし。というか、正直うれしし。

だが――

「エン」

なんか結構前から予兆はあったけど、今の会話で一気到大噴火したウミナをどうしたものか。

っておい、なんだその振り上げた右腕は。

「その紙を…その紙を渡せ!!」

「ちょ、まて落ち着け!!」

俺は反射的に左腕をウミナにかざしたが、そんなことではコイツの攻撃を受け止めるなんてできるはずないってことは承知の上だ。ただ、その考えを感覚がまさったただけだ。最初に言ったように、反射的にやってしまった。情けないことに、正面からのウミナの攻撃には何も対処できないということだ。

また、おやすみだね。

.....。

.....？

あれ？ 痛みを感じない...？ というか、何もこない...？

恐る恐る目をあける。そこには、あるはずのウミナの姿はなかった。だが、その理由はすぐにわかった。

「なんで俺の横で寝てんだ？」

さっきまで俺に攻撃する気満々だったウミナは、普段のワンパクな彼女からは想像できないほど大人しい表情で、横になって眠っていた。

なぜだ。状況が読めん。えっと、ウミナは俺を殴ろうとした。で、その後...どうなった？

俺が混乱して考えを整理しているところに、声が飛び込んできた。

「あ、あれ、どうしたんでしょか...」

もちろん、店員さ...いや、下北沢さんだ。

「な、なんでなんですか？ 俺が目を瞑っている間に何が...」

腕をと共に目まで瞑っていた俺は状況なんて読めるはずがなかった。つまり、被害を食らう心配のなかった『目を開けていた人』に

この状況の説明をゆだねるしかない。

「わ、私もよくわかりません…。急に力が抜けるように眠ってしまったので…」

この人にもわからないとは…。でも、ウミナは大丈夫なのか？

いきなり倒れるって、俺みたいな普通の人間ならともかく、こんな無敵なヤツがそうなるなんて、タダ事じゃないんじゃないか？ そう思った矢先、下北沢さんはその心配を察知したかのように口に手をかざしたり、脈をはかったり、何かを調べ始めた。

そして、その作業はすぐに終わった。

「大丈夫です。調べた限り、ただ眠っているだけのようです」

「そう…なんですか…。じゃあ何も異常はないと？」

「はい、この状態なら特に心配することはないと思います」

この人はもしかしたら本当に医療のほうに詳しいのか？ なんだか手馴れているように見えるし。まあ、それなら今回ここにいる理由もわかる。

「そうですか。なら…、大丈夫ですよね」

まあ完全にそう確信したわけではない。それに、一応ぶっ倒れたわけだし、家に帰って休ませたほうがよさそうだな。それに、とても残念だが、オレはもうどこも悪いところなどない。そりゃ、すぐここにいたい。それこそ飯を食う前にウミナのように。だが、もう時間もかなりたっているだろうし、そろそろ晩飯の材料を買いに行かなければならない。ウミナのためになんか元気の出るものでも作ってやろうと思う。

「あのそろそろ飯の準備があるので、これで失礼しますね」

まあ、今回は仕方ないな…。こうなった以上さっさとしよう。

俺は一礼して、

「ありがとございました」

——と言った後、寝ているウミナをおぶさって部屋からでようとドア付近まで歩いた。だが、そのとき、

「あ、あのー！」

後ろから、声。振り向く。

「あ、あの………」

下北沢さんは少し前のめりになりそうなくらいに、何かをいいたそうだったが、数秒ののち、その言葉を飲み込んだようだ。

「……いえ、……お大事……に」

下北沢さんはニコリと笑って、さっきの俺と同じように『礼』をした。

第17話

寝床を買いに行きましょう―白衣はない編―（後書き）

更新、すごく遅れました。すいません。

なんとかこのシリーズも終わり、次からはまた新しいお話です。

次のお話は1週間か2週間後を目安にしていきたいですね！

それでは、また次回！

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第18話

ウミナ、光臨。故の完結？（前書き）

すごく感動的に終わった気もするけど、ぶっちゃけてしまつたら背中のコイツをどうにかしてほしかった。

第18話

ウミナ、光臨 故の完結？

土曜日が終わり、日曜日が終われば学校が始まる。学生なら誰もが知っていることだ。もちろん、月曜日に祝日があったり、そういう類の例外は存在するが、この日本の、少なくとも『南坂高校』に通う生徒ならば、今週の月曜日に学校が始まることは、避けて通れない道といえるだろう。…なんてことを言ってみたりするが、ただ単に休日が終わって学校が始まっただけの話だ。

教室に入ると、いつもの騒がしい空間が、月曜日だということにさらに実感させてくる。すれ違う人にあいさつをして、いつも通り真ん中の一番後ろの席に腰をつき、かばんを横のフックにかけた。

フウ、とため息をつく。休日があけて学校が始まったから？ 違う。平日というものにも、それなりの楽しみを感じている。学校に歩きで通うという”わずかな運動”をして疲れたから？ それも違う。そんなことは、毎日やっていることだ。いちいちため息をついていられるか。

じゃあなんなんだ、と言われるのは承知の上だ。ただ、今はため息の理由を思い出したいくらいに、その事実には絶望感を抱いているのだ。

ふと右隣の席を見る。そこには、いつもこの時間にはいるはずの静風さんの姿はまだない。彼女がこの時間に来ていないのは珍しいまあ、たまにはそんなこともあるか。なんて軽く受け止めつつも、折角この気分を吹っ飛ばすために、静風さんの癒しオーラでも拝んでおこうと思った俺の陰謀は、もろくも崩れさってしまった。

なんて考えていると現れるのは、青野ナキだ。

朝俺が席に座って一息つくと、かならず黒板を遮るかのように、俺の目の前に立ちふさがる。そして、たぶん喧嘩を売ってきているんだろう、俺にはそうは見えんが。まあいつも結果的には泣きなが

らどこかへ去っていくから気にしない。

だが、今日は違った。ナキの野郎も来ていない。まあ、あいつも一回ぐらい遅れてくることはあるだろう。朝のストレス解消ができないのは、ほんの少しだけ残念だがな。

席についていても暇なだけなので、誰かに昨日のテレビの話題でも吹っかけてみるか。

.....。

静風さんが息を切らしながら入ってきたのは、朝のホームルームが始まる時間の1分前だった。珍しいこともあるもんだ。

時間的にも丁度いいので席に戻ると、静風さんが少し荒い息の間から、

「お、おはよう」

と言ってくれた。

「おはよう。珍しいね、こんな時間に」

まだ呼吸が整っていないときに質問をしては少し迷惑とは思ったが、なにしろ俺の好奇心がそれを上回ってしまったので仕方がない俺の馬鹿。

「え、あ、ちよつと、寝坊しちゃって！」

えへへ、と笑うその朝の一発に癒される俺はアホなのだろうか。

ナキがきたのは本当に担任がくる10秒ほど前。本当にそそっかしいやつだ。まあ、遅刻にはならないからギリギリセーフってやつだが。なんか静風さんがきたときよりも、息が上がっているのはそれだけ急いだということか？

そして、担任がきたということは、俺のため息の理由がおおつぷらに明かされるということだ。ああ、夢であってほしい。嘘であってほしい。

「さーて、朝のホームルームをはじめようと思う」

中央に位置している教卓に立つ担任の、朝の一声でホームルームが始まる。だが、今日だけはいつも通りではないことは、誰よりも先に知っていた俺だった。

「…が、今日は転校生がいる」

ガヤガヤ、とホームルームの5分間限定で静かになっていた教室に人のささやきが集まりはじめ、広がる。

「えーっとじゃあ、入ってきてくれ」

先生の合図のほんの数秒後、ガラガラという擬声や擬音がピツタリな音を立てて、いい具合に古びた引き戸式のドアが開く。ちなみにろろそくをたらすとすべりがよくなるらしい。

先取りしてその姿を見ることができるドアに近い生徒達が、歓声に近い声をあげる。声があがって誰がきたのか気になるのに、その姿が見えない生徒たちは席から立ち上がって、背伸びしたり首を伸ばしたりして、その姿を意地でも見ようとす。

そんな中、俺は一昨日の出来事…、今の気分になった発端から思い出していた。

—*—

家の玄関の前に着く頃には、眠っていたウミナも起きていた。ちなみにあの後、わざわざウミナを担いでにぎやかな街を堂々と歩き、電車で痛い視線を浴びまくり、近所で微笑ましい目で見られて帰ってきた…、なんてことはない。そんなものに耐えることのできる、

いわゆる耐久力ってやつに自信なんてあるわけがないので、俺は片手を上げるだけで止まってくれる便利なタクシーにのって、気軽に家に帰った。少々財布に優しくないが、この際そんなことを気にしてはいられない。

眠そうに目をこすっているウミナを横目に、玄関の鍵を開けて中にはいる。

いつも通り床がタイルばりの玄関に出迎えられる。目の前には、昼間までのそこまで見慣れぬ街の景色とは打って変わって、俺を長年迎え入れてきた数々の家具や、靴などが並んでいた。

だが、そんな中、一つだけ見慣れないものがあつた。

…靴、だ。しかも黒いハイヒール。もちろん俺がはくわけがないし、あのウミナがこんな歩きにくそうなものをはくわけもない。ということとは、俺の知っている人の中で家を自由に出入りできて、ハイヒールをはく人なんて、1人しかいない。

その真相を確かめるべく、靴を脱いで中に入る。もちろん、ウミナもそれに続くが、やはり眠気のせいか動作にどこかノロさを感じる。今戦いを挑めば、倒せるかもしれない。

廊下を歩いてリビングのドアを開ける。中は無音といってもおかしくないほど静かで、人がいるような気配なんてどこにもなかった。台所にも、くつろぎスペースにも誰もいない。ということは、この部屋にはいないのか？

「エン、なんか食べるものはないのか？」

いつの間にか台所に移動したウミナが、冷蔵庫を叩きつつ、眠気と空腹を両立させるという大胆な手を打ってきやがった。やはりこいつはあなどれねえ…。

「少し待ってろ」

「了解だ！」

どこで覚えたんだか知らないが、戦争に行く男達がよくやる”敬礼”ってやつを俺に向かってやってきた。だが、日ごろの俺への行

いとかそういうのを見る限り、こいつが俺に敬意を持って”それをやっているとは到底思えなかった。まあもしかしたら、食事を作る時”だけ”ほんの少しだが、そんな気持ちもあるのかもしれないが。複雑だ。

ウミナは敬礼を勝手にとくと、空腹から気が抜けているのか、それとも普段からだったのか、ドカドカと品のない足音を立てて俺の前を通り過ぎた。行き先はやはり、ソファアー・イン・くつろぎスペースだった。

俺も、とても軽いとはいえない足で台所に入る。正直、今日は疲れたので、買い物には行きたくない。だから冷蔵庫にある残りのものでつくろうと思うんだが、確か残りものなんてほとんどなかったはず…。まあ一応チェックはするが、期待はしないでおう。

冷蔵庫の一番大きい扉を開ける。そこにはガラガラなはずの大きな部屋に牛肉、豚肉など大量の食材が入っていた。まさか、思ってた一番下の野菜室を開けても同じだった。ほうれん草、にんじん、ピーマン、たまねぎ、ねぎ、十分じゃないか！ 買い物に行く必要がない！

まあつまり、ここに誰かが食材を入れたということだ。見てのとおりの俺なわけないし、ウミナが事前にこんな気のきいたことをやるわけではない。ということは、もう1人しかいない。

さて、そろそろ誰か言おうじゃないか。ハイヒールの正体、そして冷蔵庫の補給。誰もが気づいているはずだ。時々しか帰ってこないが、俺前までというから歳ぐらいまで一生懸命育てた人。

そう、母親だ。本当にたまには母親らしいことをしてくれるな。久しぶりに感謝しました。

「エン、どうしたんだ？」

急にテンションが上がって、ガッツポーズとかしている俺を不思議に思ったのか、くつろぎスペースからウミナが座ったまま背を伸ばしてこちらを向いている。

「い、いや、それがさ、あの掃除洗濯などの家事をまったくやって

くれない、ってかやらない母親がさ、冷蔵庫に食材をいれてくれたんだぜ！」

俺はキラキラした目をウミナに向けるが、ウミナは苦い顔をしたあと、

「エン、まあ、がんばれよ」

といって、すぐにテレビへ顔を戻した。

「なんだよ、つまらないな……」

せつかく人がすごい話をしているのに、そんなに興味なさげにすることはないだろ。お前の大好きな、うちの母親ネタだぞ？

「つまらないのは私のほう。エン……、どうなるかわかってるよね？」

……へ？

もしかしたら、いや、もしかなくとも、俺はとても大変なことをしてしまったのかもしれない。そして、後ろを振り返って恐怖を目の当たりにした俺のとれる精一杯のリアクションは限られていた。「あ、や、やべえー！！！」

そういうことか……。ウミナが苦い顔をして、なるべく俺とかかわらないようにしていたのは、母親がドアの付近にきてたのに気づいていたからか……。そんなことより、自分の身の心配だ。くそ、ぬかつたぜ。何されるか想像できねえ。

「とりあえず、夕飯をテーブルに並べなさい。3人分ね」

「は、はい」

今は言葉にしたがつておこう。3人分の夕飯をつくることで、少しでもその怒りを抑えられるなら本望だ。……今の言葉に少しの偽りはあるがな。

せつせと夕食を作る俺は、さしずめ「居酒屋の料理人」並の力を出していただろう。すまん、意味がわからないな。

とりあえず、「母親のおかげでそろった食材」で作った、数々の料理をテーブルに並べる。うん、すごいおいしそうだ。さすが俺、

とか言いたくなかったが、そんなことを言っ得をするとは、1ミクロンも考えられないので、胸の奥底にしまっておこう。ついでに、誰かがこれを引っ張り出してくれることを1ミクロンだけ願っておこうと思う。

俺が席につくときには、もうウミナが今か今かと、「いただきます」のタイミングを見計らっていた。

「えーっと、じゃあいただきますーす」

たぶん、この流れは、俺が言わないいただきますできねーんだよ、みたいなものだと思ったので、とりあえず食事前の一言は俺が言ってみる。すると、二人も続いて、いただきます、と続いた。ちなみに、同じ”いただきます”でも腹の減り具合のせいか、二人比べてもかなり力の入り具合は違ったが。

しばらくご飯を口に運ぶ作業をしていると、母親が口をひらいた。

「エン、それで、さっきのことだけど」

しかも、一番忘れてほしいことだ。

「水に流してあげるから、今からいう提案を素直に聞き入れて、さらに『はい』と元気よく、かつさわやかにいいなさい」

無駄に注文が多いし……。

「わ、わかった」

だが、ここで肯定しないと後がない気がする。

「まあ、簡単なことよ。……」

……。

教室に入ってきた1人の少女は、どこか強気そうで、でもそれに負けないぐらいのビジュアルを持ち合わせている、色々な意味での『超人的な娘』だった。

教卓の隣まで歩いてきた少女は、黒板のほうに振り返ると、かば

んを片手に持ちながらもチョークで黒板に文字を書いてゆく。縦に書かれたその漢字の羅列は、なんとも強情で名づけ親が何を意図したのか知りたくもないものだった。

そして、少女が振り返って教室を見渡す。堂々としていて、人の前に立つということになんの緊張感も持っていない様子だ。――

……

――……。――

――エンは南坂高校に通っていて、その1年2組にいるでしょ」

「え、あ、うん」

母親から出てきた”簡単すぎる質問”に少し戸惑いつつも、俺は素直に答えた。

「それで、そこに――」

俺ははじめのほぼ無意味な会話と、この言葉の始まりに嫌な予感をもちにうつつつも、うなづく。そして、そのうなづきが後に俺を深く、そして長く苦しめることになることは、知るよしもなかった。どちらにせよさけられなかったとは思うが。

「……ウミナを編入させます」

「……へ？」

ニヤリと不敵に笑った、にくたらしいほど整っている顔は、まるで何かをたくらんでいるようだった。というか、何かをたくらんでなければ、こんな結果にはならないだろ――

――……。――

2日経った今でも忘れない。あの黒さに満ちた、邪悪な邪神のよ
うな母親のニヤリ顔。いつでも母親は俺に試練を与えてきたが、今
回はついに日常生活にまで影響のするものを仕掛けてきた。そして
その攻撃を防ぐことも、かわすこともできなかった俺は、首を縦に
振ってうなずくしか道はなかった。

教卓の隣で胸をはっている少女は、俺のほうをチラリと見る。目
が合っても俺は何食わぬ顔で目線をそらす。だが、俺がまた目線を
戻す頃には、それを気にしていなかったような様子で、少女は息を
大きく吸った。

「やまのたにうみな山野谷海奈です！ …どうぞよろしく！！」

山野谷海奈、やまのたにうみな、そうウミナ。あのウミナ。先週
から俺の家に住み着く『居候』。今日からは、俺の平和な空間にや
ってきた『破天荒なクラスメイト』。明日からは…、知らん。

そして、小さな拍手は、次第に集まり大きなものへと変わってゆ
く。最終的には、驚くほどの歓声になっていた。おいおい、ただ転
校生が着ただけだぜ？ というか、いまさら”ふりがな”をつけな
くてもいいだろ。

俺は、みんなが拍手している中、3回ぐらいため息をついて窓の
ほうを向いた。遠くの空が青々と広がっていた。

日常、とはささいなことで変化するものだ。良くなるか、悪くな
るか、そんなのは人それぞれだと思う。感じ方も、なにかも違っ
んだからな。

俺は、今起きている”爆発的な変化”をどうとらえようか。正直

言いか悪いか、なんてどっちかにしろって言われても、答えるのにかなり時間がかかりそうだが、この際、この変化を楽しんでみるのも一つの手なのかもしれない。楽しいならいいことじゃないか。できることならそうしてみようじゃないか。

……。うーん、やっぱり無理かもしれない。

楽しい事件の巻き込まれ方 ―第一部・完―

第18話

ウミナ、光臨。故の完結？（後書き）

はい、というわけで18話でした！

完結です。∴第1部は、ですよ！

物語的は今までどおり、続きます。ただ自分自身、物語的な区切りというものを、わかりやすい形でつけたただけですから（笑）

∴というわけで、次はもしかしたら2、3週間ほど先になってしま
うかもしれませんが、また次回お会いしましょう！

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第19話

シリアスではない（前書き）

今度こそ完結のような終わりがただったが、そんなことはなかった。

第19話

シリアスではない

楽しい事件などという物はこの世に存在するだろうか？

部屋の隅にあるベッドにねっころがって、ふとそんなことを考えてみる。

様々な意見があるだろう。事件というものの解釈の違いによってもそれは大きく変わるはずだ。だが、一つだけ言えることがある。

それは、こんなことを考えている時間があるぐらいならボーっとしないで勉強でもしてろ、ということだ。

さて、楽しい事件があるか、なんて考えることまでもいかずとも、こうしてベッドに寝ころんでボーっとしている俺は、同じぐらい無駄な時間というものを過ごしてしまっているのだろうか。

でもな、俺だって自分を取り巻く環境の変化が大きすぎて混乱している。無駄な時間とか考えている余裕なんて、ないに等しかったんだ。

そう俺の悩みはウミナの急な登場からはじまった。そしてナキの中に入りこんだもう一人の人間、ナコさん。そしてその入り込んだナコさんのわけのわからない暴走と続き、この1週間が濃すぎて、なんだか鬱になりそうだった。

だが、一番の問題は、被害を最も受けているであろう俺が、今まで起きた様々な”事件”と呼ぶべきものの深い事情などほとんど知らないことだ。

なぜウミナが来たのか、なぜナキの中にナコさんが入りこんだのか、そしてウミナを狙う理由。一番新しいものでは、母親がウミナを入学させた理由。これらことはもちろん、俺が知る権利はあるはずなんだが、どういうわけか全く知らない。母親はほとんど家にいないし、ナコさんもいつ顔を出すかタイミングがつかめない。ウミナにいたっては話を聞くのかどうかも疑問だ。

つまり、ほんの一瞬のタイミングを見計らわなければ、俺が自分に置かれている状況を理解することもできないわけだ。

今日だつてそうだ。いきなり転校してきたのはいいが…いやよくないが、いつ手続きしたんだか…。

ウミナが自己紹介をしたあと、他になんの連絡事項もなかったみたいで、すぐに朝のホームルームは終わったんだが、教室はもう大パニックだ。もちろん、ウミナを中心にしてな。

そりゃ、前に一度きたから顔を覚えてるってのもあるだろうが、あれだろうな、あんまり言いたくはないが、ウミナは性格はアレでも外見はなかなか…じゃなくて、とりあえず男子にも女子にも人気が出そうな顔立ちをしているせいもあるだろう。とにかくあの時は驚いたよ。

そんなことを考えてると、コンコンとドアのほうから木を叩く、いわゆるノックの音が聞こえてきた。ついでに――

「エン。エーン。はいるぞー」

という、もはや聞きなれた声も一緒に。あいつはどうやらやつとノックをするという習慣を身につけたらしい。

とりあえず起き上がってドアのほうを見る。そして入ってきたのは、俺の悩みの種、山野谷海奈だ。

着ている衣服は、もはや当たり前となった灰色の上下スウェット。それ自体は問題ではない。だがその持ち主が俺だということは大きな問題だ。ウミナがきたあの日から、俺の部屋着はまるでもともと彼女のものだったかのように、普通に着られつづけ結果的から言えば奪われしまったのだ。

「なんかあったか？」

考え事をしていた俺のテンションは低い。というか家でテンション高くてもおかしい。

「いや、ほら、学校は明日もあるだろ？」

そりゃそうだ。一日おきにあつたらどんなに幸せなことか。

「それでな、明日何を持っていけばいいかわからないのだ……」

ちよつとうつむきながら手をモジモジさせている。それはまるで餌をなくしたリスのようとも言えいいだろうか。…我ながら恥ずかしい例えだ。

とにかく、ウミナにしては珍しくかわいい質問をしてくれたようだ。

「そういうことか。教科書はある？」

「さつき届いた」

あれ、いつ郵便屋さんがきたんだろ。ボーっとしてから気づかなかったのか……？

「じゃあ俺の時間割表が机の上にあるから、それみて適当にそろえな」

「わ、わかった！」

ウミナは少々戸惑った様子で部屋の中を見渡すと、机の上にある時間割を見つけたようで、それを持って出て行ってしまった。

「はあ……」

なんてため息をついていたのもつかの間。

「エン！」

いきなりドアを開けてウミナがはいつてきた。というか、ノックする習慣がついたと思つて関心してたらこれかよ。まだまだ習慣としては身についてはいないようだ。

「なにがなんだかわからん！ だから手伝つてくれ！」

まだまだ俺の一日は終わらないような気がした……。

……………。

ウミナに全ての教科の把握をさせ、何を持っていけばいいか説明し、「お前ならあとはできるよ！」と適当に抜け出すための言葉をはいて、ウミナがそれにガッツポーズで答えるまで30分以上もかった。

となりの部屋から戻るだけなので、階段をのぼらずには済んだことは不幸中の幸いといったところか。とりあえず、今の俺は怠け者と言われても反論はできないかもしれない。

部屋に戻って、手を広げてベッドにダイブする。

しばらくそのまましていると、またノックの音が聞こえてきた。だが、よく聞くとそれはノックとはいくつか異なる点があった。木を叩くような厚みのある音ではなく、もっと薄いものに何かが当たるような高い音だ。それもコン、コン、と一定のゆっくりとしたリズムでぶつかっている。そして最大の違いは、なっている方向がドアではない、ということだ。

ドアからは明らかに聞こえない、むしろ反対側、つまり窓だ。窓から音が聞こえる。たぶん誰かが石かなんかをあてているのだろう。カーテンをあげると、なんとなく薄暗い外に人がいるのがわかった。窓をあげると、人影は投げる動きを止めて、こちらへ近づいてくる。

「な、なんだ？」

近づいてくると顔もしつかりとわかってくるわけ……。あの顔は見覚えがある。いや、見覚えがあるなんてものじゃない。あいつの顔は毎日嫌というほどみている。

毎朝俺の席にきて、何かちょっかいをかけているつもりなんだろうが、反撃されて泣きながらどこかへ去る。そして懲りずに告ぎの朝も同じようにやってくる。そんな変な奴……。そう、青野ナキだ。ナキがなぜこんな夜中にきているんだ。というか、堂々とチャイムを鳴らせよ。

だが一番の疑問は、とてつもなく大げさなジェスチャーをしていることだ。なんだあれは？ 俺の家のドアを、両手を上げつつ指差

して、その後走るポーズみたいなのをやっている。えーっとこれは

……

（玄関のドアをあける、そこまでいくから）

……という解釈でいいのだろうか。とりあえず玄関へ行こう。

ウミナに見つかる厄介なことになる、と直感的に思った俺は、忍び足で下へ降りた。

玄関で靴を履くと、一枚の壁のむこうに人がいるのがわかった。だって、玄関のモザイクガラスの向こう側に見えるんだもの……！

別にこのまま意地悪をしてあげないのもかわいそうだが、やはりウミナに見つかるのは面倒なのでそっとドアを開ける。そして向こう側にいたのはやはり……。

「やーっと気づいてくれたのね？」

ナキ……なのか？ いや待て、違う。この第一声だけでわかる。この不適に笑う意地悪そうな顔。どこか年上っぽい印象を与えられてしまうその余裕そうな態度。これがナキなわけない。ということは

「まさかナコさん……？」

「ったく、当たり前でしょ。ナキがこんな深夜に出歩くわけないじゃない……」

ナコさんはやれやれと言った感じで首を振った。どうでもいいけどあなたサイドにある常識を押し付けないでください……。

「そつえば、表に出てこれたんですか？」

そうだ。ナコさんが表に出てくるには、ナキがなんらかの精神的な強い刺激を受けなければいけないという条件があつたはずだ。そしてそれはナコさん自身が言っていたことから、確かな情報だと疑わずに飲み込んでいた。

「それがね、私自身、強い刺激を受けて出てくるっただけじゃ不自

由すぎるなって思ったの。それでどうにか他に私が出てこれるタイミングってやつを普段から探してたわけ。そして、がんばった結果……！！」

「結果……！？」

勘違いされないように言っておくが、俺のノリがいいんじゃない。結果って言ったところで、俺に相槌をうてと言わんばかりの目で睨みつけてくるナコさんのノリがいいだけだ。

「ナキが寝ている間なら出てこれることがわかりましたー！！」

え、あ、そうか、というかこの時間にきたということはそういうことなのかなー、なんて思ったりして少し察しはついてたんだけど、いや、でもナコさんが睨みつけているこの状況ではなんかリアクションとらないと殴られる！

「わ、わー！　すごい！」

俺がリアクションをとると、ナコさんは目を細めてこちらをどこか疑うかのような目で見つめ……睨みつけてきた。

「なーんかワザと臭い……」

俺の演技力とかもあるけど、あんたがさせたんでしょうが。

「まあ、いいわ」

と、ナコさんは話を続ける。よかった。今は俺のリアクションうんぬんで口論するつもりはないようだ。

「私がここに来た理由はね、あなたと二人きりになる時がいつまで経ってもこないから……」

ナコさんが俺にむかって足を1歩前にだす。胸にドキッと精神的な衝撃が走る。

な……え？　ナコさん……？　これはその、そういうことなんですか？　いやでもほら、上にウミナがいるし、玄関でそういうのは不味いんじゃないですかね。

俺が頭の中で様々な妄想と葛藤して混乱して、表面上では冷や汗をたらだらかいて動けずにいると、ナコさんは右手を後ろにまわしながら口を開いた。

「単刀直入に言うわ」

「は、はい」

ナコさんがじっと俺の目を見つめてくる。その目は全てを見透かしてしまっているようで、絶対に嘘をつけない状況というのはこのことを言うんだな、なんてちよつと納得してしまった。別に嘘をつかなきゃいけないようなことなんて、してはいないんだけだな。「火山エン。あなたはシーサイン——山野谷海奈の協力者？　そして、彼女に起きている状況をどこまで知っているの？」

「え……？」

彼女の放った言葉、それは俺の予想がどれだけ愚かなことだったかを認識させるものだった。そして同時に今、俺の中で一番考えさせられていて、忘れたくもあつた問題を、内側からえぐりだすようなものでもあつた。

「今ウミナに一番近いあなたが、彼女の事情に關与している可能性は、かなり高いっていうのは誰もが考えることでしょ。そして私は、あなたが答える言葉によつては、あなたに何かしらの圧力を与える必要もあるの」

つまり、もし俺がウミナの周りにおきている事情を知っていて、それを知った上で協力するようなことをしていた場合、ナコさんが俺に何かしらの脅しをかけなければいけない、ってところか？

だが――

「悪いけどな、俺は何にも知らない。むしろ俺はその事情とやらを知りたかつたぐらいだ」

何も知らされずにこの状況の中で暮らしている。だがこんなことは慣れっこだ。親の素性も何も知らないで生きてきたわけだし。知ろうとしても、母親は何も教えてくれない。

父親も同じようなものだ。違いといえば、はっきり教えないと言わずにうまくごまかすぐらい。

こういう風に育って、体も頭も成長していくうちにわかったが、必要なことは全て話してくれる。教える時期がきたら教えてくれる。

もちろん、俺はそれに納得するわけではない。だがそれ待つ他にはないのだ。

「それは本当？」

「もちろん」

ナコさんが何かを審査するかのように俺の目を見つめてくる。いや、違う。さっきの勘違いして混乱していた俺ではわからないことが一つわかった。これは真剣な目、何かを試すような目だ。俺が嘘をついているのか、本当にそうじゃないのか。

嘘をついていると思われるとか、そういうことはどうでもよかった。とにかく俺はこの目に負けたくない、なんてことを思ってしまったのだ。

「ふーん」

しばらくそのまましていると、ナコさんは少し安心したように頬を緩めてこの硬直状態を解いた。

「どうやら嘘はついていないみたいね」

どうやらナコさんの天秤は嘘についていないというほうに傾いたようだ。

「いや、それならいいんだけどね」

このまま俺が黙っていればナコさんは何も言わずに帰っていくだろう。だがこのままではダメな気がする。俺はいい加減、説明を待ただけのこのじれったい生活から抜け出したい、そう思っているから。

「ナコさん」

俺から目をそらした目を見つめる。ナコさんはまた俺の目に目線を戻した。

「俺は周りにおきていることを、自分が関係していることを、教えてもらうまで待つだけの自分はもう嫌なんです」

しっかりと俺の意思を伝える。ナコさんは俺の真剣な表情で察してくれたのか、口もはさまずにしっかりと聞いてくれている。

「だからこれは、俺が自分の意志で真実を知ることのできる、絶好

のチャンスだと思いませんか？」

このときの俺はたぶん少し笑っていただろう。何かを企むような、そんな目をしていただろう。

ナコさんはまたさっきのように俺のことを見ている。

だがさっきのとは少し違う。何が違うとか具体的なことはいえな
いけど、疑いの目ではないというか、とにかくさっきのような変な
対抗心は沸かなかった。

またしばらくそのまましていると、ナコさんはニツと無邪気に笑っ
た。さっきの安心からくる笑いではなく、たぶん面白いものを見た
ときの笑いと似たようなものだろう。

「いい心がけだ。いやー、本当にいい目になったわね。火山エン君」
その言葉に少し懐かしさを覚え、ほんの少しだけ——いやかなり
不審に思いつつも、今回は今起きていることを聞くために黙ってい
ることにした。

第19話

シリアスではない（後書き）

大幅に更新が遅れました。すいません。

やはりどうしても不定期になってしまいますね…。どうにか定期的にやっつけていこうと思っているので、これからもよろしく願います。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第20話

知らぬが仏って知ってる？—前編—（前書き）

窓が割れなくてよかった、なんて思ってみる。
ひよっこりと小心者な自分が顔を出した。

第20話

知らぬが仏って知ってる？―前編―

外へでましよう、と俺の後ろ――つまり家の中伺いながら言ったナコさんの気持ちは俺にもよくわかる。

長い間はなしていれば、ウミナが気づかないはずがない。だからそれは避けるべきだ。……ということなのだろう。

なにせ、俺自身この状況をウミナが見たときの反応を想像するだけでも、億劫な気分になってくるしな。

『なんだお前は！』といきなり戦意むき出しの挨拶まがいのシヤウトをして、『……あ、お前は……！　やはりねらってきたな……！』なんて失礼にもナコさんのことを指差して叫んで、『まだわかってないようだな。ならばここで私の恐ろしさを思い知れ！』などといったいつつ飛び掛るに違いない。

その時、俺はどうする？　まさか指をくわえて見てるわけにもいかないしな。つまり、そういうことだ。

まあ本当にこうなるかは別として、これぐらい面倒な展開になってもおかしくはない。

そういうわけで、本当はリビングでゆったりしながらナコさんの話を聞いていたものだったんだが、仕方ないので玄関の外で声のボリュームを下げつつ会話することにした。

「それで、ナコさんはどこまで話してくれるんですか？」

俺だつて全てが聞けるなんて思っではいなかった。変に期待しないほうがいいはずだし、何よりこの状況で全て聞けるほうがおかしいとも思ってしまったからだ。

「……わかつているじゃないの」

ナコさんが不適な笑みを浮かべる。なんでだろう、この後ろくなこと教えてもらえる気がしない。

「じゃあなんでこんなことになったか、ってことから話したほうがいいのかしら？」

「こんなことに……ってナキの体に入ってしまったことですか？」
「その通り」

ナコさんはニヤリと笑って俺を指差す。
聞きたかったことがついに聞けることに俺は興奮を隠しきれなかった。

ナコさんは一息つくと、その話の重要さをあらわすかのように重々しい雰囲気がかもし出した。

「それでこの体に入ってしまった原因っていうのが、私の仕事……なのよね」

「仕事……？ ……ハッ！ まさか！！ いやでもそんなことは……！」

その、こんな雰囲気の中仕事の名前を使わず——つまり名前を隠したい仕事とは……、手や口を使って男に奉仕したり、ときには自分の体を全て捧げて——

「あのね、考えてること、バレバレよ？ この変態が」

俺は妄想のせいで自分の顔が熱くなっていることに気づき、思わず「え、えへっ！」と自分の頭を叩いてごまかしてみた。

「いや、ごまかせてないから」

「ですよー」

とにかく、とナコさんがあきれた様子で咳払いをする。

「その私の仕事っていうのが……その説明しづらいんだけど、なんというか」

「ご奉仕？」

「違うっつの！！」

ナコさんのするどいチョップが容赦なく俺をとがめた。

「まあほら、機動隊ばっかの警察みたいなものよ。ちょっと……いや結構違うけど」

機動隊ばっかの警察……？ 犯罪者を捕まえたり、犯罪者を拘束したり、犯罪者を動けなくしたり、……ってこれ全部同じ意味じゃないか。

俺が頭に”？マーク”を浮かべてもおかしくない顔をしていると、それに気づいたナコさんはすかさずフォローした。

「えーっとね…。金に敏感な警察ってところかしら？」

いやでも警察も十分——ゴホンゴホン、これ以上言ったら俺の身が危ない。というか全然言葉を補えてない気がするんですけど。

「なんというか、なんとなくわかったようでわからないようにわからない。というか全くわからない」

「わからなくてよし。とりあえず極秘に依頼された人を捕まえたりするの。それだけ覚えておきなさい」

それただの誘拐じゃないっすか、という本音は隠しておくことにした。

「それで、その仕事中に何が起こったんですか？」

はつきり言ってこの超展開についていけないが、ナコさんの目が本気な以上嘘はついていない…。かなー、とりたいので、あまり深く考えずに聞き入れるのが一番だと思った。

「そうね……。始まりは彼女の、シーサインの逃亡から始まったの」
シーサイン、俺にはあまりなじみのないウミナの”もう一つの名前”だ。まああいつにとっては山野谷海奈という名前のほうが”もう一つの名前”っていう感覚だろうとは思っけだな。

そしてナコさんはウミナをこの名前でしか呼ばない。この人にとつては、この名前のほうが呼びなれているのだろう。

「ウミナはある村に住んでいて、ある理由で日本に逃亡してきた」
俺は”ある、ある”だらけのその話の冒頭に嫌気がさしたが、折角のチャンスを無駄にしたくないので黙っていた。

「20名ほどがシーサイン捕獲のために派遣されて、わたしもさすがに多すぎだとは思ってたわ。でも私はそれにかかわっていなかったから、とりあえず知らん顔してたの。だけど緊急事態が起きたわ」

「緊急事態…？」

辺りの空気が冷たく、張り詰めたものへと変わっていく。このあと何ができるんだ、と不安になる。

ナコさんは何かためらうように口を閉じたが、ここまできて言わないのはさすがにまずいと思ったのか、少し間を置きつつも話し始めた。

「派遣された20名が全員、シーサインによって倒された」

俺は一瞬唖然とした。いくらウミナの力が超人的に強いとはいえ、それ仕事としている人間20人相手に切り抜けるなんてありえない。……今までもありえない続きだったけど。

いやでも、今回の”ありえない”は少し桁が違っただろ。

「そしてその連絡はすぐに私にきたわ。もっとも、私もその30秒後にはその仕事に参加することになったけれど」

ナコさんはそのときの気持ちを思い出したのか、ため息をついてから話を続けた。

「目的地についた私はすぐにシーサインを相手にすることになった。でも、勝負は一瞬でついてしまったわ」

一瞬で勝負がついた。それはウミナがプロ20人相手に戦い、そして勝ったことを知っていればうなずける。

「確かにそのとき私にも色々失態はあった。でも私はシーサインが戦った20人の誰にも負ける自信はなかった。それぐらいの力は持つてるつもりだった」

ナコさんは手が白くなるほど力を入れた。それは負けた悔しさと同時に、いかにナコさんが強い人であったかをあらわすものでもあった。

「まあ言い訳はよくないわね……」

ナコさんが苦いものを食べたような顔をして無理やり笑う。無造作に頭をかくのは俺にはわからない何かをごまかすためなのだろうか。

「そして、たぶんそのときに私の意識はナキの体へと飛んだのだと思う」

だがその言葉はいくらなんでも不意打ちだった。

「それでそのあとナキの中から――」

ナコさんは道端の小石を蹴るかのごとく次の話に移りはじめる。

「ちよ、待った待った待つむぐう!？」

俺の三言目の待ったで口をふさがれた。しかもなんか無駄にふさぐ力が強くて取れない!

「タイム、アンド、ストップ」

ナコさん、それ、両方同じ意味!!

「オーケー?」

こてこてのジャパニーズ英語を話すナコさんを一瞬あざ笑いたくなつたが、そんなことをするとこのまま鼻までふさがれて窒息死しそうなので、右手でグッド・イルさせる。――つまりグーにして親指を立てた。

「あのね、なんでわざわざこんなところで立ち話してるかわかってる?」

ナコさんはたぶん内心「馬鹿ですか?」ぐらいの言葉は付け加えてあると言つてもいいだろう。

「むむむーむ、むぐぐーぐぐ」

「その状態で喋ろうとする根性は認めるわ」

ナコさんが俺の口から手を離れた。もちろん俺はすぐに「ぷはあ!」と必死に空気を肺に入れたが。

「すいません、すごく重要なことを自然に流されたのでつい突っ込みたくなりました」

昨日の夕方見た不祥事を起こした会社の社長のマネをする。少し似ていないところは頭を下げたときに見苦しいハゲ頭がのぞかないことだ。

「わかればいい。頭をあげなさい」

顔を上げると、丁度ナコさんがため息をつくところだった。さつきからため息ばかりついて、幸せが逃げますよ?

「それで、ナコさんは今重要なことを流して次の話へ行こうとしたんですけど、あれは狙ったんですか? それとも天然ですか?」

俺は狙ったという答えはわかっていながらも、悪あがきすると

う意味でもからかつてみる。

だが予想外にもナコさんは天然、という言葉の直後に少し顔が引きつった。そして、そのあとの表情は笑顔に見えなくもないが、明らかにどこからか怒りという蒸気もれているような気がした。

「ね、狙ったに決まってるでしょ」

「ならいいんですけどね、ある意味”天然”だったらビックリですよ」

さっきよりも天然という部分を強調して言ってみる。するとまた……いやさっき以上に天然という単語で顔が引きつる。

これはもしかしたら、もしかするかもしれない……！　というかもしそうなら、すごいいいネタにならないか……！？

俺は妙に楽しくなってきた、思わず口を開いた。

「もしかしてナコさん、本当は天然——」

なんでだろう、そこで俺の意識は飛んだ。

第20話

知らぬが仏って知ってる？―前編―（後書き）

お久しぶりです！　そしてすいません！（謝ってばかりですいませんん！）

後編はほぼできているので、進み具合にもよりますが、近いうちに投稿できるかと思っています。

不定期な更新になってしまいう小説で申し訳ないのですが、これからもがんばります。よろしく願います。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第21話

知らぬが仏って知ってる？―後編―（前書き）

また気絶をした。

病院へ行ったほうがいいのだろうか。

第21話

知らぬが仏って知ってる？―後編―

気がつく俺は空を見上げていた。

いや、違う。これは倒れているだけだ。

うめき声に似たものをあげて起きる。視線を上によけると、ナコさんが腕を組んで俺を睨みつけていた。立ち上がるとさっきと同じ景色にもどる。

「あの、俺、なんか倒れていませんでした？」

「とりあえず30秒で起き上がったことには拍手を送ってあげるわ」
つまり倒れていたという答えていいんですね。しかも原因は天然かと聞いただけです。

……そうだ、学習しようじゃないか。俺はもうこの人の前では二度と天然という単語を口にしない。絶対にしない。

「それで、ナキの体に入ってしまった辺りを詳しく聞きたいんですけど」

正直、天然疑惑を忘られる自信はないが、今俺がここにいる意味と、それを聞くためにいかに危険なことをしているか思い出したおかげで違う話題にうつれた。

そして、さっきまでの話題を一時的に忘れようとしている今、ナコさんに聞きたいことベスト1はこれしかない。この事態が俺の常識を大体覆したのだから。

大体という言葉を使ったのは、ウミナという名の超人が俺と暮らしているからだということ言うまでもない。

「それが……」

ナコさんの顔はイラつきから戸惑いに変わった。

「気づいたらナキの中にいて、なんていったらいいんだろう」

珍しくナコさんが目を泳がせてなんだかおどおどしている。たぶんすぐには説明できないようなものなのだろう。

「『ああ、私はここにいるんだ』って思ってた……。なぜか状況が理

解できたの」

なぜか、とはナコさんの感覚だけの世界だということなのだろうか。だとすると俺にはさっぱりってことじゃないか？

ならば、俺が俺のために理解するために聞くしかない。

「その状況とやらはどこまで理解できたんですか？」

「どこまでね……」

ナコさんは考えたこともなかったのか、顎に手を添えて探偵が事件を推理するかのような姿勢で、片隅にあるでだろう記憶をさぐっている。

「なんとなく、だけど……」

俺の知っているナコさんじゃないかのような弱気な声のトーンと発言だったが、これをからかう気にはなれなかった。

「ナキに入ってどうなったら私が体を動かせるとか、そういう本当に自分自身の感覚的なものまでしか理解できてない気がするわ……」

「それって……、今自分の本当の体がどうなってるのかもわからないじゃないですか!？」

もしだ、もしナコさんの体がこの世から消えていたとしたら、それは知るにはあまりにも残酷な結果だ。

自分の意識はある。でも帰るべき本当の体はない。俺がその状況だったら消えてなくなりたいと切に思うだろう。

「あ、私の体自体は近くの病院にあるみたいだからとりあえずは無事よ。まあもちろん意識不明状態だけどね」

俺はポカーンと、何かが抜けたようななさけない顔をしていただろう。でもこの辻斬りのような話を聞いたことへの驚きの前では、そんな自分の外見のことなど二の次になってしまふのだった

そんな俺の顔から状況を感じ取ったのか、ナコさんはまたさっきのように戸惑い、そしてかわいらしい様子になる。

「え、あ、えつと……、ナキと私は姉弟だから、ナキが私のお見舞いにいったときに自分の体がどうなってるかは知ることができたんだけれど……、言ってなかったっけ？」

「また……っすか……」

「え、あ、あれ、言ってなかったっけ!？」

「やっぱりナコさんって天然なんじゃ——ぐぶう」

そのとき視界がぶれた。そして頬に何か硬いものがあたった。それがナコさんの拳だということは言わなくてもわかってくれるとありがたい。

痛みで思い出した。二度とさっき言わないと決意したばかりじゃないか……。とりあえずナコさんがうるたえていたおかげで、気絶はしなくてすんだのが不幸中の幸いかもしれない。

しかしそんな俺の安心はつかの前、ナコさんは俺の肩を服が伸びてもおかしくないぐらいの力でつかんだ。

「わ、私は天然じゃないわ!! 大体天然の定義ってなによ! 何をもってして天然なの!？」

そしてそのまま俺の体がばらばらになるんじゃないかと心配になるほどゆさぶる。

「ううううっそ、で、でーす!! じ、じじじようだん、で、でーす!!」

ナコさんの残像のようなものを見ながら、現在進行形で自分の身の安否が気になっている俺にはこんな言葉が精一杯だった。

その言葉はなんとか命のカウンtdownとナコさんの攻撃のようなものを止めることができたようだ。

「ハアハアハア……、それなら……、いいんだけど……」

ナコさんは予想以上に体力と精神力を使ったらしく、肩で息をしていた。俺もつられたわけではないが肩で息をする。ついでに服の乱れも直した。

「それで、えーっと、どこまで話進みましたっけ？」

その時だった。

「待って」

ナコさんの顔が180度変わる。刀を鞘から抜いたように、遊びから仕事へとスイッチが切り替わったように。

鋭さを感じさせるその顔からは、さっきまでの切れ味の悪いナコさんが想像できなかった。

「どうかしたんですか？」

だが状況の理解できない俺は、緊張感のない顔でひょうきんな言葉を返すので精一杯だ。

混乱している俺をよそに、ナコさんは無言で暗闇へ消えていった。そのとき、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「エーン！！ エーン！！？」

俺は自然とその方向を向いた。

小さい声が俺の耳へと届くが、声の主——ウミナは家の中から声を出しているわけで、俺の住んでいる家は壁が薄いわけでもないのに、ウミナの声は馬鹿でかいということになるわけだ。

なんてことを考えていると、すぐに玄関のドアがあいた。そこには、明日の教科書やらをかばんに詰め込み終わったはずのウミナが立っていた。

「エン、見—つけた。こんなところで何してるんだ？」

かくれんぼ気分だったのか、ウミナは無垢な瞳で俺を見つめる。

まさかナコさんと話していたなどといえるわけもないので、適当な言い訳をいわずにはいけないわけだが……。

「あれだ、郵便受けを見にきたんだ」

「そうか」

我ながら少し苦しい言い訳かと思ったが、案外疑われることもなく納得された。

「嫌な予感がしたんだが、私の考えすぎだったみたいだな」

ウミナはテレたように笑って見せたが、苦笑いしながらも俺にはその笑みが恐ろしくて仕方なかった。予想当たってますよ！ といいたかった。

「まあお前は居間でテレビでもみてる、母親への郵便物が多くて時間かかりそうだ」

「全部持っていけばいいではないか」

「いや、ほら、母親は几帳面だから、ここに置いておかないと怒られるんだ」

「そう、なのか」

苦し紛れに言った言葉は、なんとかウミナに通じたようだ。少し不審に思っているかもしれないが、大丈夫。今だけ切り抜ければいいんだ。フオーならあとでいくらでもできる……はずだ。

「じゃあ終わったらエンも居間にくるのだぞ」

「あ、ああ」

ウミナは俺に釘を刺すように俺を指差したが、今それに対して「人を指差すんじゃない！」と注意する余裕すらない。バレるかバレないか、それだけだ。

再び玄関の扉が開き、閉まった。

辺りがシンと静まりかえる。当たり前だ。どの人間も外でわいわいする時間は終わっているわけだからな。

「行つたみたいね……」

振り返るとナコさんが俺の後ろを警戒しながら現れた。そのとき、安心感から体に入っていた力が抜けた。

「シーサイン、やっぱり侮れないわね」

「そんなこと一緒に住んでいる俺が一番わかってますよ……」

俺がそう言つて見せると、ナコさんはふふつ、と笑う。

「そうだったわね。これは失礼しました」

俺も一緒に笑顔になる。

ナコさんがこんなに魅力のある笑顔をするなんて思つてもいなかった。これは完全なる不意打ちだ。

胸の鼓動が速いままなのは、さっきまでの緊張が解けていないからなのだろう。うん、きつとそうだ。でもこの笑顔としばらく一緒に笑いあっていたい、なんて考えられずにはいられない自分がいたりもする。

そしてそんな馬鹿なことを考えている自分に苦笑するしかないのであつた。

第21話

知らぬが仏って知ってる？―後編―（後書き）

はい、というわけで終了です！

本当は前編・後編とわけずに投稿しようと思っていたのですが、書いている途中「意外と長いなあ」なんて思ってしまったので分けてみました。

それでは、また次回！

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第22話

測定不能は認めません―エン×ウミナ編―（前書き）

世の中には知らなくてもいいことが沢山あるんだって、初めて知りました。

第22話

測定不能は認めません―エン×ウミナ編―

そのあとと言えば、ナコさんとのんびり世間話などしている暇などなく、すぐに解散となつてしまった。

結局ナコさんがウミナに抱く感情は自分や仲間がやられたことへの悔しさなのか、それとも本当は別に理由があるのか、そのあたりはよくわからなかった。

だがナコさんもまだ話足りなかったのか、「来週の土曜日は空けておきなさい」と次会う約束を言つて帰つた。別にどうせ暇だろうから空けておくことに關しては問題ないんだけど、ナコさん自身は来れるのだろうか。

待ち合わせとかはなんとかなる気がする。だがナキという存在がある以上ナコさんの行動はかなり制限されるはずだろうし、昨日みたいに夜中にわざわざ来るぐらいだ。昼に活動できるなんて到底思えない。

となると、夜……なのか？

夜に二人きり、というシチュエーションに少し顔の火照りを感じたが、よくよく考えると話すことはわかりきつていたので無駄に落ち込んだ。考えるんじゃなかったな……。

とりあえずその話は今は考えたくは――いや考える必要はない！カーテンの隙間から光が差し込んでいる。雀が外で鳴いているのが聞こえる。そう、朝なのだ。

色々と考えていたらいつの間にか眠つていて、それでも足りないからこうして目を開けたあととも思ひ出していたというわけなのだ。まあなんにせよ貴重な時間はどんどん過ぎていく。ベットの上でボーっとしている時間などない。――なんてくだらないこと考えてないでさっさと下へ降りるか。

リビングのドアを開けると、そこには予想通りの静かな空間が広がっていた。この静かな空間こそ俺の本当のあるべき日常ってやつだな、としみじみ思う。

とりあえず冷蔵庫に昨日の残りものがあるからそれを適当に食べるか……、なんてことを考えながら冷蔵庫をあける。

「げっ……」

俺はそう声をあげざるを得なかった。

「よっ！」

元気よく声を上げた超人は、冷蔵庫のなかに体育座りをしている。大体この状況で「よっ！」はねえだろ……。

「なにをしているのかな？」

「いやー、エンを驚かそうとおもってだな」

ウミナは「どいてくれ」と言いかけていた言葉をきって冷蔵庫から飛び降りる。

驚かせるにしてももつとこう、なあ？　かわいげのある方法なんて少し頭をひねればいくらでも出てくると思うが……。

「まあ、成功だ」

立ち上がり俺ににんまりとまんべんの笑みを見せる。くそう……、ほんのちよつとだけ、かわいい。そのピースが憎いぜ……。

「でもさ、俺がもし冷蔵庫を開けずに学校にいたりしてたらどうしてたんだ？　それはそれで寂しくないか？」

冷蔵庫に遊びで入って出られなくなる、という事故をごくたまに聞いたりするが、こいつの場合中に入ったからといって出られなくはないことも、万が一出られなくても死ぬことはないことも俺はわかっている。だからこそこんな能天気な質問が浮かぶのだ。

「さあ……」

考えてなかったのかよ、とあきれて発言しようとしたが――

「でもエンなら気づいてくれるって信じてたぞ」

なんて言葉を冷たい手で俺の腕をつかみながらいつてくるんだから、言うタイミングなんてものは完全に逃してしまった。

「と、とりあえず朝食の準備するから座つてろ！」

とりあえず俺は、先ほどよりも顔が熱くなる感覚を感じつつも、ウミナの目を見れない自分に戸惑うことしかできないのであった。

気づけば朝食は終わり、あとは靴をはいて外へ出るだけというところまで俺の朝は順調に進んでいた。朝食のときに飯に集中できなかったことを除けば。

玄関で座つて靴をはいていると、後ろからウミナの走る音がきこえてきた。

「エン、まだゆっくりしててもいい時間じゃないか？」

「いや、ほら、なんとなく早く出たくなって……」

俺は目の前の作業に集中するようにしていた。

「そうか、今日は『たいりよくそくてい』とやらがあるしな！」

「……え？」

不覚だった。

「昨日もらつた予定表に書いてあつたぞ？」

ウミナは「まったくせっかく教科書をかばんに入れたというのにやり直したんだぞ……」とつぶやくと、俺の隣に座つて靴を履き始めた。俺はバックの中を確認する。もちろんそこには体操着なんてものは入っていない。いつも通り今日持っていく教科書だけが薄暗いバックの中に入っていた。

「ウミナ」

ウミナが「ん？」と言つてこちらを向く。俺はそれに目を合わせずに、

「先に行つてくれ」

ウミナはたぶん驚いた——いや気づいて呆れたか？ とにかく俺はいくつかの理由でウミナの表情を見ることができずに2階へ走りだした。

教室に着くと女子の姿はなく、既に男子更衣室と化していた。

朝からナコさんの件について悶々としたり、ウミナに精神的な意味で心臓をやられていた俺にとって、それはほっとする空間と感じるものでもあった。

「おっはよっ、エン君！」

「うわあ!？」

ナキの突然の登場に思わず声を出して後ずさる。な、なんだこいつはいつから地面から出てくる技を身に着けたんだ？

「ふふふふ」

服を見ると既に着替え終わっているようだが、どうしたんだ、こいつは？ 不気味に笑ったりして朝からなんか悪いもんでも食ったのか。

「ついにエン君に勝ったよ……。朝イチでの勝利をつかんだよ……。これでコンプリートだ！」

「いや、まて、今の一連の行動のどこで勝利したのか聞きたい」

だいたいコンプリートって今までこいつに負けた記憶なんてこれっぽっちもないんだが。……というかこんなに構ってないで早く着替えないといけないと。

とりあえず目をつぶって悦に浸っているナキを忘れることにして、道端の石ころを蹴るように通り過ぎた。

「ボクは毎朝勝負をかけていたのさ……。ってエン君がいない!？」

さーて着替えて着替え。

俺は体育着をとりだしてかばんを置くと、周りの男共に遅れは取れまいとすぐに制服を脱いだ。何か足音が聞こえてくるが、今の俺にそれを確認する余裕もユーモアもない。

「人の話をきけー! ってそんな、脱ぐなんて……。卑怯者っ!」

ナキは口を噛んで、赤らめている顔を両手で覆う。……が、それはかなりゆる〜く覆っていた。つまり――

「なーにが卑怯だ。ってかおい、何隙間からチラチラみてんだよ」

「み、みてない……！　みてないみてないみてない……！」

どろどろになるまで熱した鉄ほど赤くなったナキは、顔をゆるく覆ったままだこかへ駆け出していつてしまった。

「つか、男子同士で何やってんだか……」

「火山エン」

殺気の籠った凶太い声。

俺は警戒心を持ってその方向を向くと、全ての者を握りつぶせそうな大きな手、そしてどんな攻撃も跳ね返してしまいそうな鍛え上げられた太ましい腹、とりあえず全体的にでかい——そう、巨漢軍隊がそこにいた。つかか久々の登場ですね、おい。

「……なんだ？」

何かくる、そう感じ取った俺は修飾もなにもない無難な返事をした。

「ナキたんを泣かしたな……」

そら、きた。と戦闘態勢に入る。つかかそのトーンで『たん』とかいうと緊張感が薄れるからやめてくれ。

「ちよつと……、いや、だいぶ……、……かわいかったな」

「……は、はあ」

結局やつらの隊長のようなやつが気持ち悪いことを言っただけで、戦闘することも奴らが俺を捕獲しようとするもなく、どこか（たぶんのナキのところだろうが）へ行ってしまった。どうやら戦闘態勢に入っていたのは俺だけだったようだ。

ちなみにその時の俺はというと、軍隊がそろそろどこかへ行くのを呆然と見ているだけで、着替え終わったクラスメイトに「お前、最近大変だな……」と哀れみにみちた目で同情されるまで、今の時間の大切さに気づきもしなかった。

——結果、出遅れてこうして1人で校内を走っているわけなんですよねー！

ほんの数分前までにぎやかだった下駄箱につく。

そこには挨拶を交わしあう生徒も、生徒からの挨拶を期待する教師もない。ただ1人、体育着をきた少女が棒のように立ち、外を見つめているだけだった。

……ん？ まて、あの後ろ姿……。

「おい、ウミナ……？」

少女がくりりと振り返る。それは手入れしているのか元から持っている素質^{もの}なのかはよくわからないが、一つに束ねている髪は綺麗な円を描いた。

「なんだ、エンか」

ニコリと笑うと、俺に歩み寄ってくる。後ろから差し込む光に少し目を細めた。

「遅刻だぞ」

俺はそう発言すると、光から目をそらして靴を履きはじめる。ウミナは俺の言葉を聞いて焦る様子もなく、後ろで手を組んでニコニコしている。

「そうだ、ウミナ」

久しぶりにウミナの顔を見たような気がした。

「ん？ どうした？」

だから顔を覗き込むなって……！

「お前、体力測定で本気出しちゃだめだぞ」

「なぜだ？ 『たいりよくそくてい』とやらは己の持っている力を数字に表すためにあるものだろ。そんなものに手加減するなど、私はできない」

まあ確かに、この体力測定というイベントは転校生でもあり、一般人を大きく超える力を持つ『山野谷海奈』のためにあるようなものだ。そしてこいつの性格からして、手を抜くなどという行為がいかに自分のプライドを傷つける行為かはわかる。

しかし――

「これで次々と新記録をたたき出してみろ、その噂はきつと全校に

伝わるだろう」

ウミナはぱーんと口をあけて俺を見ている。

「何が悪いのだ？」

「転校初日に何されたか覚えているか？」

この学校は他よりも少しだけ部活動が活発で——いや、細かくと言つと部活動自体が、というわけではないのだが、とにかく1年はその活発なものの犠牲になるのが恒例らしいのだ。

まあつまり、新しく学校へきた者は部活に勧誘されるのだ。すごく……な。

「あー、なんか色々と誘われたな。鬱陶しかったぞ」

まあ文化祭やその他の行事で部活対抗でやるイベントがあるらしく、それも大きな原因となっているんだと思う。これが細かく言う違う、と言つた理由だ。

ちなみにこれは学校説明会で話されたことなので、入学を希望する生徒は大体どこかしらの部活に入れられることを覚悟している。

俺？ 俺はこれでも軽音楽部に入ってる。俗に言う幽霊部員つてやつになってしまったけどな。

「噂はその誘つてきたやつの耳にも入る。その意味がわかるな？」
つまり、初日以上の勧誘地獄が待つてるってわけだ。想像しただけでも身震いするぜ。

「……う、うむ。し、仕方ない、手加減してやろう」

さすがのウミナも、これを聞いてもなお本気でいききたいなどとは思わないようだ。

「わかったみたいだな。じゃあいくぞ」

急いで校庭にいかないと行けないことを思い出した俺は、速歩きで外を目指した。

「私もハンデをおうんだ。もちろんエンにもハンデをおつてもらわないと私の気がすまんな……」

「ん？」

その声と共に背中に、おそらくウミナの指が当たる。何か、体か

ら力が抜けたような……。

「エン、お先」

——って考えている暇はない。俺はいつの間にか遠くにいったウミナの後を追った。

その時の俺は違和感など気にしちやいなかった。いや、できなかったのだ。

第22話

測定不能は認めません―エン×ウミナ編―（後書き）

【次回予告】

測定不能、この事態を避けるべくエンは立ち上がった……。そしてすぐによろけた……。

ウミナは本当に手加減するのか、いや、できるのか。それはウミナにしかわからない……。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

第23話

測定不能は認めません―エン×ナキ?編―(前書き)

ついに体力測定が始まった。体に異変がある気がするが、そんなことを気にしている余裕などなく……。そんな日々。

第23話

測定不能は認めません―エン×ナキ? 編―

校庭が見えてくる。遅れてきた俺に、座っている生徒たちの目線が集まり、入りづらさを感じた。そしてその生徒たちの目線の先にいる体育教師が叫ぶ声を聞く限り、すでに説明は始まっているようだ。

俺とウミナの足音に気づいた体育教師がこちらを向く。

「早く並べ」

その言葉に反応して、体制を低くして列の中に入った俺とは対照的に、ウミナは堂々とそしてゆっくりと俺に続いて列に入った。というかウミナは少しぐらい申し訳ないという気持ちを持ってよ……。

「えーっと、そういうわけだ。今日は4種目やる」

話の経緯は全くわからないが、体力測定というイベントは4種目の競技をやれば終わる、ということだけわかった。全学年一斉に行なう大きな行事だ。張り切っていくか。

「この学年はまず100m走からだ。そして懸垂、腹筋、持久走の順で行なっていく」

最後に持久走がきてる辺りつらいな。どうやら彼らは1年は今年入ってきたばかりでうかれているだろうから、疲れきったところだとどめをさしてやるぐらいの気でいるらしい。俺の勝手な妄想が90%を占めてるけど。

「じゃあ早速100m走を始める。各クラスの1番はスタートラインに並べ」

「やつぱり1番からかよ」や「緊張するー」などと言った声がさざまみのように広がる中、体育教師はその右肩上がりのヴォリュームにあわせるように大声で、

「1組が一番内側、あとは順に並んでいけ!」

とフェードインした。クレシエンドでもあった。

声に背中を押された生徒たちが小走りで校庭のやや端に書いてあ

るスタートラインまでいく。

そういえば準備体操とかないのだろうか……、などと考えていると、俺と同じことを考えている人間がいたのか、俺が口を開く前に質問してくれた。

「先生、準備運動などはしないんですか？」

声の主である女生徒は赤ぶちの横に長い眼鏡をかけて、肩ほどまであるであろう髪を後ろで結んでいた。どんな規律も守っていることを証明できるかのような目はいかにも”優等生”とか”委員長”というあだ名が似合いそうな感じだ。

「そんなものは休み時間中に済ませておけ！」

しかし体育教師は体も顔も目も正面を向いたまま、女生徒のことを見向きもせずに一喝する。その大声に意表をつかれた何人かが反応した。だが俺が驚いたのはそこではない。

そんな一言にも眼鏡の女生徒はすぐむ様子もなく、また怒った様子も見せなかったのだ。むしろ文句を垂れているのは周りの人間のほうだ。

「すいません。しかしこのまま走り、万が一怪我をした場合、体力測定 of 進行に支障を出してしまうかと思えます。ですから待ち時間中に準備体操をしてもよろしいでしょうか？」

反撃。俺は眼鏡の女生徒の言葉をそう受け取った。

もちろん彼女にそのつもりがあるかどうかなどは、確かめなければわからないことだし、もっとも確かめるつもりはない。だがそう考えたほうが、こちらとしても見ていて面白い。

「……いいだろう」

少しの間のあと、体育教師はまたも正面を向いたままそう喋った。いや、つぶやいたといったほうがいいのだろうか。

そしてめがねの女生徒は無言で立ち上がると、数人に注目されながらも列から出て体操を始める。それを見たほかの生徒たちも、ぽつぽつと立ち上がり体操を始める。それと比例するかのように話し声が大きくなっていった。

そう、その光景はまるで彼女を筆頭に自由を勝ち取るように見えてしまうほどだ。——と言ってみて少し大袈裟な発言だと気づき恥ずかしくなった。

「エン、エーン」

背後からの声に振り向くと、やはりウミナがそこにいた。

「あの女、何者だ？」

珍しくウミナは顔をしかめている。

「わからん。俺も他クラスのことはよく知らないし、今日初めて知った」

ウミナが気にするということは、何か特別なものがあるということなのだろうか。

「ほう……。まあいい。これからどういう者なのか見極めていくでしょう……。ふふ、ふふふふ」

ウミナさん、目が怖いですよー。目だけ笑ってないですよー。

とりあえず立ち上がる生徒に便乗して準備体操をしよう。出席番号、もとい名前順ならすぐに順番がまわってくるだろうし。

「ウミナ、俺らも体操するぞ」

立ち上がってウミナを促す。

「私はいい。体操したら本気だせるようになってしまっ」

「……あっそ」

本人に悪気はないんだろうが、聞く人が聞いたら嫌味にしか聞こえねーぞ。俺はなんとも思わないけどな、たぶん。

「じゃあ俺は適当にやとくわ。じゃあな」

正直少し安心した。なんで安心したかはわからないが、あいつの近くにいたら何に巻き込まれるかわかったもんじゃないし……。うん、そいうことだろう。

そして、すぐに出番はきた。

はつきり言おう。俺は少し走ることは自信がある。小さな頃から身の回りの家事やら母親のパシリやら母親のいじめを処理してきたおかげで（せいで）、運動神経が他人よりはいい。

これだけ聞けばただの自信過剰な野郎にしか見えないだろうが、一応入学当初に運動部——特に陸上部から熱烈な勧誘を1ヶ月近く受けるという、光栄ながらも迷惑な行為を受けた。どうやら彼らは中学時代の俺の噂を聞いてやってきたらしいが、つまりそれだけ有名だったということも言える。

これは唯一胸を張って自慢できることだ。……いや運動できる理由が理由だから胸ははれないか。

だからこうしてクラウチングの姿勢をとっている今も、胸にあるのは不安から来る緊張の鼓動ではなく、自分への期待の鼓動だ。震えているのは武者震いだ。本当だ。

走者たちと少し離れて立っている生徒が、100m先でタイムウオッチを持っている体育教師にスタートの許可をもらうための目線を送る。体育教師はとなりに立つ記録係のほうを見ると、右手を上げて許可をした。

すぐ近くにいる旗を持った生徒は走者——俺たちのほうを確認すると、「いちについて、よい」という胸を高鳴らせる言葉を言うと、勢いよく旗をあげた。

旗が風に抵抗する音を聞くときには俺はすでに地面を向いていた。スタート。周りなんて気にしちやいけないだろうが、俺は3組でど真ん中。つまり囲まれているのだ。正直窮屈さを感じてはいる。最初の低姿勢。このときから既に俺はなんとなく体の異変を感じ取る。なんだろ、足がうまく回らないというか、気をぬいたらすぐに転んでしまいそうだ。

地面が俺を拒んでいる感覚を不審に思いながらも、だんだんと姿勢をあげていく。ここらへんで最高速度まで持って行きたいところだが、なんかいつもより気持ちよくない。

そしてゴール。妙に息が切れる。なんだ？ 俺の体どうしちゃったんだ？

記録係のところにいき自分のタイムを確認してみる。本当は確認なんてしたくないが、そうしないと余計気持ちが悪い。

タイムは13・7秒。そこそこの速いやつなら取れるタイム。いや速いと言えば速いのだが。どうした、俺。中学のときよりかなり落ちてる。いや、まあいいんだけど。これで変な勧誘も完全になくなるだろうし。俺運動部にもはいつてないし。だが悔しいものは悔しい。なんだこの気持ち。

そんな風に自尊心と卑屈心が頭の中をかき回す。今まで自分のことには全く興味がない、などと思っていたが、案外そうでもないのだろうか。

「エン君エン君どうだったー？」

声のほうに振り返ると、既に走り終えていたナキが軽い足取りで近づいてきていた。おそらく良いタイムでも出たのだろう。そして近づいて俺の様子に気がついたのか、口をぼっかり開けた。

「ありやりや、なんか元気ないね。エン君らしくもない」

「うつせーな。ナキには関係ないだろうが」

こいつは全くタイミングが悪いというかなんというか。

「もしかして、タイムが悪かった？」

「……」

そのニヤリと勝ち誇っている面を黙らせようと睨みつける。

「ご、ごごごめんよー！ 怒らせるつもりはなかったんだよー！」
ナキが涙目になって袖にしがみついてくるが、今は鬱陶しくてしかたがない。

「わかった！ わかったから離れる！」

「怒ってない……？」

俺より身長が低いナキが潤んだ目でこちらを見上げてくる。……

これはいわゆる上目づかといってやつじゃないだろうか。

「お、怒ってないから離れる！」

少し顔が熱くなった事へ焦りを感じつつも、上げた腕を振り下ろして無理やり引つpegす。というかなんだこの状況は。まるで喧嘩した恋人同士みたいじゃないか。簡便してほしい。しかし、もし相手がナキはなく、そう、静風さん辺りだったら、こんなことをして

もらえればタイムが悪かったなんてことはどこかに吹き飛んで行ってしまうに違いない。

——ってそうだ恋人同士のようなのだ。正直、ナコさんのおかげなのか、前より女の子らしくなってしまうているが、こいつは男であるわけで、俺にそんな趣味はないので別に何をされても邪な^{よこしま}気持ちにならないし、俺がそう考えていることが当たり前だと思われるにいてもいいはずだ。しかし周りにいる歪んだ心を持っている連中から見れば、あたかも二人が付き合い始めたように見えるのかもしれない。男同士なのに。そう、だから、ということとは——

「かゝやまくうゝん、あゝそびゝましょゝ」

「ぎゃあああああ!!」

地響きのような声が耳に届く。

ナキの背後から手をパキポキと鳴らしながら、巨漢軍隊が獲物を取り囲む野獣のごとくゆらりゆらりと近付いてくる。ギラギラと光る目からは本気で殺意を抱いていることが一目瞭然だった。

「え? どうしたの?」

こいつらのポリシーなのかは知らない——というか知りたくもないが、ナキの死角から近づいてきているので、ナキは全く気付いていない。きよろきよろと回りを見渡して俺が絶叫する原因を探しているようだが、巨漢軍隊は素早くナキの死角にまわるので見つからない。しかしそんな素早さとは裏腹に、近づき方はあくまで、ゆらり、ゆらり、とゆっくりなのだ。怖いことこの上ない。

「お、お前らもうちょっと別のところでその器用さを発揮しろおおお!」

「ラーラララーラ、ラーラララーラ、ラーラーラララーラ、(カーペンターズのsing a song)」

よりによって子供たちが最後のサビで合唱する微笑ましいパートを口ずさみながらくるなあああ!

「エ、エン君、野獣に取り囲まれた獲物みたいな顔をしてどうしたの!?!」

ひし、とナキが再び俺の袖にしがみつく。それを見て巨漢軍隊は目の鋭さが増し、さらに歩を早めた。

「ナキ、お前本当は気づいてんだろおお！」
その時だった。

「エーン！ どうしたー！」

ウミナが異変に気づいたようだ。これでなんとか助かる！ 俺は一瞬安心感を抱いたが、よく考えたらウミナがきてこの惨劇が収束するとは限らない。というかさらに深刻な状況になる恐れだってある。

どうすればいい、どうすればいいんだ。

——と混乱しているといきなり腕を掴まれ引つ張られる。脱出の手段もなく、事態を悪化しかねない助け舟を待つしかなかった俺は、新しい脱出の可能性に力に身を任せて移動する。だがもう一つの可能性、この引つ張っている相手の正体が巨漢軍隊だった場合を考えていなかった。そんな考えが浮かび、身を任せたことを後悔したとき――

「もう、あんまり騒ぎを起こさないでよね」

俺を引つ張った人物は明らかに、巨漢軍隊では出せないような声を発した。それは地に轟く咆哮でもなく、空の下で響く雄叫びでもない。そう、女性の声だったのだ。

声のほうを向く。そのときの俺はきつと安心感と好奇心から緩みきった顔をしていただろう。

「……はて、誰でしょうか」

しかしそこにいたのは全く見覚えのない人物であった。緩みきった顔が固まる。

一瞬大人の香りのする声の雰囲気から、ナコさんが現れたのかと思つて少し期待したのだが（だから顔が緩んでしまったのかもしれない）、ナコさん——ではなくナキは今巨漢軍隊に囲まれて保護（どっちかというと捕獲にしか見えないのだが）されているので最初からその可能性はなかったというわけだ。とりあえず、どうやら巨

漢軍隊は、ナキから離ればもう敵意を見せなくなるみたいだ。

って助かったのだからそんなことはもうどうでもいい。今は目の前のことを考えるべきだ。

俺の眼前にいる見覚えのない少女は、赤ぶちの横に長い眼鏡をかけていて肩ほどまである髪を結んでいる。そして口ぶりからすると、俺のことを知っている人物だろうか。もしくはただの世話焼き……

？ いやいや見ず知らずの人間を助けるなんて、漫画や小説じゃあるまいし。あと考えられるとしたら……”優等生キャラ”とか”委員長キャラ”とか？ ハハッなあーに言っただ俺は意味がわからな——って！

そつだ。思い出した。俺はこの人物を知っている。といつても本当にただ知っているという程度だ。そして会って間もないので、あまり記憶に残っていないかったのも頷ける。だから、つまり、何が言いたいかっていうと、この世話焼き委員長キャラっぽい女の子は、さつき反撃の狼煙を上げていた眼鏡の女生徒じゃないか！？

……しかしなぜだ。こちらからすれば、あんなに目立っていた彼女を忘れていたことがおかしいぐらいなわけなのだが、向こうからすれば印象に残っていたとしても、ただの遅れてきた男子生徒だ。直接助けるなど面倒なことをせずに、この惨劇を完全に無視しやがっている体育教師にでも報告したほうが楽なはずだ。

「……ってかそつか。そうですよね。このキャラじゃわかるわけもないですよね」

表情が一変する。さつきまでのどんな規律も守っているような隙のない顔ではなく、少し傷つけられただけで崩れてしまう小動物のような表情だ。

そのとき俺の記憶の中から何かが引き出されたような感覚がした。そつだ俺はこの顔をどこかで見たことがある。さきほどもまでの鋭い表情をしている彼女ではない、今の優しそうな彼女だ。今日ではなくもつと以前、しかしウミナが来た以降……そんな短い期間の中で会ったはずだ。さきほどもまでの強烈な印象のせいでまだ思い出せず

にいるが、前に一度会ったことだけは確かだと言える。

「えっと、どうすればいいんだろう。……そうだ」

そう言う少女は眼鏡をはずした。そしてポケットに入っていたハンドタオルを取り出してズボンに挟む。おそらくそれはエプロンのつもりなのだろう。そしてそれを付けると少女は「どうですか？」と自信満々な様子でニコリと笑った。

小動物を思わせる小柄な体系に、放っておけないような脆そうだが優しい笑顔。そしてエプロンと邪魔にならないように後ろに結んだ髪。そのとき、”ピンとくる”という感覚を初めて体験した。

俺の中で全てがつながったのだ。

「君……、もしかしてあのときの店員さん!？」

そうだ。ウミナの寢床——もといふかふかベッドを買いに行ったときに唯一俺を癒してくれた存在。(忘れたりわからない人は第十五話(第十七話参照)えーっと、名前は……——

「店員さん」じゃなくて、シモキタザワライ下北沢礼ですよ、エン君」

ニコリとした表情と奇抜な名前は、あのとき俺を癒してくれた人だと確信するには十分すぎるものだった。だが同時に、様々なことが疑問として浮かびあがってくることも、無視せずにはいられないのであった。

第23話

測定不能は認めません―エン×ナキ?編―(後書き)

【次回予告】

結局ウミナはまだ走らず新たな問題が発生。店員さんいや下北沢さんはなぜ委員長キャラだったのか。そしてエンはまた面倒事に巻き込まれるのか。

意見・感想など募集中です。お気軽にどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6117b/>

楽しい事件の巻き込まれ方

2010年10月8日14時39分発行